トリア王国のセリア姫

陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トリア王国のセリア姫

【Ｎコード】
Ｎ７００３Ｋ

【作者名】
陸

【あらすじ】
トリア王国のセリア姫は、その日、劇的な出会いをしました。旅の中で出会ったのは、一人の男。名を、シュウと言います。見詰め合う男女。高鳴る胸。初めて会った、その時から、二人は強い感情を抱きました。
片や、賊徒。片や、王族。あらゆる出来事が二人を阻みますが、両者は共に手を携え、障害に立ち向かうのでした。
国家の陰謀や、人々の争いに巻き込まれながらも、セリア姫は成

長し。また賊徒であった、ただの男も、姫から栄誉を授かる為に、万難を排してゆく。

ある少女と男の、発展途上の物語が。今ここに始まります……。

第一章　賊徒

セリア・トランドは生命の危機に瀕していた。居心地の良い天幕から引き出され、草むらの茂みに押し倒されて、ナイフを首に当てられていた。自慢の栗色の髪も、草の上に広がって、土に塗れる。ここで少し刃を動かしただけで、自分は死ぬだろう。

目の前の男の気分次第で、殺される。そんな立場に追いやられたのは、紛れもなく己の責任。その事実が、悔しかった。

「……よこせ」

ナイフを付きつけた男がうめく。興奮しているのか、所々に負った傷が痛むのか、声がかすれている。何を要求されているのか、よく聞き取れない。

なにより、自分が死ぬ、容易く命を奪われる。この状況が、彼女を現実から遠ざけていた。

「あ、う」

どうにかしなければならないのに、生き延びたければ、抵抗しなくてはいけないのに。

けれどもセリアはなすすべもなく、突きつけられた刃の鋭さと、暴悪なまでに歪んだ男の狂相ばかりを見つめていた。

「聞こえなかったか？」

男は血に塗れた顔で、穏やかに問い直す。どうやら、答えるまで生かしてはくれるらしい。

されどこの体勢で、多少の情けがなんになろう。彼女はなおも沈黙したまま、震え続ける。

男が焦れていたのは間違いないが、現状を維持するにも限度がある。改めて、確かめるようにゆっくりと、彼は言った。

「指揮権を、よこせ」

指揮。そう言われて、彼女はようやく思い出した。たった一時の、死の恐怖。それが彼女から使命と義務を忘れさせていたのだ。

セリアは王族であり、この戦場に兵を伴って、敵と対峙していたはずなのである。今やその兵も残り少なく、傍にはべる者は一人残らず逃げ出したが、戦闘自体が終了しているとは、彼女には思えない。近くに、まだ味方が残っているはずなのだ。

時間を稼げば、誰かが駆けつけてくれるかもしれない。そうすれば、この男を撃退することも、可能ではないか。

「俺に、兵を指揮する権限をよこせば、助けてやる。どうにもならない、クソッタレな負け戦をひっくり返して、お前に勝利の栄光を捧げてやるさ。――どうだ？」

数秒もの間、セリアは彼がなにを言ったのか、理解できなかった。単なる脅し文句ではなく、むしろ自分にとって都合の良い事を、男は要求していないか。

「なによ、それ。……あれ、でも」

その言葉が、セリアを冷静にさせた。言われたことが理解できなかったから、落ち着いて、考えようとしたのだ。……豹変した態度に、助けてやる、という言い方。これの意味する所は、一つ。

「私の味方に、なってくれるの？」

「そうでなきゃ、こんなこと言わねぇよ」

「これまで散々、私の兵を殺しておきながら？　元の仲間を裏切ってまで？」

「兵の損害なんぞ忘れろ、割り切れ。どの道、お前一人守りきれなかった連中だ。……あと、裏切りと言うが、俺にとって本当の仲間は一人だけだ。寝返ったところで、心も痛まん。詳しいことは、そのうち話してやるよ。で？　返答は」

彼はつき付けていたナイフをしまい、敵意が失せたことを証明する。これで、差し迫っていた命の危険も、とりあえずは過ぎ去った。彼がなにを考えているのかはわからないし、自分に敵対していたことも忘れていない。けれど。

「本当に、いいの？　私を捕まえて、手柄にした方が簡単だと思うけど？」

「お嬢ちゃん、いいか？　俺みたいな一兵卒が、巨大すぎる手柄を立てたところで、得られるのは一階級の昇進と、ちょっとした報奨金ぐらいだ。本当の名誉は、俺の上にいる連中が横取りする。それが世の常ってモンでね……勝者に付いて、しみったれた報酬をもらうより、敗者に賭けて、大きな実績と栄誉を賜りたい。俺が考えているのは、そういうことさ」

ちゃんと、利害を考えての行動であるらしい。だとしても、いささか賭けの要素が強すぎて、信用しにくい。少しでも計算の働く人間なら、手堅く動くはずである。ここであえて変節し、敵側に回ることは、以前までの信用を無くすことにもつながる。

それがわからぬほど、馬鹿にも見えないが――それほどセリアが魅力的に写ったのだろうか。しかし、そう考えてもなお腑に落ちない。セリアは探りを入れる意味でも、恨み言を率直に吐いた。

「だったら、初めからナイフを突きつけることなんて、しなくてもよかったじゃない。本当に殺されるかと思ったのよ？　怖かったんだから、泣きそうになったんだからね？」

「へぇ？　脅さなくても、すんなり話を進めてくれたってのか？　こいつは笑える。一応俺は、お前の命を盾にとって、報酬を要求したわけで……わかんないかねぇ？」

男は謝罪しない。それどころか彼女の怒りを煽るように、挑発的な態度を取った。

「何がよ！」

「言い訳を用意させてやったんだよ、俺は。お前は脅されて仕方なく、雑兵の俺に権限を与えるんだ。それで失敗しても、任命責任はお前にはない。全て収まった後で、罪を問えばいいさ。生きて帰れたらな。――こうでもしなけりゃ、雑兵が成り上がる術はねぇだろ？　体面もあれば規則もあるんだから」

確かに、まともな状況であれば、目の前の無法者が兵を率いることなど、そうあるものではない。

――もし彼が、親切丁寧に、私に接してくれたとして……。私は、こうも容易く、話を進められたかしら。……まあ、ちょっとは考えたかもしれないけど、即答はしなかったでしょうね。きっと。

とすると彼は、もっとも手っ取り早い方法で、権勢を得たことになる。しかし問題は、セリアの権威付けがなければ、男は力を振るえないと言う所にあった。

演出が、必要になるだろう。それをつつがなく終えたとしても、彼が指揮権を維持する為には相応の働きが必要であることはいうまでもない。

これは、上手くすれば自身の利益にもつながるのではないか……。

とっさのことで、あまり思考が進まないが、セリアが選べる選択は、そう多くない。特に、この抜け目ない男を使わずに生き延びることは、至難であると思われた。

ならば、どこまでも彼の野心を利用する方向で、動くべきである。そんなに栄華を誇りたいなら、好きなだけ手柄を立てさせてやればいい。結果として、セリアは生き残ることが出来るだろう。

「わかりました。では、お願いします。……私を、助けてください」

率直に言って、味方が足りない。敗北の真っ只中にあるこの状況では、そもそも男の申し出を断る方が難しい。彼の目を見返して、セリアは懇願した。これを見ると、男は口の端を吊り上げて、邪悪に微笑む。

「決まったな。思っていたより、腹が据わっている。しかも案外冷静じゃないか？　普通、良家のお嬢様は、こういうときには状況もわきまえずに泣き叫んで、現実から逃避するもんだぜ？」

「そういう御目出度い女を『お嬢様』というのなら、私は違いますわ。……少なくとも、そんな可愛げは、今の私には必要ない。お望みなら、もっとしおらしく致しましょうか？」

「結構、阿呆でなくて何よりだ。……ああ、それから俺に対しては、下手に出る必要はない。平然としていろ。敬語なんざもってのほか

だ。でないと、俺の方が疑われるからな」
「そう、わかった。……一応、礼は言っておくわ。見返りも、考えておくから」
男の野心に利用されるだけの、この状況。どうやっても彼を拒絶する手は、選べないが……せめて気迫だけでも負けまいと、正面から見返した。
そうして見ると、今まで男の容姿など気にもしていなかったが、よく確認すれば、なかなか悪くない顔である。
刺々しく、硬そうな黒髪が肩まで伸びているが、眉目を隠すほど収まりは悪くない。その瞳は鉄色で、全体の印象からか、猛禽のような鋭さまで感じさせる。しかし鼻から口元、そして顎の曲線に至るまで、当人の凶暴さとは裏腹に、上品なまでに整っていた。
体躯は筋肉質だが、どちらかといえば細身の部類だろう。返り血もこびりついているが、嫌悪を抱くほどではない。肌から垣間見える細かな傷跡は、この戦場で負ったものか。痛々しくは思うが、これを弱さの証明とするには、彼は生気に満ち溢れすぎていた。鎧の防御より機動を重視した軽装のいでたちは、より印象深い。
これで気品さを備えていれば、貴族といっても疑われぬであろう。それほどまでに、素晴らしい男振りであった。
「了承したと、受け取るぞ。いいな？　君主と将が深い絆で結ばれているように、俺がお前の傍で兵を指揮することは、当然なんだと。そう皆に意識させろ。その権威を、俺が利用させてもらう」
呼びかけられて、はっ、とする。
「わかったら、立て。ほら」
彼に手を貸してもらい、セリアはよろけつつも、自分の足で立ち上がった。服に草が付いていたので、ついでに払う。汚れてはいるが、正装としての見栄えまでは損なわれていなかった。虚勢に過ぎないが、体裁を整えるだけで、自分に降りかかった災難を退けた気分になる。
「おい」

「なに……って、あ」
「ほら……顔、泥が跳ねてたぞ。女なら、自分の器量にはいつも気を配っておくもんだぜ？」
どこから取り出したのか、男はハンカチでセリアの顔を拭いた。誰のせいだと思っているのか、と言い返してやりたかったが、とっさの出来事だったので、拒むことも出来なかった。
「よし、綺麗になった。――なんだ、案外可愛い面をしてるじゃないか。その顔で哀れみをこえば、男はたまらず庇護欲を掻き立てられるだろうよ」
セリアは、己の外見に自信がないわけではなかった。十七歳という年齢は、未熟ではあっても、女性としての瑞々しさに溢れた年代である。
平均より一回り小柄な身長に、この年齢としては最上といってよい、肉感的な魅力を備えていた。それでいて体全体の調和が保たれており、不自然さを感じさせない。顔の造形も、子供から大人へと脱皮していく、その段階における未完成の美しさが現われていた。セリア自身、同年代の少女たちと比べて、頭一つぬきんでているという自覚くらいはある。
「ま、兵を鼓舞するにはうってつけだろう。その可憐さは一つの武器だ。せいぜい、有効に活用させてもらうとするか」
しかし、男にとっては、利用価値を見出す程度の代物に過ぎない。それがどうも、気に食わなかった。
「……そう。それは良かったわね」
「まったく好都合だ。――ああ、そういえば、自己紹介もまだだったな。俺の名は、シュウ。元盗賊の傭兵で、さっきまでは一兵卒。そして今は、お前の将だ。今後とも、よろしく頼むぜ？」
シュウ。その名を、セリアは心に刻み付けた。好意を抱いた、というわけでは、おそらくない。
きっと、彼の名は、生涯忘れられぬ物になるだろう。そういう予感が、あっただけだ。

「シュウ、ね。私は――」
「セリア・トランドだろ？　西の強国、トリアの王族で、現状では二番目の王位継承者。周辺の国家と違って、トリアには女子が王位を得た歴史がある。だからこそ、庶子の姫でも権威は認められるんだろう。――少なくとも、前線に持ってくれば、兵の奮起くらいは期待できる程度には。違うか？」
　セリアのような少女でさえ、戦を厭わず出てきているのだ。いくらかでも外聞を気にする男であれば、これを放置して敵前逃亡など、なかなか計れるものではない。
　直前に手痛い負け戦を経験し、余裕を失ったトリアは、こんな下策でも試さねばならぬほど追い詰められていた。彼女がこれを受け入れたのも、その現状を知っていたからだ。
「ええ、まあ、合ってるけど。……そういえば、強国だったのよね、トリアは」
　シュウの言葉は正しい。事前に調査していたのは、間違いあるまい。彼がセリアをさえぎってまで、説明的な口調で話したのは、この調査力を強調したかったのか。
　だとしたら、妙に自己主張の強い男ではないかと、セリアは思った。もしかしたら、彼の行動は突発的なものではなく、計画的なものであったのかもしれない。流石にこの場で追求しようとは思わないが――。
「その強国も、ちょいと前の大敗と、今日の負け戦でどうなるのかねぇ？　一度落ち目になれば徹底的に叩かれるのが、世俗の常識ってもんだ」
「……あいにく、俗世には、うといの。それでも、貴方が常識外れの人間だってことはわかるけど」
　厳しい顔で、彼女はシュウを睨む。その意図を彼は正しく理解し、答えた。
「ああ、信用しろ。――ともかく、生き残ることだ。富貴を楽しむにも、喧嘩を売るにも、命がなければどうしようもない。勝つ算段

は、その後だな」
「出来るものなら。……あてはあるの？」
一旦思考を打ち切って、セリアはシュウに問うた。彼の行動原理など、今は詮索している暇などない。
「手はある――が。その前に、体調はどうだ？　気分は悪くないか？」
「何よ、いきなり気持ち悪い。……別に、けがをしている訳でもないし。それより、本当に大丈夫なんでしょうね？」
なにも考えずに行動を起こすほど、シュウとやらは阿呆ではあるまい。当然、これからの動きについて、ある程度は目算を立てているはずだった。そうでなければ、セリアは愚か者を頼った事になる。それだけは、認めたくないことであった。
「まあ見ていろ。――さて、良い頃合だ。まずはあいつを呼び寄せるか」
シュウは、懐から小さな笛を取り出して吹いた。長く、そして高く響き渡る音に、耳を塞ぎたくなる。
「それ、緊急連絡用の……あれ？　でも、それっていつ手に入れたの？　しかもその合図、『ここに集え』ってことよね。敵の存在が確認されていない、行軍中にしか使わない合図なのに」
「物は使いようってな。敵も味方も、今の音には気付いたろう。総退却の前に一働きしないと、今後に響く。――敵の軍勢が迫るのが早いか、仲間が兵を掻き集めて来るのが早いか、運試しと行こうぜ？」
敵には、今の音がなにを意味するか、理解できていないはずである。だが、異変を感じ取って、探りに来る可能性はある。現状、セリアの傍にはシュウと、交戦中の兵士しかいない。充分すぎる戦力を持って、戦闘を前提とした偵察隊に来られたら、その時点で終了だ。二人とも、生きては帰れないだろう。
「ここで運に見放されるようじゃ、どうせこの後も上手く行かんさ。覚悟を決めたのなら、最後まで付き合えよ？」

「……家に帰って、昼寝でもしたい気分ね」
「果報を待つにはまだ早いな」
「やけになってるのよ。わかりなさい、それくらい」
「俺を信用してくれるんじゃなかったのか？　わかれよ、それくらい」
　そうして、二人は待った。賭けに勝ったことを知るのは、ほんの数分後のことであったが、それまで生きた心地がしなかったというのが、セリアの正直な気持ちであった。

第一章　賊徒（後書き）

あらすじについて。
ついカッとなってやった。まだ反省はしていない。

……失敬。筆者の陸です、こんばんは。でも嘘は書いていないので、きっと問題ないでしょう。
こんな小説を書くようになった、そのきっかけは。最初、単なる思い付きでした。
「指揮権をよこせ」という冒頭のやり取りが、全てです。これを書きたかっただけで、後は全部その場のノリ。おおまかなプロットの他は、後で整合性をつければいいや、という程度の考えで、執筆しています。ですから、割とひんぱんに改訂が入るかと思いますが、出来れば気にしないでやってください。

正直、この作品を書いた「きっかけ」からして、あまり褒められた物ではないかと思いますが……せっかく書いたのだから、見て欲しいという思いがありました。
それをどうにも押さえられず、こんな形で公開する事になりましたが、読者の皆様を楽しませる内容になっているかどうかは、自信がありません。

初投稿の上、この通りの未熟者ですが、温かく見守っていただければ、幸いに思います。
続けて投稿する予定ですので、今しばしの間、彼女らの物語をご堪能ください。
では、また。

第二章　過程

兵の集結を待つ間、セリアはどうしてこんな状況に追い込まれたのか、改めて考えることにした。近くに、潜むには都合のいい森林地帯があったので、そこで待つ。味方にも発見されにくいのではないかと思ったが、シュウは問題ない、と言う。あの合図でこちらを見つけられる程度には、有能な配下を従えているのだと、彼は答えた。

『あいつ』とやらが誰かは知らないが、大きな信頼を寄せている相手がいるのは確からしい。セリアとしても、天運に任せたなら、どこまでもそれに従うしかない。

度胸と言うか、自暴自棄と言うか。少なくとも彼女自身、やけになっているという自覚はあった。

ともあれ、彼女は一時思考に集中することで、現実から目をそむけようとする。そのうち我に返ったら、現実を直視することを決めた上で。

――何かが狂ったのは、私の父が王位についてから。偉大な祖父の死が、全ての元凶だったように思う。

セリアは、祖父のことはおぼろげにしか覚えていない。いつも忙しそうで、顔をあわせる機会もほとんどなかった。たまにその機会が訪れても、会話することさえなく、遠目から拝謁を許されるだけだったのだから。

祖父は基本的に、家庭を大事にしない人だった。それでも、あの人がいたからトリア王国は繁栄した、と言っていい。

傑物であり、天才であり、そして何より強い王であった。家庭人としての資質と、王としての資質は、必ずしも両立しないのだという事実を、強く意識させる人でもあったのだが。

ともかく、父がそれを衰退させた、と言う事実もあわせて考えれば、セリアは複雑な気分にならざるをえない。祖父と父が、もっと親子らしい、理解し合える関係を築いていたならば……どれほど幸福な未来が、用意されていたことだろう。彼女は、それを残念に思う。

賢王グレイ・トランドの後に続くは、不肖の息子。オルス・トランドは、前世代の遺産を食い潰し続けた――という一点をもって、後に暗愚と評されるだろうと、彼女は半ば覚悟していた。

娘である自分の目から見ても、あの父は、とても尊敬できるような存在ではない。肉親としても、君主としても。

その己自身とて、さほど才に恵まれたという実感はない。オルス・トランドで九代目。もしかしたら、このセリア・トランドが十代目の国王になるかもしれないが、だとすればトリア王国は自分の代で終わるのではないか、と不安になってしまう。

――私だって、そんなに優れた人間であるとは、思わない。あの父にして、この娘あり……か。もう、どうしようもないのかも。

そもそもの元凶を、責めるならば。どうして、父は祖父ほどの能力を持って生まれなかったのかと、やくたいもない愚痴をこぼさねばならぬ。いや、才能がないのは仕方ないとしても、謙虚に生きることを知っていれば、ああも見事に失政を続けなかったであろうに。

自己顕示欲に塗れなければ、自尊心を抑制することが出来たなら……。全ては繰言に過ぎないが、それでも嘆かずにはいられない。

――強すぎる前王の影が、父を歪ませた。貴方は大きすぎたのです、お祖父様。

父は、その大きい背中を見て育った。あの人のようにならねば、

と思い、あの人に認められたいと思っていた。……そのように、セリアは母から聞いていた。

だから、であろうか。父は、祖父でさえ完遂できなかったことに挑戦し、己の力を証明しようと試みた。内政においては、国民の生活向上を。外交においては、国威の更なる拡大を。この目的自体は、善行と称してよい。

もし、充分な時間をかけて、これらの難題に取り組んだならば、一定の成功は収められたかもしれない。当時のトリア王国には、それだけの底力があった。

けれど、父は急ぎすぎた。我が強く、何事につけ、自分の能力を見せ付けたがる性格も災いした。セリアは、それを今更ながら、残念に思う。

――根拠なき自信を前提に、己の弱さを認めず、諌言を無視し続けて。有能な臣下を疎んじ、人の理解を求めなかった。なのに、お父様は、成功を、自身が賞賛される未来だけを求め続けた。私が知る限り、一度も反省することなく。

結果、オルスは失政を続けた。とにかく短期的にでも、目に見える成果を欲しがった彼は、性急に改革を推し進めたのだ。改革といえば聞こえは良いが、実際には彼の独創を実現させただけに過ぎず、専門家の意見さえ取り上げない有様である。

歴史上、他に悪政やら暴政やらを強いた国王が、いなかった訳ではない。彼がその中で、格別に劣悪だったとも、やはり言えないだろう。ただ、時期が悪すぎた。

先代のグレイ・トランドは偉大であったが、その治世の最後に隣国との外交に失敗し、これを挽回せぬまま死んだ。息子であるオルスは、その負の遺産とも戦わねばならなかったのだ。

――特に、元々仲が悪かった、ガレーナとタークスの両国。父はそれをわきまえていながら、対応を誤った。

国家同士の付き合いにおいて、近くにある、というだけでも、衝突する理由には事欠かない。遠国への遠征と違い、互いに隣接していれば、一寸切り込めば一寸の領土が、一里踏み込めば一里の領地が手に入るのだ。大望を身に宿す者であれば、まずは近場から攻めて、利益の得やすいところから奪っていきたく思うもの。

それでなくても、近くにいて多くの人が交流を試みれば、いくらでも利益の衝突は起こりえる。限られた資源を奪い合う相手として、まず隣人を警戒するのは、自然の成り行きであった。

セリアはそこまで強欲にならずとも……と考えるのだが、賢王と呼ばれるグレイにも、人並み以上の欲望と野心があったらしい。晩年はガレーナとの小競り合いを繰り返し、僅かながらも汚点を残して、大望を果たすことなく力尽きる。

そして間の悪いことに、その後を継いだオルスは強き王、と言う幻想を追い求める男だった。腰の低い外交姿勢など、到底容認できる物ではなく、どこまでも自国の利益を優先したがった。また、あえて戦争を引き起こし、それを制することで威信を得ようとした節もある。

結果、話し合いでの解決をすっ飛ばし、強引に武力で捻じ伏せる手を選ぶ。オルスはガレーナへ侵攻し、両国は戦争へと突入した。これが、後に致命傷に繋がることとなる。

――父が犯した失敗は、第一に国内に不満を蓄積させたこと。第二に己の力を頼みすぎ、他者の諌めを聞き入れなかったこと。そして最後に、覇者たらんと欲し、自ら争いを追い求めたこと……かしら。

セリアが未熟なりに分析した結論が、それである。最終的な評価は、後世の学者に判断を委ねるべきだが――おそらく、大きくは外

れておるまい。
　オルスの即位後、三年。国内の整備と戦争の準備に要した時間としては、短いとも長いとも言いづらい。戦争は勝てば全てが正しくなるし、政策は長期的に見なければ結果が出ないものもある。
　そして、これは彼が経験する初めての戦争であり、最後の出陣ともなったのである。
　元々、オルスは軍事的才能に恵まれていたわけではない。グレイ王の代では、戦場で経験を積む機会がなく、留守を任されていただけだった。従軍した息子（セリアの兄）も勇武に優れていたが、同様に知識でしか戦争を知らなかったのだ。
　自然と、前代のグレイ王からの宿将が、場を取り仕切り始めたのだが――。あの二人には、それが不満であったらしい。
　グレイと同等か、それ以上の戦巧者だと、知らしめようとしたのだろう。進路から陣立て、戦線の構築から、細かな戦術に至るまで、オルスは自己流のやり方をつらぬいた。
　実績のない人間が打ち立てる理論。しかも経験の裏づけがない行動である以上、上手くいくはずがないのだが、オルスは『自分ならば出来る』と思い込んだ。
　彼は実際に有効であるかどうかではなく、自分の権威を末端にまで浸透させることを重視していたのだ。いかに王命とはいえ、これでは反感を持たれて当然である。
　それでも、勝てば良かった。勝利さえすれば、不満も押さえ込めるし、逆に支持さえ受けたかもしれない。
――けれど、負けた。この上なく、無様に。結局、お父様は、死ぬまで反省しなかったのかもしれない。だとしたら、悲しいというか、哀れだと思う。
　このガレーナとの戦争で、父は敗死し、兄は捕縛された。
　それも、初戦で。彼自身が、『様子見の戦い』と称した戦闘で、

トリアは取り返しの付かない敗戦をこうむってしまったのだ。
多くの将兵が巻き添えとなり、他国の土となった。そしてガレーナは余勢を駆って、トリア国内にまで攻め込んできている。迎撃するだけに留まらず、積極的に侵攻へと切り替えてくる辺りに、ガレーナの王の性格がうかがえよう。
ガレーナもトリアと同じく、代替わりしたばかりのはず。戦争を通じて、名声と実績を得ようと臨むのは、何もこちらに限った話ではない、ということか。

お互いの事情はともかく、国家が生き残る為には、他国の侵攻を押し留めなくてはなくてはならない。たとえ、国王が不在であっても。
そうして、担ぎ出されたのがセリアである。彼女には弟もいたが、こちらは病弱で軍を率いられるような体ではない。戴冠式さえ済ませていない、女の身であっても、とりあえず健康で国家の象徴となる人材であれば、それでよかったはずなのだが。

――続いて、二度目の敗北。私は結局、何もしてないのだけど。こうなっては、こちらの将帥が無能揃いなのか、敵が有能すぎるのか。判断に困るわね。

今回は、父がぐちゃぐちゃに掻き回した軍を改めて整備し直し、万全の体勢で迎え撃ったはずなのだ。セリアはお飾りとして後方にいたから、詳しくはわからないが……自分がいる後方にまで押し込まれたのだから、決定的な負け戦であることは間違いない。
そして現在、頼みにできるのは、あのシュウとか言う男だけ。なんとも不安であったが、もはや贅沢は言っていられない。
戦意の残っている味方がいて、まだ勝算が消えていないなら、戦わねばならないのだ。少なくとも、王族はそんな義務を背負う為に、戦場にいるだから。

「来たか。どうやら、俺たちは賭けに勝ったらしい」
シュウの言葉で、セリアは我に返る。いつの間にか、剣戟と叫び声が入り混じった、戦場の旋律も消えていた。これはつまり、周囲の戦闘は、すでに終わったことを示している。
もう、現実を直視する段階であった。過去は過去として脇に置き、現状を乗り切らねばならない。彼が自分にを刃を向けたことさえ、今は忘れるべきであった。
「よう、レックス。首尾よく兵をまとめて来れたようだな。普通なら、殊勲一等ものだぜ？」
「冗談はよしてください、シュウさん。俺は戦力を用意しただけで、実際に運用するのは貴方だ。これで一手柄立てられれば、そちらの方がより大きな手柄になりますよ」
シュウが、レックスと呼んだ男。外見は二十代前半で、顔形は優男のようだが、体つきは太く鍛え上げられており、軍人として申し分ないものであった。服装もシュウとは違いきっちりしていて、正規兵と変わらないように見える。
もっとも、彼のような人物と知り合いなのだから、両者共に同じ穴の狢、と考えるべきだろう。過大評価はつつしむべきだし、さりとて油断してよい相手でもあるまい。
「まあ、そんな大きなことも言えませんかね。なんとか集めてこられた連中は、二百人そこそこ。少ない数ですが、今は隊列を崩して、森の中に潜ませてあります。命令があれば集合させますけど、如何します？」
確かに、彼の背後には、兵の気配がいくらも感じられる。物騒な戦いの音はやみ、今は人々の生きるざわめきが、それに取って代わった。
今隠れている森林地帯は、二百名程度なら、覆い隠せるほどの広さがあった。セリアは確認していないが、それだけの兵が、近くにいるのだろう。
「その二百人、どさくさに紛れて逃げ出したりしないか？」

「ぬかりなく、根性の悪い奴と性根の捻くれた奴を厳選してます。顔馴染みの傭兵も混ぜてありますんで、大丈夫ですよ」
「敵に振り回され続けて根性が悪くなった奴と、やられっぱなしで捻くれた奴だな？　当然のように復讐に望めるような、素敵な野郎どもに違いないだろうな？」
「もちろんですとも。目が死んでるような奴は、一人もいませんよ」
　王族であるセリアの元に集ったのか、兵権を与えたシュウを慕ってきたのか、それはわからない。なんにしても、夢ではなく、現実として、散ったはずの兵がここにいる。これがレックスとやらの実力なら、たいした物だといってよいだろう。
　二人の間にどんな関係があるのかは知らない。ただ会話の内容から、シュウの部下であるのだろうと、察することはできた。
「ふむ。二百、ね。充分だ……と言いたいところだが。さて、どうかな。微妙な所か」
　シュウが顎に手を当てて、考えるそぶりを見せる。セリアとしては、ここで明確に、大丈夫だという保証が欲しい。疑問に思った彼女は、早速シュウに問いただした。
「二百人じゃ、足りないの？」
　近くにいるであろう、兵たちをはばかってか。シュウはやや声を抑えて、答える。
「一事の戦勝に沸き、あちらさんが調子に乗ってるところで、出鼻をくじく。それくらいなら、どうにかやれるかもしれない。が、当然全滅は覚悟しなけりゃならん。いや場合によっては、それも不可能かもな」
「どうして？」
「事の成否は、あんたが握ってる。自覚はないんだろうが、この場ではあんたが最高司令官だ。やるべきことをやってもらって、それでようやく五分だ」
　セリアはもう、兵権を与えた気になっている。この上、まだ何かやるべきことがあるのか。彼女はこれ以上、なすべき事があるとは

思えなかった。
「お前、俺の方ばっかり見て、兵の顔も見てないだろ？　せっかくの機会だ、命を託す連中の顔ぐらい、ちゃんと覚えてやれ」
「……それ、つまり兵を鼓舞しろってこと？　やっぱり、顔を出さない訳には、いかないのかしら」
　顔を覚えろ、と言うことは、それだけ長い間、兵の顔を見つめろと言う訳で。しかしセリアほどの王族が、何の意図もなしに兵個人を注目することなど、まずありえない。
　ゆえに、そこには打算が働かねばならぬ。セリアと兵どもを接触させ、この負け戦の中、彼らに守るべき物を認識させる。彼らの中に大義を作り、士気を奮い立たせること。それがお前の役目だと、シュウは言った。
「出し惜しむような面でもないだろ。……気取らなくていい。お前はそのままでも充分魅力的だ。とりあえず、兵から庇護欲を引き出す程度にはな？」
「……喜んでいいのかな。褒められてる気がしないんだけど？」
「おおいに褒めているとも。利用されるってことは、それだけの価値が認められてるってことでもある。せいぜい、その可憐な容姿で兵どもを惑わすこったな。同情でも憐憫でも、戦意を呼び起こしてくれるなら、この際は有用だ。――頑張れよ」
　生き残りたければ働け、とシュウは付け加えた。
　そして、彼女は否応なしに、兵の前へと引き出される。そこに、否定は許されなかった。シュウにしても、生き残ることに必死だったからであろう。セリアも、これには理解を示せる。
　生き延びたい、という思いは同じ。ならば打てる手は、全て打っておきたかった。

※

「無理はしないでくださいよ。重荷になるくらいなら、やらなくて

いいんですから」
　レックスは優しい言葉をかけてくれたが、セリアにも意地と言う物がある。シュウに『何も出来ない奴』と見下されることだけは、我慢がならなかった。
　やれと言われたことくらいは、やってのけよう。実績も能力もない彼女にとって、ある意味これは、良い機会であった。
　今までセリアは、何も成し遂げたことがない。もし、この場で勝利に必要な条件を、自分の手で作り出せるのなら。それは、立派に役目を果たしたことになる。
「大丈夫。何とかやって見せる。第一、ここで逃げたら私、自分を許せそうにないもの」
　そうして、彼女は兵の前へと歩み出る。散らばっていた兵どもは、今、このとき。彼女の言葉を聞くため、この場に整列していた。
　二百人もの人間に注目されることは、セリアには初めての経験だった。お飾りにされて戦場に出てきた時さえ、まともに兵の顔を見ていなかった。
　シュウが無言で、目線だけで彼女の発言をうながす。彼とて、ここで生き残りの王族が、口を開くことの意味を承知していたのだ。
「私は、セリア・トランドと申します。見たことがある人も、そうでない人も、私の顔を覚えてください。私も、あなた方の顔を忘れません」
　不可能だ、と思う。自分はできもしないことを口にしていると、セリアは自覚していた。彼女の記憶力は、二百人の顔と名前を瞬時に刻み込めるほど優秀ではない。適当に隊列の合間を練り歩き、それぞれ確認して回ったが、やはり一度で覚えるには無理がある。
　それでも、他に気のきいた言葉が思い浮かばず……それがなんとも、歯がゆかった。
「我々は今、負けています。でも、このまま終わらせるつもりも、ありません。どうか皆さん、そのために、力をお貸しください。お互いに生き残り、故郷へと帰りましょう」

稚拙な文言。その自覚はあっても、黙り込むよりはいいのだろう。
緊張して、声が震えたり、吃音の症状をさらさなかっただけでも、セリアは自分を褒めたくなった。
「私が求めるのは、帰還するために必要な労力。それをあなた方が発揮してくれること。二つ目に、私が信頼する人を信じ、彼の指示に従うこと。以上です」
信頼する、というには御幣があるかもしれない。実際、セリアはシュウのことを、ほとんど理解していないのだから。
ただ、寝返りを公言した以上、この場でもっとも功にはやらねばならない立場に、シュウはいる。今さら元の部隊には帰れないし、逃げを打つには、釣った獲物が大きすぎる。ゆえに、彼は力を尽くして戦わねばならない。それくらいはセリアにもわかるし、この点まで疑っては、あまりに救いがない。

――悪人には、違いないだろうけど。でも、ここで私に賭けてくれるなら、その人にこそ、私の全てをゆだねるべきなのだろうと思う。

セリアに自覚はないのかもしれないが、ともかく一番頼りとすべき人物を、彼女は見誤らなかった。いくら惜しんでも、死んだ味方は、二度と彼女を助けてはくれないのだから。
「皆さんにご紹介しましょう。彼が、以後の指揮を担当します。彼の命令は、トリア王家の命令と心得てください」
「――と、言うわけだ。俺はつい先ほど、王女殿下によって任官し、貴様らの上官となった、シュウという。この戦いに限るが、俺は戦場における指揮権を譲渡されている。俺の言葉は殿下の言葉として受け止め、指示に従うこと。よろしいな？」
見ず知らずの男に指揮されるということを、兵たちは意外なほどあっさり受け入れた。
お互いにバラバラの隊からの寄せ集め、いわば烏合の衆であり、個人個人がそれを理解していたこと。また、彼らも見知った仲間が

ほとんど見いだせなかったことが、彼らの精神によく作用していた。シュウやレックスの仕込み等より、これらの方がよほど重大な要素であったろう。

とにかく、軍隊は消耗が前提の組織である。こうして反撃を企てる以上、選り好みせず寄せ集めて、戦力としての体裁を整える。それが理に叶っていることを、兵たちも理解していたのだ。この際、上に頂く人物が多少風変わりでも、有能でさえあれば容認される。

「生きて帰る。一矢報いる。両方ともこなしたければ、シュウを頼ってください。それができねば、命の保証は致しかねます」

どこの誰かは知らないが、王女が言うなら間違いはないのだろう、と。兵どもは思考を放棄した。彼らには知る術もないことだが、まさか元敵軍の兵卒が、この場を支配しているなどとは思うまい。誰もが異論もなく、これを受け入れた。

セリアに威厳があったとか、演説が上手かったとか、そういうわけでは、無論ない。

ただ、兵はここで反抗心をもたげるほどの気力もなく、状況に流されることを選んだという……それだけの、ことであった。

「結構。では、まず我等はこれより、反撃に転じる。戦わずに逃げることは出来ない。それで助かるのは、せいぜい今日一日の命。追撃を続ける敵軍は、いずれお前たちが住む集落にまで攻め入り、お前たちの家族もろとも、すべてを蹂躙するだろう」

付け加えるならば、シュウ自身が命令慣れしており、実に偉そうな人間であったことも、疑いをもたれなかった理由の一つだろう。彼は自信にも満ち溢れていたから、余計に演出が映えて見えた。

この点、セリアも彼がただの盗賊、あるいは傭兵だったとは思われず、いつか出自を詳しく聞いておきたいと思うほどだった。

「これは、守るための戦いだ。上手くやったら、すぐに撤退する。後の本格的な反抗については、ここにいる王女様と、後方の参謀どもに任せればいい。……なんにせよ、この戦いを生き延びてからのことだ。納得したら、早速動こうか」

「シュウに、全て任せます。見事、勲功を立てて帰還が成った場合。褒賞は、充分に与えましょう。通常の十倍の実入りを期待してくださって、構いません。――ご武運を」
　言うべきことを、セリアは全て言った。シュウはそれから、レックスを副官に任じて、兵を動かす手伝いをさせた。さり気にセリアを兵から引き離し、二人きりになれる状況を作ることも、忘れない。
「即興の、台本なしの演技としては上出来か。まあ、ここまで来れば、お嬢はもう用済みだ。ここにいられても邪魔だから、先に王都に戻ってな」
「……勝手だこと」
「お前さんに、戦場は不似合いだ。おとなしく守られてろ。どうせ、手伝えることもないんだ」
　正論であった。確かに、セリアは士官としての訓練を受けていないし、武器の扱いすら知らない、ひ弱な少女でしかなかった。
「でも、皆が苦労しているのに、私だけ安全な所にいるなんて、不公平じゃない？」
「悪いが、お前の命の価値は、この場にいる誰よりも大きい。王族である自覚があるなら、まずそれを理解しろ。……ま、一緒に苦労しようっていう考え方は、嫌いじゃないがね」
「でも、私、戦争を何も経験してない。兵の動かし方も知らないし、敵の顔だって……貴方は別として、見たこともないんだから」
　彼女は彼女なりに、責任を果たしたいと、そう願っていた。セリアが十七歳の少女であることをかんがみれば、この勇気を振り絞った発言は、賞賛に値しよう。
「またの機会にな。今、足手まといを抱え込む余裕はない。第一、お前さんがきちんと生き残ってくれないと、褒美も何もありゃしないんだからな？」
「……うん。でも、私がこの争いの中心にいるべきなんだって。トリアの王族として、責務は果たさないといけないんだって。それくらいは、自覚していたい……から」

上手く、言葉にならない。セリアは、自分なりに己の義務を果たしたいと思い、付いて来てくれた者たちに報いたいと考えている。これを勇敢と捉えるか、無謀と捉えるかは、人それぞれだろう。

「あまり気負うなよ？　そもそも王ってのは、自分より有能な奴を使いこなすのが仕事だ。実務、実戦にまで強くなる必要はない。……お前は、責任を理解して、それに応えようと頑張ってる。今は、それで充分だ」

シュウは、彼女の意気込みは認めつつも、同行は許さなかった。自身の為であり、彼女の為でもある。

「子供はさっさと家に帰りな。なーに、すぐに朗報を持っていってやる。わかったら、褒美の準備だけは、しっかりやっておけよ？」

セリアも、これ以上は反論せず、護衛の兵と共に王都へと向かった。

こんな時、乗馬だけは習っておいて良かったと思う。馬が一頭あれば、とりあえず近場の駐屯地までは安全にたどり着けるだろう。

補給と伝令の為の道は、戦争以前より整備されているので、この点に不安はない。

多少の兵は各地に配置されているし、これを掻き集めれば……治安は悪化するかもしれないが、ちょっとした戦力になる。後は王都まで、残兵を引きつれて戻ればよい。

「なるべく見込みがある奴をつけてやるから、帰りはしっかり話し合っておけ。王族が下々の者と交流するには、またとない機会だ。ついでに現実の厳しさを教えてもらうが良いぜ」

「現実の厳しさくらい、身に染みているわ。子ども扱いしないで」

「どーだかな。ま、その内に追いつく。今度会う時は、お互いに違う立場で話をしようじゃないか」

シュウの言葉は示唆に富む物で、完全に理解することは難しかった。詳しく追及しようとも思ったが、彼には殿軍を務めるという大任がある。無駄に出来る時間もないので、これ以上は話さなかった。

思えば、怒涛のような一日であった。戦い、負け、脅された後に

励まされ、今はこうして帰路についている。一度に思い起こそうとしても、なかなか出来ないほど、密度の高い出来事に溢れている。これから自分がどうなるのか。なにを決断しなければならないのか。不安な事はいくらもあったが、今は考えることさえ、億劫だった。

第三章　転機

「とりあえず、見栄は張ったが」
「ここからが問題ですね。発破をかけて、危機を自覚させた。あとは、戦って勝つだけですが――さて、どうしたもんでしょうか」
セリアは帰ってからのこと、戦いの後のことを考えればいいが、シュウとレックスはここからが本番である。
時間的余裕のある彼女とは違って、二人は速やかに善後策を練り、行動しなくてはならない。具体的な指示も、自分で考える必要があった。
もっとも、シュウは自分の裁量で動く兵が欲しかったのだし、その為にわざわざ回りくどい手間をとってまで、権限を委譲させたのだ。これは願ったりの状況だとも、言えるはずであった。
「今更白々しいことを言いくさる。――決まってるだろ。嫌がらせだ」
「流石はお頭。すでに腹案がありますようで」
「わかっていやがるくせに。……と、言うわけだ、お前ら。まずは安心しろ。この数で敵と戦えとか言わない。俺は、お前たちにもっと楽しいことをさせてやるつもりだ」
総勢二百余名。今はセリアに付けている三十名を除くと百七十名程度。小細工を弄したとしても、よく残った。よく集まってくれたと、そう言わねばならないだろう。だが彼らの士気は、セリアの存在で多少向上されたとしても、そう高くはない。この上無茶をさせれば、躊躇いなく逃げるだろう。玉砕を感じさせるような命令には、誰も付き合ってはくれないはずだ。
だから、シュウはいかに兵にやる気を出させるか、いかに消耗を抑えて、敵軍を悩ませてやるか。その方面に、心を砕くべきだと考えたのだ。
「俺たちがやるのは、略奪だ。――もちろん、敵軍に対してだぞ？

連中の補給部隊を襲い、奪う。あるいは陣に夜襲を仕掛けて、火を放つんだ。楽しそうだろ？」
まず、恐怖を払拭してやる。無理でも無茶でもなく、そこそこの手柄と実益を期待できて、なおかつ命の危険が少ないであろう戦いを、シュウは提示した。
「正規兵としては、盗賊みたいで嫌になるかもしれないが、これも戦術だ。出来るだけ、人死にも避けたい。生きて帰りたければ、そして少数の利を活かして、奴らに痛手を与えたいなら……この手しかない。まずはそれを、理解して欲しい」
この場でシュウを否定する者はいない。セリアが直々に、正式に任命した士官に対して、真っ向から反発できるほどの気概など、誰も持っては居なかったのだから。
なにより、彼を否定するからには、それ以上の策を持ってこねばならないわけで――そこまで有能な人間は、初めからレックスの選別から漏れているはずなのだ。
シュウもレックスも、己の都合で生き、戦っている。そこに不都合な存在を紛らせるほど、彼らは寛容ではないし愚かでもない。
「成功すれば、朱勲一等だ。俺が保証する。……いや、セリア様が保証してくださる。だから今は納得して、俺に従って欲しい。――いいな」
それは穏当なお願いなどではなく、単なる確認であった。己の身を第一に、敵前逃亡をするような輩はすでに絶えている。兵は、指揮官から逃げ、戦場という地獄の中、一人でさ迷う事の愚を理解していた。
どんなに不安でも、仲間を見捨て、あるいは見捨てられ、単独で生き延びられる自信などない。それが、兵の本音であろう。
「嫌だって言うのなら、付き合ってられんと言うのなら、それもいい。今からでも散れ。俺は咎めんぞ？」
答えがわかっていて、シュウは問う。聡い彼は、ここにいる者たちが、その手の度胸を持ち合わせていないことを理解していながら、

あえて選択権を与えて見せた。
自身の意思で残れば、それは純粋な自己の判断。責任を共有するための、陳腐な問いかけであったが、結果は自明である。
「よし。腹が決まったら、あとは簡単だな。勝って、帰るだけだ」
こうして、シュウは戦いの場へとおもむく。自身の裁量で、自己の判断で、人の群れを率いる。その自由を得た彼は、まさに群狼の長そのものであった。
「……まあ、まかせろ。何とかしてやる。俺についてくれば、それなりにいい目を見させてやるさ」
シュウは、敗北など意識しなかった。彼には勝算があって、しかもまだ口には出していない、秘策もある。

――さて、今後問題があるとすれば、あのお姫様だな。流石にアレの行動まで把握は出来ん。邪魔をしてくれなきゃ、いいんだが。

一抹の不安はあったが、些細なことであると、シュウは判断した。後でいくらでも修正が聞く部分であろうと思い、さっそく具体的な行動に移る。
セリアを生かしたことによる恩恵。それを最大限に活かすつもりなら、戦場で功績をあげるほかはなく。生き残りたいのであれば、わずかな手勢でも運用するしかない。

――ここは俺たちにとっては自国内で、相手にとっては外国だ。補給にしても戦闘にしても、まずはその点を念頭に置かねばな。狼藉を働くにも、手段は選ぶ必要があろう。

シュウはこのとき。トリアという国の一部になっていたと、そういえるだろう。国家の枠組みの中で、生きることを決意する……その意味を、シュウは正しく認識していたのであった。

※

セリアは、そもそも戦場に出るどころか、王位を継承することさえ考えたこともない、おとなしい娘に過ぎなかった。兄がいるから、父の跡目を継ぐ者は初めから決まっていたようなものであるし、よほどの不幸がない限り、自分が注目されることはないと思っていた。

ましてや、セリアは文武に優れている……と、己を評価するほど、うぬぼれていない。

セリアの教育は、どちらかといえば文に偏り、ここ数年は武に関する知識など、触れたことさえなかった。乗馬は国柄、伝統と言うか、貴族のたしなみとして、定期的に修練していたが――剣も弓もまともに扱ったことがない。詩文や古典、儀礼に関する知識はあれど、軍事についてはまったくの素人である。

女子に武力を求めるというのも酷な話だが、今は非常時。敵がいれば刃で打ち倒し、血で身を染めねばならぬが、現実である。そして己に出来ないのであれば、他人に任せるほかはなく――自分はただ、惨状を眺めていただけ。

「敵の掃討、終わりました」

「そう、ですか。……相手の素性については、何かわかりましたか？」

「は。どうやら、混乱に乗じた盗賊であったようで……罪人の刺青をした者が、数人おりました。ガレーナの兵でないことだけは、確かです」

セリアと、その護衛の一団は、着実に王都への道のりを歩んでいた。その中で、治安が悪化し、ならず者どもが蔓延る一帯も通過している。これには、一刻も早く帰りたいという彼女の意向が関係していた。とにかくセリアは、王都に戻りさえすれば自体は好転すると信じ、最短距離を突っ切ろうとしたのだ。

しかし、結果として盗賊に襲われ、返り討ちにした人間の遺骸を間近で見るようになると、慙愧の念を感じざるを得ない。戦闘で傷

を負った者には申し訳ないと思うし、死んだ盗賊どもも、哀れといえば哀れでもある。
そしてなにより、自分が綺麗な姿のままでいることが、とてもやましく思えたのだ。
「……私も、剣が使えれば、手伝えたのだけれど」
「いえ、そのようなことは、全て我々にお任せください。でなければ、我らはその職分を果たせなかったことになりますので」
まさしく、その通りだ。護衛とは対象を保護し、危険から守り抜くことを仕事とする。セリアがどう感じようが、彼らには関係ない。むしろ、彼女の意見は、兵たちに負担を与えかねない分だけ、性質が悪いと言って良かった。
――仕方ない、か。確かに私にもしものことがあれば、皆の責任になる。

セリアも、護衛兵の立場を理解できる程度には、頭が回る。一度諌められれば、これを酌んで動くくらいの賢明さは、持ち合せているのだった。
「了解したわ、護衛隊長。私は、貴方の判断を信頼し、任せます」
嘆くのは、やめた。自分を不甲斐無く思ったところで、この場の利益には直結しない。
「はい。では改めて、王都へと向かいましょう。近くの駐屯地を介すれば、一定の兵も連れて帰れるかと思われます」
セリアにつけられた護衛隊。その長は、所属した軍隊への年期を感じさせる、壮年の男であった。年齢は、四十代半ばくらいか。がっしりした体躯と、太い胴回り。無骨な顔立ちに無精髭と、お世辞にも男前とはいえないが、不思議と人に安心感をあたえる人物であった。護衛を務めるのにうってつけの人材であることは、セリアも認めざるを得ない。
威厳も相応にあり、小集団を任せるには、充分すぎる才覚の持ち

主であろう。先ほどの小競り合いを見る限りでは、指揮能力も水準以上か。偶然か必然か、シュウはあの短期間で最善の人事を行ったということになる。

こうなると、彼の勘の良さをセリアは賞賛しなければならない。

……内心はどうあれ。

「きちんとした軍隊の規模になれば、私たちを襲う盗賊なども、いなくなるでしょうね。……そういえば、護衛隊の被害は？」

シュウがセリアにつけた兵数は、三十名。彼は残り百七十名ばかりを率いて、今は敵軍とかち合っている頃か。

どんな戦いになっているかは、想像するほかないが――まず心配するべきは、己の身の安全と、それを保証する戦力であろう。

「軽傷が八名。重傷者、死亡者なし。およそ倍の数を相手にした結果としては、まあ上々でしょうか。傷を負った者も、戦えないほどの負傷ではありません」

「ほとんど圧倒していたものね、貴方たち。……敵が錬度の低い盗賊だったから、かしら」

「それもありますがね。奴ら、十人ばかり斬ったところで、逃げ出し始めたでしょう？」

そういえば、確かに途中から盗賊どもは、逃亡を図っていたようでもある。しつこく追撃しなかったから、結構生き延びたであろう。

「あの手の連中は、別に守るべきものがあるわけでもない。分が悪くなったら、さっさと見限って次の獲物を探すのが常です。……掃討するのは、ちょいと骨ですが、追い散らす程度なら慣れたもんですよ。傭兵崩れの物盗り風情、いくらでもさばいてみせましょう」

「なるほど。優秀な兵と、指揮官に感謝ね」

「兵が先で、自分が後ですか」

「ええ、現場が先。後方が後。常に賞賛されるべきは、下々の苦労よ。もちろん、貴方を評価しないわけではないけれど――違うかしら？」

どうせ、無事に任務を済ませれば、貴方は昇進するのだから、と

セリアは付け加えた。ここに来て、彼女にもいささかの変化が表れている。
　自らの不甲斐無さへの反動であろうか。己に出来ないことを実行してくれる者たちに対して、感謝の気持ちを抱くようになっていた。それは指揮官に対しても同様であろうが、あえてセリアは冷たく引き離すような態度を取る。この男の人間性を、拙くも探ろうとしていたのだ。
「まあ、同感です。セリア殿下は、物わかりがよろしゅうございますな。普通、貴族やら王族やらは、もっと倣岸で無知なものだとばかり思っておりましたよ」
「倣岸で、無知だもの。私だって、そう変わらないわ。少し、自覚があるだけよ」
　なかなか不遜な言い様だが、この際は目をつぶろうと彼女は思う。今は忠実に動いてくれる者たちに、ただ感謝すべきであろう。
　基本的に、これは負け戦なのだ。今後はわからないとはいっても、短絡的に保身を図ろうとする者が出てもおかしくない状況である。護衛隊が問題なく機能してくれている、という一事だけでも、セリアは幸運に思う。
「おや失敬。言葉が過ぎましたかな。生まれが卑しいものなので、無作法はお許しくだされ」
「そんなの、いくらでも大目に見るわよ。きちんと、仕事さえしてくれたらね。……それで貴方、名前は？」
「このような下賤な者の名を、覚えてくださると？」
「わからないと呼びにくいでしょう？　私は物覚えが悪い方だから、護衛隊全員の顔と名前までは、覚えきれないけれど……貴方一人のことを把握していれば、隊は機能してくれるでしょうし」
　情報の伝達と命令権の行使は、相手への信頼関係がなければ成り立たない。
　また、そんな建前は抜きで、見知らぬ他人に囲まれた少女が、せめてこの場で顔見知りくらいは作っておきたいと思った。それだけ

の話でもある。
彼は、もともと陽気な性質なのだろう。二言三言、話しかけただけでも、その性格の片鱗が見えるようであった。どことなく、聞く者の心を穏やかにさせる、低音の良い声をしているのも、彼女には好印象であった。
セリアに長所があるとすれば、この割り切りの良さがその一つであろう。おかげで彼女は、一定の好意を得ることに成功する。
「……ジェイク、と申します」
「ジェイク、ね。覚えた。じゃあ、先を急ぎましょうか」
顔も名も、心に刻み付ける。父と子ほどの年齢差がある二人であったが、立場はセリアの方が強い。王族が、後ろ盾のない一士官の名を覚えることが、いかに大きなことであるか。彼女はそれを理解していなかった。
ジェイクがこれを奇貨とし、確たる人脈を築ければ、王家との繋がりが出来る。そうなれば、いくらでも甘い汁を吸う機会が巡ってくるだろう。彼が見る限り、セリアは隙が多すぎる。ジェイクがその気になれば、彼女を踏み台に、富貴への階段を上ることができるだろう。……あくまでも、その気に成れば、だが。
彼は今、己が人生の分岐点に立っていることを自覚していた。それがわかったからといって、特別な何かを行おうとは、しなかったけれども。
「わかっているでしょうけど、さしあたっては、近場の軍と合流することが目的ね。軍需物資の集積所なり、補給路なりをたどっていけば、いくらかは残存兵力を加えて行けるでしょう」
「左様でございますな。三十名程度では、大負けに負けて逃げ帰ってくるようで、格好が付きません」
「大負けで、間違ってないと思うけど？」
ジェイクは、ただ常識的な一般論を述べた。セリアは、そもそも争いごと事態に馴染みはないのだから、わからなくても当然であろうが……その点を放置したままに出来るほど、現状に余裕はない。

彼はそう判断し、多少性急にでも、この場で認識を改めさせることにした。
「率直で正しくあることが、常に最善であるとは限りませんよ。見栄やはったりを張れば、得をする。そんな事態も、ありえるのですからな。負け戦は特に、悲惨な状況から目をそらす努力が必要なので」
「……それが許されるのは、末端の国民だけよ。私は、目をそらしたくても、そらせない立場にいる。許されるなら、下々の連中と、同じものを見ていたいたかった。――騙されていると、知っていてもね」
傍のジェイク以外には聞こえないよう、小声で呟く。それを聞き取った彼は、慰めるわけでもなく、一介の士官として真っ当な忠言を行うのみだ。
「気丈に振舞ったり、弱気になったりと、貴方も随分忙しい方ですな？　迷いなど、捨ててしまいなされ。それこそ一番、この場では不要の物です」
金言であった。彼の経験が言わせる台詞であろうと、セリアは理解する。ジェイクの台詞は、皮肉げな言葉もあった。しかし、彼の明るい、屈託のない声で言われてしまうと、不思議と嫌らしく聞こえなかった。
「了解。ジェイク、たぶん貴方が正しい」
どうしようもない敗北感を、適度な雑談で誤魔化しながら、セリアたちは王都へと向かう。順調に補給路をたどれば、国内の戦力を途中で吸収しつつ、結構な数を揃えて帰還できるはずであった。
しかし、運命はどこまでも、セリアに厳しい。帰るまでに一波乱どころか、二つも三つも問題を抱えながら、彼女は厳しい道のりを進まねばならなくなるのだった。

第三章　転機（後書き）

とりあえず、今回はここまで。

まだまだ書き溜めた分はありますが、前のあとがきで書いたとおり、私にはこれが面白いのかどうか、あまり確信がもてません。

続いて投稿すべきか、最初から練り直すべきか。読者の皆様方の反応を、待ってから、決めたいと思います。

ここまで拙作を読んでいただき、まことにありがとうございました。

また次の機会に、お会いしましょう。では。

第四章　不安

セリアは、シュウに必要なだけの権限を与えたつもりでいる。彼の命は、己の命。すなわち御輿としての権威のみならず、実際に味方を動かし、軍を率いる権利を譲渡したのだと、そう彼女は認識していた。

彼のほうも、それは正しく理解しているであろう。これが最良の判断であったかどうかは、まだわからない。問題があるとすれば、シュウに全てを押し付けたつもりになって、自分はもう特別に動く必要はないのだ……と。そのように、セリアが勘違いしたことである。

――戦いの帰趨は、もうあの男に任せたし。護衛隊はジェイクが統率してくれる。王都に着くまでは、楽をしていられそうね。

セリアは、対策を実行するにしろ、責任を追及されるにしろ、帰ってからのことだと信じていた。

保身の為の言い訳など、するつもりはない。敗戦の一報は、すでに王都に伝わっているはずだ。トリアの密偵、偵察兵はそれなりに優秀であるから、途中経過まで含めて、正確に記録されていると見て良い。

そんな状況では、いかなる自己弁護も意味を成すまい。罰があれば裁かれようし、そうでなければ現状維持。どちら転ぶかはわからないが、気を揉んでも仕方ないと、彼女は諦めていた。

御輿に責任を追及するなど非合理極まりないが、必要な時に犠牲に羊となることも、自身の役割であるとセリアは考えていた。

よく言えば達観、悪く言えば厭世的な思考だが、挫折した後は思考が暗くなりがちなもの。セリアのように実績も自信もない人間であれば、とりわけその傾向が強くなる。

――負けた責任は、誰かが取らなければならない。どうせ、私には失うものなんて、何もないんだから。

色々と、頭の中で考えをもてあそびながら、セリアは街道を馬に乗って、進んでいた。

結論から述べるなら、この彼女の後ろ向きな予想は、完全に裏切られることになる。

どこにいようと、戦時の混乱からは逃れえる物ではないし、王族であれば義務を放棄することは出来ない。

つまり、セリアはシュウに指揮権を譲渡したのではなく、昇進させ兵を統率する義務を付与した、という表現のほうが的確なのだ。

いくら嫌がっても、出自とそれに伴う責任からは逃れられぬ。特に大局的な決断については、ジェイクなどの一士官の手に余るだろう。

万が一、その決断が今ここで必要になった場合。彼女は他人に全てをゆだねることが出来ない。父王の死と、その後の混乱は、セリアをそこまで過酷な状況へと追いやっていた。

護衛に囲まれて帰還する最中であれ、必要とあらば兵に指示を行い、その結果を受け止めねばならない位置に、彼女は存在する。

まったく酷なことだが、この負担を自覚できなかったのが、セリアの限界であったのかもしれない。

「順調に進めば、夕方には駐屯地に着くでしょう。そうなれば、少しは楽になりますかな」

「兵が増えれば、賊も襲ってこないと思うし、手持ちの食料も補給できる。……楽になるというか、ここで出来るだけ大きな隊を組織しないと、後々苦労するのではないかしら？」

目先の出来事には、彼女も一応目端が利く方である。ただ、すでに楽観視が入っているのか。この発言もどこかしら他人事のようであり、自分がこれに関わることなど、まるで考えていないようでも

ある。
「ははあ、おっしゃる通りで。ハッタリをかけるには、数を揃えるのが効果的。道すがら兵を吸収しながら、軍を組織しなおせば、これはセリア殿下の功績といってよろしいかと」
「そこまで計算しているわけじゃないけど……でも、私だって少しは役に立つことを、皆に示したいの。お飾りでも、人を集める程度の役割は果たせるんだって、ね」
本当に、セリアは自分が誘蛾灯となって、トリア軍の拠り所となろうとしていた。ただ、これを統率する役目まで負おうとは考えておらず、誰か適当な人物が、それを担えばよいとまで思っていた。
「左様ですなぁ、実績があれば、誰も姫様を侮ったりはしないでしょう。まあ、頑張ってください」
「……貴方も手伝うのよ？　事と次第によっては、集った兵を全部任せることになるんだから」
「――おや、何を仰いますやら。私はせいぜい、小隊長を務める程度の才覚しかありません。三百人、四百人の部隊を率いるのは、手に余ります」
それはそうなのだろうが、無経験の素人に任せる方が、よほど性質が悪くないだろうかと、セリアは思う。
「軍って、そんなにいい加減なものでいいの？　私は一応、父の跡を継いだ形になってはいるけど、正式に戴冠したわけでもないし。王権の継承が正しく行われていない以上、私が兵を統括するのは問題ではないかしら。――むしろ、士官である貴方がやるべきじゃない？」
「……はて。私は法規に詳しくありませんので、なんとも。しかし、自分がやると角が立ちます。すでに護衛隊を預かっている身でありますから、これ以上の兵の統率は、シュウ殿の命に背くことにつながるのではないかと」
ジェイクは、兵権を譲渡されたシュウが、直々に選抜して護衛隊を任せた人物だ。

この上にさらなる権限を加えるのは、シュウの命を撤回させるに等しい。もし彼がセリアの言に従い、帰途で吸収した兵力を指揮してしまうと、とても護衛に専念できる状況ではなくなる。

そうなれば結局、別の人間がセリアの警護を統括することになり、彼女は自身の命令よって、シュウの宣言を間接的に否定することになろう。

せっかく自分が付与した権威を、自らの手で破壊する。これを柔軟な対応と呼ぶべきか、朝令暮改と評すべきか、彼女には判断が付かない。

「なるほど。確かに、それは考えものね。……とすると、どうしたものかしら」

「あくまでご自身が前面に立ちたくない、とおっしゃるならば、行く先々で出会う将校たちに全て丸投げすることですな。補給拠点には、前線に出られなかった士官が多少はおりましょう。おそらく私より、高給取りの奴がね」

きちんとした参謀教育を受けた者、あるいは経験豊富な大隊長などがいれば最高である。セリアは運営上のあらゆる問題について、煩わされることはなくなる。シュウと同じく彼らを昇進させ、仕事をぶん投げればそれで済む。もっとも、後でシュウとの間で、摩擦が起こるかもしれないが……そんな未来のことまで、彼女は考えたくなかった。

「そうね。全部任せられる人材がいれば、それにこしたことはないのだけれど」

「まあ、最悪、護衛隊を拡張するということで、つじつまは合わせられますが。一つの基地の人数を全部とりこんでも、千人には届きますまい。それくらいなら、必要に応じて隊を強化した、と言い張ることも出来るでしょうよ」

ただ、この場合は前提として、ジェイクが最上位の士官でなければならない。そして全ての兵を彼が率いることになり、セリアとしてはある意味、非常に頼もしい結果となるわけだ。

このジェイクという男。不器量で捻くれ者だが、信義に背けるような人間ではない。信頼すれば信頼した分だけ、結果を出せる人物ではないか。根拠はまったくないのだが、セリアはそのような印象を彼に持っている。

――何だか、仮定の話ばかりしてるような気がする。取り越し苦労になったら、いい笑いものね、私たち。

補給路は、王都へと続いている。その中継地点には、物資の集積所があり、少数の兵員と共に士官が配置されているものだ。この中には、中隊長以上の士官も当然いるだろう。すると、最近小隊長に昇格したばかりのジェイクでは、上位に立てるわけがない。

だから、セリアはこの時、何ら危機感は抱いていなかったし、以後は思い悩むことなく――少なくとも議会で責任を追及されるまでは、休んでいられると思ったのだ。

しかし、運命はどこまでも迂遠で、厄介である。セリアへの試練は、まだ終わっていなかった。

幾ばくかの希望を抱きながら、もっとも近い補給拠点にたどり着いたとき。彼女は失望と共に、恐怖に似た想いを抱くことになった。

「士官が、いない？」

「はい。ここにいるのは、兵卒と下士官のみです。ご存知の通り、下士官は部隊長の補佐に回るのが本来の役割。非常時には兵を統率することも出来ますが、上位の士官がいれば、それに権限をゆだねるのが道理でありましょう。よって、我々はこれより、セリア殿下の護衛部隊に所属することになります。――変則的ではありますが、ご許可を」

説明に現われた一人の下士官が、そう述べた。基地には元々、彼らを纏める将校がいたのだが、前線が近いこともあって、オルスについてゆき、軍功を立てることを望んだとのこと。

本来は通るはずのない、一将校の要求。だがそれは、意外にもオルスに受け入れられる。父の意図など、セリアにはわかるはずもないが……今問題なのは、補充の人員もないままに、一つの拠点が下士官と兵だけで運営されていたという、事実である。

上級の士官がオルスと共に討ち死にした後は、そのまま放置され、日々の業務をこなし続ける毎日であったそうな。前線にある程度近い場所にあるのだから、見落とされていた、とは考えにくい。この点、どのような思惑が軍内部にあったのか、お飾りであったセリアには想像も付かないことである。

……ともあれ、ここにたどり着き、合流してしまった以上、セリアは彼らに対して責任が発生するのだ。兵の処遇、采配の決断は、ジェイクに任せるわけにはいかない。先の考察どおり、それは彼の任務から逸脱しており、彼女の他に相応しい人材がいないのだから。

――しばらく。しばらくの、我慢よ。途中で相応しい人員を確保したら、その人に働いてもらえばいい。

こうしてセリアは、流される側から、主導する側へと立ち位置を変える。ようやく、彼女は自ら重荷を背負う覚悟を決めたのだと、そういってよい。

「よろしい。では、私たちの指揮下に入りなさい。――とはいっても、私には組織運営については、知識も経験もない身だから。色々と、教えてもらうこともあるでしょうけど」

「自分にわかることでしたら、いくらでもお力になりましょう。では、よろしくお願いします」

まだ若い……といっても、セリアと比べれば十は歳が離れているであろう。

その下士官の年齢は、おおよそ三十前後ほどか。印象としては老いよりも若さの方が強いが、それなりに長い時間、軍隊の中で揉まれてきた厚みを感じさせる、そんな男であった。
痩身であり、落ち窪んだ目からは、どうしようもない陰気な雰囲気を感じて、決して美男子とはいえないが――些細なことであろう。この場では目を楽しませる色男より、頼りがいのある戦士の方が、よほどありがたいものだから。
「そんなにかしこまらないで。これからは、遠慮なく頼らせてもらうんだから。……ええと」
「サーレントです、セリア殿下」
「ではサーレント。この基地の内情を報告してくれないかしら。具体的には、兵員、物資、通信網の状況などね」
軍事の知識に欠けてはいても、ここ数日考えっぱなしでいれば、必要なことくらいはわかる。単純に足りない物を頭の中で整理して、あれば便利な物を想定しておく。
それだけのことなのだが、真面目に取り組めばいくらでも考慮の余地があることに、セリアは気付いていた。さりとて隅々まで目を行き届かせるのは、彼女の素養では不可能に近い。
しかし、見落とした点を探ろうと、事態の把握に努力するのは、有益なことであるはず。問題があれば、そのつど見直していけばよいだろうと、セリアは割り切っている。
「人員は、自分を含めて三百六十六名。この内、三五名が前線から戻ってきた兵で、その中の十二名が負傷しております。いずれも軽傷なので、戦闘はともかく、強行しない限り移動には問題ありません」
「つまり、実質的な戦力は三百八十九名、と。結構な数ね」
今のセリアの状況を考えると、なかなか大きな戦力だが、戦闘に巻き込まれることを考えると、あまりに寡兵だといえる。盗賊団程度なら踏みつぶせるだろうが、勝利の勢いに乗った敵軍相手では、持ちこたえられる数ではない。

父は、我が軍の将帥は、そこまで後方を軽視する人物であったか……？　と疑問に思うが、今更である。次の話題に移った。
「兵糧は……前線が近く、基地の構築が最近だったこともあり、そう多くはありません。が、王都まで一度に運んでいけるほど、少なくもないのです」
さらに問いただしてみると、なかなか微妙な量であることがわかった。一人の兵が一日に消費する食料を一とするなら、この場にある量は三十万、といったところか。
千人の兵を三百日も養える……といえば、かなり多いようにも思えるが、戦略的にはさほどでもない。この時代、最大規模で三万から六万もの軍が運用されることもあるのだ。
そしてオルスが率いた兵数も、セリアを御輿に動かした軍も、およそ一万程度。この軍勢が消費すれば、たった三十日で食い尽くしてしまう量に過ぎない。切り詰めればもう少し持つだろうが、継続して物資を集積しなければ、先細りするのは目に見えている。
「本格的な輸送が、直ちに始まる予定だったのですが……この敗戦の報によって、雲行きが変わったらしく、いまだに王都から輸送隊が来る気配はありません」
「今来てもらっても、困るわね。動きの遅い輸送隊に合わせては、敵に後ろを取られかねない。……持ちきれない分は、処分するしかないのかしら」
シュウの活躍を、セリアはまったく当てにしていなかった。ここで楽観に走れるほど、彼女は愚かではない。シュウが敗北していれば、追撃の手がいつ、ここまでやってくることやら。あまり、時間的な余裕はないと見るべきだろう。
ならば、この人数には多すぎる物資を、悠々と抱えて進んでいる場合ではあるまい。ましてや何度も往復するなど愚の極み。
といって、みすみすと敵にくれてやるのも癪である。焼き払って処分するのが、もっとも適当と思われた。
「王都への連絡は、絶たれていないはずです。定期報告に向かった

兵が、先日戻ってきておりますから、通信に問題はないかと。これより後方に、敵の手が入ったという話は聞きません。ガレーナ軍がここを無視して一足飛びに、王都へ向かう理由もないでしょう」
「断定するのは危険かもしれないけど……。わかった、だいたい現状は把握できたと思う」
後は、行動を起こすのみだ。こんなときに、参謀でもいてくれれば……とも考えたが、もはやどうにもならぬ。
ジェイクにも相談したいが、彼は今、隊の再編成を行っている。人数が増えたことで、護衛隊の戦力は充実しているが、新たに面倒も増える。彼は接点のなかった兵の掌握に、手間取っている頃だろう。まさか本当に、自身の手で護衛隊を拡張することになろうとは、思いもしていなかったに違いない。
これには、サーレントにも責任を持たせるべきだが……彼をどのような地位に置くか。それはセリアが決断するべきことだ。
ジェイクの方が年上で、軍歴も長い。階級も彼の方が一つ上である。サーレントに不満がなければ、ジェイクの下で補佐に徹してもらうのが、一番よい形であるように思えた。
「基地の人員は、すべてジェイクの隊に吸収するから、サーレントには補佐に回ってくれる？　彼も有能な下士官が欲しいところでしょうし、貴方の協力があれば、円滑に事を進められると思うの」
「――了解しました。編入される上で、報告事項がありますので、ジェイク隊長と面会したく思います。どちらにいらっしゃるか、わかりますでしょうか」
表情は変わらないが、どことなく、雰囲気にトゲがある。
何か、不満なり不安なりがあるのだろうとセリアは理解したが、あえて問わなかった。
サーレントにそれを吐き出させたところで、適切な対応を取れる自信など、彼女にはなかったのだから。
ジェイクは、兵糧の確認のために倉庫の方をのぞいていると、セリアはそれだけを口にする。彼からの礼の言葉も、彼女の心情を軽

くすることはできなかった。
　他に何かやるべきことは……とセリアは考えたが、なにも思いつかない。
サーレントは、出て行った。こんなことなら、彼に自分がやるべきことを聞いておくのだったと後悔したが、もう遅かった。
　そして彼女は、苦悩しながら、無為に時間を一人で過ごさねばならなかったのである。

第四章　不安（後書き）

とりあえず、気にせず続けることにしました。
何か思うところがありましたら、ご感想などをいただければ、ありがたく思います。

第五章　暗雲

実際のところ、サーレントはさほど反感など抱いていなかった。セリアのことは、まずまず好意的にとらえ、戦場に初めて出てきた少女が、よく頑張っている……と評価している。

ただ、彼にはぬぐい去れない不安があり、それを相談する相手を求めていたのだ。そして、セリアは話し合うに足りない相手であると、サーレントはあの短い時間の中で決断したのだった。

――お嬢様相手に、この手の汚い話は厳しすぎる。

ジェイクとやらに面識はないが、頼るに足る人間でありますように……と彼は願った。

そして結果論だが、この際、ジェイクに一定の器量が備わっていたことは、幸運といってよい。

「お前さんが、この補給基地の実質的な統率者かい？　まあ、そう固くならずに気楽にいこうや。――これまで、苦労してきたんだろう？」

まず、ジェイクはサーレントを無下に扱わなかった。倉庫で出会うと、気さくな声で彼をねぎらい、詰め所まで案内する。

ジェイク自身、長い下積みの人生を送ってきた軍人である。年下の下士官に共感やら同情やらを抱きはしても、反感を持つことはない。

「はい。……兵の様子は、もうご覧になられましたか？」

「なったとも。ずいぶんと、しつけが行き届いているな。正規兵なら当然だが……敗報が届いている割には、動揺が少ない。不安な顔をほとんど見なかったのは、あんたのやり方が上手かったからかね？」

「自分の功績ではありません。一部を除いて、元々出来の良い兵で

固められていたのでしょう」
　これが謙遜であるか事実であるか、ジェイクは検証するつもりはない。どちらにしろ優秀な兵の存在は喜ぶべきであり、窮地に至っては貴重な宝である。
　付け加えるなら、この時点で、サーレントの手腕を疑う余地はなかった。士官を失った状態でありながら、大過なく軍隊を維持し続けている。その事実をかんがみれば、彼の有能さは証明されたような物であろう。
　後は、いかにしてこれらを活用するか。運用の問題だけであるはずだった。しかし、ここでサーレントは一つの難問を提示する。
「ただ、いくら練度の高い兵に恵まれていても、例外はございます」
「集団の常だな。力の劣る者、爪はじき者は、どこにでもいるだろう」
「……残念ながら、そう簡単な話ではありません。付近の住民から、略奪を行った者がいます。今は懲罰として、営倉に押し込めてありますが……自分には、軍法によってこれを処罰する権限がないのです」
　サーレントは処罰、と穏やかに言ったが、求めているのは処刑だろう。
　大目に見てやるつもりなら、営倉にぶち込んで、ほとぼりが冷めるまで臭い飯を食わせればよい。それをせず、あえて報告に来た以上、その意図は明白だった。
「そうか。下士官のお前さんがやると、私的な制裁になりかねんか」
「自国内での略奪は、大罪です。そして罪を犯した兵は、国王が認めた執政官か、資格を持った士官でなければ裁けません。――彼らの処分を、御願いできますか？」
　確かに、この基地には士官が一人もいなかった。ジェイクがこれを代わりに行うのは、簡単である。すぐ傍に『暫定国王』といえるセリアがいるのだ。彼女は素直だから、それが必要なことであるとジェイクがいえば、疑いもせず許可してくれるだろう。

「わかった。じゃあ、姫さんに報告して――」
「分をわきまえぬ発言を、お許しください。……なにとぞ、ジェイク隊長個人の裁量で、御願いできませんか」
冗談ごとをいうような、人間ではない。そんなことに向いていない、真面目すぎる者の顔を、ジェイクは見た。
何か特別な事情がある。厄介事の種が埋まっているのだと、ジェイクは素早く理解する。
「と、言われてもな……俺の立場も色々と変則的なもので、こちらの裁量で勝手な処分を行える権利があるかどうか。――いや、恥ずかしながら、その手の文事には経験がなくてね。少々把握しきれない部分が、あるわけだよ」
ジェイクはサーレントに対抗するように、真面目くさった口調で返した。所詮付け焼刃の芸だが、あえてふざけることで、相手の真意を探ろうと試みる。
「特別面倒な事をする必要はありません。書類は形式上、そろえる必要はありますが……。ことがことですので、承認さえいただければ、大事にはならないと思われます」
「――兵の処分自体は、ありふれたもの。しかし手続きや罰が不適切であった場合。それを行った士官は、責任を取らねばならないはずだが？」
「はい。ですがこの件に関しては、心配は無用です」
いきなり、雰囲気が冷たくなったような気がした。サーレントは真面目人間の皮をかぶったまま、何か別の、恐ろしい物を腹の中に貯め込んでいるように見える。
「そいつぁ……なんだい？　特別な事情があるんだな？　それも、容易には話せない類の」
「おっしゃる通りです。身内の恥をさらすようですが、どうか、お聞きください」
姫様の護衛以外に、余計な面倒は抱え込みたくないのだが、あいにくとジェイクにこれを拒む権利はない。まったく認めたくないこ

とだが、現状ではジェイクが最高位の士官なのだった。
　こんな事態は御免だと思っていたからこそ、彼はセリア以上に、上位者の存在を渇望していたのだが、いまや詮無いことである。ジェイクは上司らしく、目下の問題に取り組む義務があるのだ。
「兵が略奪をした、と自分は申し上げました。しかし、それだけでは事情の半分も説明したことにはなりません」
「やけに勿体ぶるなぁ。率直に言ってもらっていいんだ。それで？」
「正確に申し上げると、罪を犯したのは、兵に扮装した盗賊どもと、それにそそのかされた不届き者の傭兵。彼らがこの基地に入り込み、素行の悪い連中を巻き込んで、蓄えられていた物資をかすめ取ったのです」
　略奪と言うのだから、近隣の町村で暴虐を働いたのかと思っていた。
　サーレントの言葉をかみ締め、理解するのに、多少の時間が必要であった。このような展開になろうとは、ジェイクにとっても想像外である。
「なんだ、それは。もっとよく状況を説明してくれねぇか？」
「経緯を申し上げますれば、前線からの敗残兵の中に、傭兵が含まれていたことが原因でした。オルス王の敗北によって、失われた数を補填するため、致し方なく……行ったことなのでしょうが。それが結果として、後の面倒を引き起こすことになります」
　サーレントの説明的な口調を、ジェイクは聞き落とさずに理解し、続きをうながした。
「セリア殿下にも報告しましたが、三十五名が前線より帰還しました。しかも、その全てが傭兵です」
「全てが傭兵、ね。なるほど、生き汚いのが傭兵の取り柄だからな。……ああ、気にせず続けてくれ」
　傭兵は、軍としての訓練を受けていない。その上、国民軍と違って守るべき物をもたないため、規律を遵守する意識が薄く、必死さに欠けるものだ。こちらが優勢なときはまだ良いが、一旦劣勢に陥

れば、とてもあてに出来たものではない。
戦こそが生きる糧である彼らは、勝つことよりも生き残ることを重視する為、主を見限るのも早かった。トリア軍の敗北を見て、逃げ出そうとする心理は良くわかる。
もっとも、それならそれで、どうして素直に身を隠さず、基地なんぞに逃げ戻ったのかという疑問は残るが。
「我々は、これを受け入れました。彼らが敵前逃亡の罪を犯したのか、あるいは指揮官を失って潰走を余儀なくされたのか。まったく検討も付きませんが、一度は軍に組み込まれたことのある連中です。庇護を求められたのなら、見捨てるわけにもまいりません」
軍に、傭兵を保護する義務はない。彼らは彼らで、時に独断で逃亡し、時に裏切る。そういうものだ、と割り切って扱うのが、この時代では正当といえた。しかし――正面切って、味方であった傭兵に『助けてくれ』といわれたなら……これを打ち捨てることは、なかなか勇気の居ることだ。下手に見捨てれば、正規兵の士気まで下がりかねない。
敗北による逃走と、背後に迫る敵からの追撃。それらは、誰にとっても共通の恐怖であるからだ。いざと言う時に味方を助けられない軍は、兵の信望を失う。サーレントはただの同情からではなく、この点をもかんがみて、傭兵を受け入れることにした。
――間違った対応はしていないな。こいつを責めるべき理由も、今はない、か。
ジェイクは冷静に状況を考察しながら、話に聞き入っていた。とりあえず、ここまでは問題はない。神妙な面持ちで、続きを待つ。
「受け入れたとはいえ、その扱いには頭を悩ませました。まさか王都まで護送してやるわけにもいかず、実務に関わらせるほど信もおけず……。それでも、戦力が低下しないよう、適度に体を動かしていられる仕事を割り振りました」

「それは？」
「周辺の哨戒任務です。少し離れれば、集落も散見できるこの地形。住民の護衛も兼ねて見回らせ、敵の襲来に備えさせました。無論、こちらから監視の兵も出しております。――流石に、傭兵ばかりに任せ切りには出来ませんから」
サーレントにしてみれば、これが精一杯の気遣いだったのだろう。傭兵を飼い殺さず、役割を持たせることで、帰属意識を強めさせる。
悪い手では、ない。だが、失敗に終わったことは容易く想像できる。なにしろ、サーレントが処刑を求めているのは、その彼らであるのだから。
「哨戒自体は、問題なく行われました。傭兵たちは、この時点では忠実に職務を果たし、我々の信頼を得た……といえるでしょう」
――ここまでは、お互いに関係も良好かねぇ。どこで略奪の話が出て来る？

いささか話が冗長になっている気がする。サーレントの癖であろうか、一から順序良く説明せねばならぬという、使命感に囚われすぎているのかもしれない。
「もしかしたら、このまま撤退命令が来るまで、平穏に過ごせるかもしれないと、そう思っていた矢先に――」
「やらかしたか」
「まさに。……連中は任務の傍ら、ひそかに物資を奪い取る計画を立てていたようで。なんとか直前で阻止し、被害を抑えられましたが……余計な怪我人が、幾人か出てしまいました」
「死人を出さず、事態を収拾できた。それだけでも充分だろうよ。――しかし、なんと言うか、連中も浅慮が過ぎるな。傭兵ってのは、わからん。危険を冒して、味方を騙してでも、小金を稼ぎたがるものなのかねぇ？」
傭兵など、もともと胡散臭い者どもではあるのだが……一応、そ

れなりに信用がなければ、仕事にもあぶれる物ではないか。とんずらする程度ならば許容するが、積極的に害を与えに来るのであれば、もはや問題外である。処刑もやむなしと言えよう。
「わかった。そういう事情なら仕方ねぇ。――こちらの権限で、どうにか処理しよう」
「助かります――が、話にはまだ続きがありまして」
今度は何かと、ジェイクは心する。サーレントは続けて紡いだ言葉は、それこそ彼の権限を越えた、重大な判断を必要とするものであった。
「その傭兵どもは、盗賊団と繋がっていた……というよりは、最初から盗賊として身を立てていたのかも知れませんが。――周辺の犯罪者と結託して、物資の横流しする体制を整えていたようです」
「そいつは確かな情報かい。裏は取っているのか？」
「連中の行動に、何か引っ掛かる物を感じまして。後ろ暗いことが隠れていないかどうか、洗いざらい吐かせました」
「吐かせた……って、拷問でもやったのか。いい性格してるじゃないか」
「盗賊に配慮は要りませんから。徹底してやらねば、禍根を残すかと思ったのです」
それでも、自身の感覚を確かめる為に、容疑者を傷つけることを躊躇わないとは。これでなかなか、サーレントという男は冷酷な一面があるらしい。

――ま、それくらいの方が、この状況では頼りになるか。

ジェイクはこれをむしろ評価し、彼を重用することに決めた。引き続き、基地の兵を任せてよいだろう。真面目さと厳しさ、それに機転がきくサーレントならば、何も不安はない。
「さて、盗賊団、ね。こいつはちょいと厄介だな」
何が厄介かといえば、そんな物騒な連中が野放しになっており、

ジェイクたちには彼らを討伐するほどの余裕がない、ということだ。
「聞き出したところによると、この周辺の町村も、襲撃する予定があるとか。近くの住民たちも、ここ最近は休息に治安が悪くなるばかりで、不安がっています。……ここに来て、盗賊団が規模を拡大したらしい、という情報もありますし、難しい状況です」
平時から、こすからい稼ぎをしていた者どもだろうが、戦時の混乱で他の傭兵と結託し、今後地方で略奪を繰り返す恐れがある。
戦争が終結し、トリアが統治能力を回復させるまで、どれほどの時間が必要なのか。現状では予測も付かない以上、これを放置し続けることは、国民を見捨てることに等しい。

――うむ、アレだ。俺にそんな無情な決断を迫られても困るんだが。

最初の話は、どこへやったのだったか。
そういえば、一応斬り捨てることで同意したのだったと、ついさっきの発言を思い出す。
ジェイクの頭脳は、特別に劣悪だというわけではないが、降ってわいた様な凶事を前に、少々機能を低下させていたらしい。
「姫様に、相談してみようか」
ともあれ、単純な事件でないことは把握できた。阿呆どもの処断は確定としても、それ以上の大きな判断は、ジェイクやサーレントの手に余る。
「よろしいのですか？　ここはあえてジェイク隊長の胸の内に収め、見て見ぬふりをするのが無難かと思われますが――」
「ま、こいつは覚悟の問題ってことかね。俺には、ここで保身の為に民を切り捨てるような、後味の悪い決断はしたくない。あんただって、そうなんだろう？　……なら、他の適任者に決断権を譲るのが、謙虚な軍人の在り方と言うもんだ」
サーレントがいかに不安に思おうと、ここはどうしても、セリアの裁可を仰がねばならない。軍の外部のことまで含むのならば、彼

ら自身が独断でやってはならないだろう。
彼女は、国民を見捨てるか、兵を犠牲にするか。その非情な決断を、ここでせまられることになるのである。

第五章　暗雲（後書き）

まったく感想が来ないというのも、寂しい物です。
気に掛けられていない。ということは、気楽にやれる、ということでもあるので、気持ちに余裕がもてるという利点はありますが。

それはそれとして。なにやら、色々と複雑になってきました。
今回で、どうにも微妙な方向に、話が進んでしまったような気もします。
もしかしたら、後々大幅な改定を行うかもしれませんが、その時は笑ってやってください。

第六章　諦観

セリアは頭を抱えたまま、机の上に突っ伏していた。サーレントを下がらせた後、そのままの体勢で、傍目にはだらしなく寝ているように見える。

――たかが暇つぶしに、兵を使わして貰うなんて、できないし。有益な仕事が私に残ってるかもわからないし……どうしたらいいのよ、もう。

視察も兼ねて散歩でもしてみようかと思うが、それはそれで働いている兵の邪魔になるのでは、と。このような考えが一瞬でも頭をかすめてしまえば、うかつに動くこともままならず……結局、自分に割り当てられた部屋で、ふて腐れているかしなかった。

――たぶん、シュウが勝ってくれたら、当面の危機はない。負けて、追撃の手が来ても、逃げることに変わりはない。兵の運用はあの二人に任せる。可能な限り被害は抑えたいけど、現実的ではないかしら。最悪捕らえられたときのことも考えるべき？　楽観だけは出来ないから、打てるだけの手は打って置きたいのだけど……でも結局、私に何が出来るんだろう。

セリアは部屋を動かず、思索することで時間を潰していた。考えがあちこちに飛び、まともな結論さえ導けないありさまで、とても現実の対策には役立てられまい。時間を『潰す』という表現がはまりすぎるほど、彼女の思考は無駄と浪費に満ちていた。

不毛といえばそうであるし、悲観に塗れるよりは有用だと強弁することも出来る。そんな時を、彼女は過ごしていたのだった。

このとき、ジェイクとサーレントが一定の結論を出し、セリアの

前に現われたことは、あるいは救いであったのかもしれない。乖離した想像から、明確な現実へと視点を切り替えられたのだから。
「よろしいでしょうか？　セリア様」
部屋のノックの音、続いて響く部下の声。これに飛びつくように、セリアが答える。
「いいわ。入って」
「……失礼します」
ジェイクとサーレントが、暗い顔で面会に来た。そもそも明るくなるべき要素など、どこにもない。それくらいの自覚は、セリアにもある。だから、そのこと事態に驚きはなかった。
「出立の目処は立った？　兵糧と兵員の移動に支障はない？　ここから王都までは、結構な距離だけど、なんとか敵に捕捉されずに帰れるかしら？」
「その点につきましては、試算が済んでおります。最低限の物資を持って、他の全てに目をつむって走れば、十日程度で付くものかと。無傷に帰れるかどうかは、運次第というところでしょうか。完全な保証は、出来かねます」
セリアの質問に、サーレントが答える。だが、何か引っ掛かる言い方であった。
他の全てに目をつむって、とは。……追撃してくる敵を警戒しているのか。何があっても振り向かず、逃げ続けよと促しているのか。ならば、今更言われるまでもない、と思う。
「完全な保証なんて、誰も期待してないわ。とりあえず、その日程を前提に準備を整えましょう。私は、何を担当したら良いかしら？」
「おや……自ら仕事を求められるとは。勤労意欲にでも目覚められましたかな？　セリア殿下」
「ジェイク？　貴方が何をどう思っていたのかは知らないけど、私は怠け者ではないわよ。これでも、出来ることがあるなら、何かしらの形で貢献したいとは思ってるんだから」
現実に可能であるかどうかはさておき、セリアは本気であった。

今更、過去の己のふがいなさについて愚痴ろうとは思わない。ただ、目的の為に努力しようとする、その姿勢くらいは、彼女も維持したかったのだ。

「では、さしあたって、一つ重大な決断をしていただきましょうか」

ジェイクは、これを良い機会だととらえることにした。遠慮なく、話を切り出す。

「私が決めてよいことなら、一つと言わずいくらでも――」

「それは頼もしい。……サーレント分隊長、状況の報告をしろ」

ジェイクの顔から、初めて余裕が消えた。声色も、一気に低く硬質なものに変化する。

セリアは不穏な気配を感じ取ったが、だからといって、聞かずに済ませることは出来なかった。ジェイクがここで、無駄な発言を許すとは、とても思えなかったから。

「状況がかんばしくないのは、セリア殿下もご存知のはずです。ですからすでにご説明した内容については、省かせていただきますが――」

サーレントは、ジェイクにした話を、ほぼそのまま彼女に伝えた。

厄介者の傭兵、物資の強奪未遂、盗賊団とのつながり。一つ一つは小さな問題だが、そろって聞けば、ひどく大きなことの様に思える。

――いえ、実際、これは重要なことなのでしょうね。少なくとも、この地に住む国民にとっては、生死に関わること。軽視して良いとは思わない。でも……。

セリアたちに、この事件を解決できるだけの余裕があるかといえば、ないと答えるべきであろう。

彼女には、中継地点の物資と、敗残兵や守備兵を吸収、軍を再構築して帰還する――という役目があった。ここで無理をして、戦闘で時間と兵を消費するのは最善とは言えぬ。それでもあえて実行す

るつもりであれば、よほどの覚悟をしなければなるまい。
さりとて、民を見捨てて王都へと逃げ帰るのも外聞が悪すぎた。何より悪化した治安をガレーナ軍に回復されてしまっては、トリアは純軍事的な部分に加え、統治能力においても彼らに敗北する結果となる。こうなると、国民はガレーナの方になびいてしまうだろう。見捨てた手前、これを裏切りと糾弾することも出来ず、非常に嫌な思いをするに違いない。
また、もっともありえそうな事態。敵軍が略奪と暴行に走る危険性を考えれば、やはり統治者の一族として、これを見過ごすのは、はばかられた。敵が常に紳士的であると考えるほど、セリアは世間知らずではない。

――確率としては、ガレーナ軍が略奪に走る可能性の方が高いでしょう。あちらはあちらで、遠征に来ているのだから……手持ちの兵糧を余計に消費するにするより、現地で調達した方が効率が良いに決まってるもの。

占領後の統治を考慮しなければ、略奪は兵への褒美として黙認することも選択肢の一つ。場合によってはガレーナ軍がそれを暗に奨励することも、ありえるのだ。
しかしそうなると、治安の悪化に、外敵の侵入と収奪が重なることになる。はたして、ここ一帯のトリア国民は、どこまでの被害を受けねばならないのか。
心根が優しいセリアに、この『最悪の事態』を容認しろというのは無理があった。ともかく他に戦力がない以上、なるべく自分たちの手で解決を図るべきであろう。可能かどうかは、別として。
「どうなさいますか？」
「え……？　あ、うん。だいたい考えてるんだけど、どうしようかしら」
セリアは、サーレントの問いかけに反射的に応えた。

少々考え込んだ程度では、結論の出る答えではない。彼女は果断な人間ではなく、むしろ熟慮する臆病者であり、得る物より失う物を重視する方だ。それゆえに損益の計算が容易に進まず、答えを求められても問い返すことしか出来なかった。

「私が決めて良いことではありません。……ご決断を」

「意見を聞いたつもりだったんだけど……助言さえしてくれないのね。で？　どうしてわざわざ私に決めさせる必要があるの？　貴方たちが相談して、良いようにすればいいじゃない。それこそ、私に伝えず内々に処理してくれても。文句なんて、言わないわよ私は」

出来ることなら何でも貢献すると、そう豪語したのは何であったのか。傍目には情けなく見えようが、彼女にも想像の限界はある。

思えば、セリアが自身の責任で持って、人の命を左右する決断をしたことは、一度もない。これまでは必ず、他の者がその任を負っていた。それはたとえば、前任の軍指導者であり、シュウであり、またジェイクであったりもした。

だが、今回はセリアの双肩に命の重みが圧し掛かってきている。あらゆる意味で経験不足の少女が、これを想定しきれないのが当然なら。向き合ったとたんに自信を喪失するのも、あるいは自然な傾向であるのかもしれなかった。

「ソレが出来れば、よろしかったのですが。我々は単なる部隊長です。戦略的な判断は職務外というべきで、兵の指揮以外はまともにできる物ではありませんよ。……なにより、こんな大事なことを人任せにしてどうなさいますか。責任者たる自覚があるのなら、義務を果たしなさい。貴女にやるべきことがあるとしたら、それしかないのですよ！」

しかし、ジェイクはそう返す。問題はやはり、セリアがその立場を放棄できない、と言う部分にあった。

何をどう否定しても、己の出自ばかりは消去できる物ではない。王族として生まれた以上、人の上に立ち、これを統率し、義務と責務を果たさねば成らぬ。これは、宿命とさえいえるのだ。

もし、本当に逃げたければ、自ら死ぬことを選ぶか、野に下るしかない。どちらにせよ後ろ向きの志向で、糾弾されても仕方がない行為であろう。セリアは、ついに観念し天井を仰ぐ。
「そうね。……そう、そうだった。私は結局、それからは逃げられない」
「わかってくださいましたようで、なにより」
「嫌と言うほど、自覚したわ。今」
「ならばご命令を、殿下。――異論があれば、それから申し上げますゆえ、まずは思ったままを口にしてくださいませ」
ジェイクの口調が、とたんに軽くなる。……セリアが恨みたくなるほどに、お気楽な声であった。その変わりように、サーレントでさえ、別人を見るような目で彼を見つめていた。
「不逞の輩を討伐するわ。なるべく大勢を、出来る限り早急に。盗賊を駆逐すれば、面目くらいは保てるでしょう」
その意趣返し、というわけではないが、彼女は極めて率直に決断した。ここで己の心を偽る必要性を、見出していなかったからでもある。
「危険ですぞ？　我々の敵は悠長に待ってはくれません。敵国の軍勢に備える為にも、ここは無視するのが無難では？」
「盗賊程度の存在から民を守れない軍隊に、何の価値があるの？国民に助けを求められたら、答える義務が我々にはある。必要とあらば、治安維持に動くことも、軍の任務に含まれるのよ。……私のいうことは、間違ってるかしら」
「いえ別に。――では、次いでやってくるであろう敵軍にも抗すると？」
一瞬言葉に詰まったが、セリアは表情を引き締めて、断言した。
「それは、しない」
「ならば一事しのぎにしかなりません。無駄な労力です。身近な危険を取り去っても、根本の恐怖を拭い去れなければ、住民は我々を恨むでしょう。――盗賊は排除できたのに、どうしてガレーナ軍か

らは守ってくれないのだ、と」
　正論である。どの道見捨てるしかないのであれば、半端な行動はしない方が良い。その方が消耗を抑えられると、ジェイクは付け加えた。
「でも、何もしないよりはマシでしょう？　……不満がある人がいるのなら、私自ら説得すれば――」
「理解を示してくださると？　考えてもごらんなさい。外敵からは守ってやれないけど、行きがけの駄賃に、近所の悪党だけは取り除いてあげる。だから恨まないで。……こんな理屈が、通りますか？
　我々が逃げた後、ガレーナ軍がこの地を蹂躙した際の言い訳になると、本気で考えておられるのですか？」
　セリアは、言葉に詰まらねばならなかった。道義的に見て、己の出来る範囲で努力することは、間違っていないと思っていた。
　だがジェイクの言葉を聞けば、それが独善的な行為に過ぎないことを、理解しないわけにはいかない。
「それは……わからない、けど。でも、私は逃げるだけで何も出来なかっただなんて、そんな風に思われたくないの。ここの住民にも、王都の人々にも。せめて、最低限の義務を果たしたと――」
「このサーレント。殿下を前に非礼と承知しながら、あえて申し上げます。我ら総勢、三百余名。命令とあらば全滅も恐れませぬが、その命を無為に使って良いというわけではございません。ご自身の面子、あるいは満足の為に使い潰して良い物と、殿下は考えておられますので？」
　サーレントが、ここで割り込んできた。彼もジェイクに感化されてか、かなり遠慮のない物言いをしてくる。
「そんなこと……あるわけないでしょう？　今回の場合は、盗賊討伐という目的がある。私もわがままだけで、こんなことを主張してるわけじゃない。そもそも、この件は貴方の方から言い出したことよ？」
「――セリア殿下。誤解して欲しくないのですが、自分は何も貴女

が間違っていると言いたい訳ではないのです。ただ、半端な覚悟で我々を用いて欲しくない。命を懸ける兵の身になれば、どのみち見捨てるほかない民の為に戦うよりは、国家の生存をかけて戦いたく思うでしょう」

「舞台の大きさが問題とは思えないわ。今、目の前にいる人を助けたいとは思わないの？」

「思います。ですから、ここで玉砕して果てよと、そうおっしゃられるならば。残される民の為に、最後まで命を張れと命じられれば、我々は納得して従います。――盗賊を討ち、続いてくる敵軍に抗する。結果として殲滅されても、英雄としての死ならば、兵どもは受け入れるでしょう」

サーレントは、暗に非難していた。おそらくは、セリアの半端な行動そのものを。

状況が不利なら、逃げるのも仕方がない。理想に準じて、ここで戦い抜くならばそれも良い。……だが、薄っぺらい義務感だけを満たして、何かをやり遂げたような気分になるのは間違っているのだと。彼は、そう言いたいのだ。

――二人の親切さに、感謝すべきなんでしょうね。ここまで丁寧に、手間をかけて諭してくれたのだから。それとも憤慨すべき？　私の指揮では、誰も生き残れないと、断言されたようなものだし。

ジェイクは説き、サーレントは迫った。彼女が意見を翻す事を。……ある意味恫喝に等しい物言いではあったが、彼らが生存率の最も高い方法を進めるのはむしろ当然。セリアはせめて、物分りの良いところを見せてやりたかった。他に、能がないのだから。

「わかった。……私は今、改めて熟慮する必要がある。なるべく早急に、すませるつもりだけれど。先の結論が最善の手でないことは、良くわかったもの」

あのように指摘されては、自身の考えのまずさと言う物を、認め

るしかなるまい。それがセリアには辛かった。とても、恥ずかしく思えたのだ。
　それでも即答を避けたのは、未練というものであろう。彼女は他人に影響されて、意見を変えるという出来事に慣れていなかった。平たく言えば、自分の意見を引っ込めることに、僅かながらも悔しさを感じていたのだ。
「サーレントの奴も、ちと諫言が過ぎましたかな。――まあ、これは仮定の話ですが。連中が思いのほか慈悲深く、略奪等の無法を自重したとしましょう。……それでも、我々が国民を守れなかった、という事実は消えません。彼らは以前の施しを恩とは思わず、ただ最後に自身らを放置して、逃げ帰った軍をずっと覚えているでしょう」
　そして一度でも信望を失えば、トリア王国の権威は失墜し、国家への不信につながろう。慰めるふりをして、この点を指摘するジェイクは、その実非常に厳しかった。
　仮に一旦ガレーナに占拠された上で、この旧領をセリアが奪回したとして……その時に民衆が快哉を叫ぶかといえば、いささか微妙と判断せねばなるまい。
「――だからどうだ、という訳ではありませんがね。一旦は国民の支持を失っても、武力で取り戻すことさえ出来れば、後でいくらでも誤魔化せます。……問題は、動いても動かなくても、得るのは不名誉だけという部分。どの道ろくな結果にならないのなら、些少の犠牲は受け入れて、最後に勝利する確率を少しでも上げるよう努力すべき――と。自分はそう考えておりますが」
　ジェイクの言は非情であり、冷酷な答えである。だが、それが今最善の選択肢であることも、セリアには理解できた。そして理解できるだけの知能があったことは、彼女自身とっては、むしろ不幸でもあった。
　この時点で、心は決まる。結論を曲げられたことへの嫌悪など、もはや気にしている場合ではないことも知った。否応なしに、自ら

の役目を突き付けられたことを、セリアは悟ってしまったのだから。
「前線からの伝令は、今もたどり着いていません。戦闘の結果も、敵軍の被害状況も、なにもわからない状況にあります。……最悪の事態を想定すれば、兵力を温存して後の決戦に備えようとする考えは、決して下策とは言えません」
サーレントが、言葉でセリアの背中を押してくる。忌むべき決断をしろと、急き立てているようにさえ、彼女には感じられた。

――私自身の、無力さ。それをことさらに自覚させるような展開。……ジェイクらは、なおも私を試している。人を信任するだけでは、統率者としては不足だと言うように。

軍の主力を率いて、敗北した父。彼は己を知らず、敵も知らず、自ら王として不適格であることを証明した。現実と幻想を同一視し、齟齬が生じれば自分にとって都合の良い妄想を優先する。そんな悪い前例にならうようでは、セリアも同じ末路をたどる他ない。
ジェイクもサーレントも、彼女が理想と現実が対立した時、何を規準として判断するのか。それを知りたいのだろう。もしここで馬鹿げたことを言うようであれば、二人はセリアを見捨てるかもしれなかった。
「考える時間が、欲しい。せめて一晩」
出すべき答えはわかっているが、言い訳が欲しかった。自分を騙して、楽に思考停止できるよう、己に暗示をかけたかったのだ――が。
「待てませんな。こうなっては一刻一秒が惜しい。――最悪なのは、時間を無駄にして、敵に付け入る隙を与えることです。行動が早ければ早いほど、成功率も高まるのですよ？　何を選び、何を捨てるのか。この場で決めなされ」
結論の先延ばしを、ジェイクは許さなかった。高圧的な態度であったが、言葉は正しい。臣下としての分は超えていないと、セリア

は判断する。
　そして諌言を受け入れたなら、彼女はこれを正しく評価しなければならなかった。言葉だけではなく、行動をもって。
「……逃げるわ。いますぐ準備して」
「よろしいのですね？」
「よろしいも、よろしくないも、論議している時間さえ惜しいのでしょう？　……さあ、私は方針を決めたわ。納得したら、さっさと動きなさい」
　なげやりな態度であったが、ジェイクもサーレントも、文句一つ言わずに受け入れた。
「命令を受領し、承認しました。これより、撤退行動に移ります。荷物を纏め次第出発いたしますので、セリア殿下はいつでも出られるように準備なさってください。――では」
「では、これで失礼致します」
　二人は一礼した後、退室。再び、セリアは部屋の中で孤立する。
　彼女は理解していた。決断の重さより、人の視線の強さを。……サーレントはともかく、ジェイクは自分に失望していた。その理由も、わかっていた。
――期待していた。彼はきっと、何もかもが上手くいく策があるのではないかと、そんな風に一縷の望みをかけて。……十中八九、ありえないと思っても、私なんかに頼らなければ成らないほど、追い詰められていたのに。私は、彼を苦悩から救ってやれなかった。
　サーレントの残念そうな、こちらを哀れむような視線が、目に浮かぶ。
　ジェイクも退室の直前、たしかにセリアの瞳を直視した。諦観と同情が一緒くたになった、奇妙な感情が顔に表れていたことを、彼女は敏感に察する。
「……ごめんなさい」

一人、呟く。誰に対しての謝罪の言葉か、もうセリア自身にも曖昧だった。ただ、己の不甲斐なさだけを、呪っていた。

第六章　諦観（後書き）

ヒャッハー、感想だー！

……と、柄にもなく喜んでしまいました。しかし、感想はどんどん欲しいけれど、まず人にきちんと意識してもらえるような作品を作らねばなりませんね。

今回、セリア姫は大きな決断をしました。それが正しいかどうか、まだ少し判断は付かないところでは、あります。

前回の分も含めて、この辺りは今後の展開次第で、路線変更するかもしれません。プロットはあっても、その通りに書いて面白くなるかどうかは、別問題ですから。

――もし、面白くないと思われるようでしたら、遠慮なくご指摘ください。

また、次の投稿でお会いしましょう。では。

第七章　保身

セリアがその基地を発ったのは、翌日の早朝だった。
物資は王都までの行軍に必要な分だけが持ち出され、残りは処分しなければならなかった。
といっても、焼き払う、土に埋める、川に流す――といった方法で処理されたのはほんの一部。大部分は住民たちに分配されることになる。

――せめて、これくらいは。

セリアの良心が求めた、最後のわがままだった。分配の手間を省く為に、村落に兵による通達を行っただけだが、トリアの国民は抜け目なく、基地の倉庫から物資を持ち出してくれるだろう。彼らとて、軍の敗北はもう耳にしているはず。不安定な今後に備えて、少しでも蓄えを増やそうとするに違いない。
「物資で肥えた住民を、ガレーナ兵が略奪してくれれば良いのですが」
「……ジェイク」
馬上から、セリアはたしなめるように言った。力なく、呟きに近い声量であった為、他人には聞き取れなかったであろう。
それを知ってか知らずか、ジェイクはさらに理論を展開させる。
「そうすれば、少なくとも彼らは敵軍を憎悪してくれる。守ってくれなかった我々への恨みと、財産を奪った敵への恨み。どちらを優先してくれるかは、さて。五分五分といったところでしょうか」
セリアは何も、そんな腹黒い考えを持って、行動したわけではない。純粋な善意でやったことを、謀略のように見なされるのは、不本意であった。
しかし、同時に理解する。だからこそ、ジェイクは反対しなかっ

たのだと。この男は軍人として、有益なことのみを評価するのだ。
「嫌味な言い方ね。不愉快よ」
「こいつは失敬。まあ、結果がどうなるかなんて、わかりゃあしません。案外連中は追撃を諦めて退き、国境辺りに腰を据えるかもしれない。しんがりの軍……あのシュウ隊長が、ガレーナ軍を散々に打ち破って、奴らの動きを鈍らせてくれるかもしれない。そうなったら、再度こちらが体勢を整えるまで、誰も死なずに済みますよ」
「希望的観測は、私も貴方も嫌いな方だと思っていたけど？　下手な慰めは、勘弁してくださらない？」
「左様で。――いやはやお恥ずかしい。やはり自分でも信じかねることを、人に信じさせようとしてはいけませんな。すぐにボロが出る」
　頭をかきながら、ジェイクは答える。不器用な笑顔に、軽い物言い。主君であるセリアへの態度も含めて、およそ士官として相応しい器には見えない。だがそれでも彼女は彼を信頼しようと思ったし、以後も護衛隊長として辣腕を振るってもらおうと考えていた。
「まったくね。その不遜な態度。私でなければ、とっくに処分の対象になっているわ。寛大な私に、感謝して欲しいものね」
「ありがたく、思っておりますとも。こうも好き放題にいわせていただける上司は、自分にとっても貴重でありますから」
　セリアは、彼がただの皮肉屋だとか、楽天家などとは思いはしない。笑顔を浮かべ、声を弾ませながら、脳裏に冷たい論理を働かせられる男。それでも話をしてみれば、遠慮のない暴言への嫌悪感は小さく、傍に置けばむしろ安心感が沸いて来る男。
――不愉快なのか愉快なのか。好きなのか嫌いなのか。……良くわからない人ね、まったく。醜男か美男か、と聞かれれば、間違いなく不細工だと答えられるのだけど。
　ともかく、彼が有能な男で、頭のきれる士官であることは、良く

わかった。
　それに、セリアでは顔も覚えきれないほど多くの人員を、彼とサーレントはまとめてくれている。文句をつけるどころか、礼を言ってしかるべきであろう。彼らは皆、いざとなれば己の命より、セリアの命を優先させねばならない立場にあるのだから。
「申し訳ありません。今思えば、気安く声を掛けすぎました。以後は自重いたしましょう」
「謝罪はいらない。何だか知らないけど、私は貴方を憎めないみたいだし。……だから、以後は遠慮も配慮も無用よ」
「色々と解釈に余地がある言い方ですな、それは」
「最大限好意的に受け取ってもらって構わないわ。――意味、わかる？」
「……なるほど。確かに拝命いたしました、殿下。期待された分は、働いて見せますよ」
　無骨な髭面が、笑顔の形へと歪む。ジェイクは、セリアの意思を正しく把握した。
　今なら軍の意思を無視した独断専行さえ、彼女は許すであろう。もちろん、彼はそこまで逸脱した行動を取るつもりはないが、上位者からお墨付きを得たことはやはり大きい。
　この件といい、シュウのことといい、セリアは他人に仕事を任せ、やりたいようにさせる傾向が強いらしい。本人の資質を最大限に活かそうとする……といえば、聞こえが良かろうか。だが実際には、配下を抑圧し、己の型に従わせる力量がないだけだ、とも表現できよう。
「期待しているわ。何と言っても、今の私は、守られることが仕事だもの」
　この威厳の欠如は、トリア王家の中では異端であった。祖父にしても父にしても、またそれ以前の歴代の王にしても、自身の強烈な個性と資質によって、国を導いてきたのだから。

――私が守られること。守るべき権威が、いまだ存在するのだということを、兵にも将にも見せ続けなければならない。そして、庇護の対象は、むやみに口出ししたりしないものよ。

己の分をわきまえ、出来ないことは出来ないと割り切る性質と、誰かを頼ることを厭わない人間性。これは、仕事を肩代わりする人間が存在し、権威か人望だけで人を動かせる者にとって、得がたい素質であった。

セリアは嫉妬から、部下を逆恨みしたり、過ぎた羨望を感じたりはしない。だから後は人を見る目さえ磨けば、人事権の行使だけで王者の地位を維持できるだろう。問題は今ここで、彼女の資質を活かす場面が少なすぎる、という部分にある。

「戦争が終わったら、隊の連中にたんまり褒美をくれてやってください。期待に応えたことへの、当然の報酬として」

「わかっているわ。……それにしても、案外頼もしいことを言うのね、貴方。現時点で戦後のことまで考えられるなんて、余裕がある証拠よ？」

「なぁに、単なる虚勢ですとも。――帰ったら、また軍を編成して、進発することになるんでしょう？　その時、また我々が殿下の護衛に付くことになるとしたら、二重の苦労を背負うことになりますからな。今からおねだりしても、バチはあたりますまい？」

セリアが再度軍をともなって、ガレーナ軍に対するなど。この敗走の中にあっては、現実味のない話である。

しかし、ジェイクはまるで、それがすでに決定したことであるかのように言った。流石にこれには、セリアも面食らう。

「反攻はありえるとしても、私が再び戦場に出られるとは、限らないわよ？　……というか、私のような足手まといを抱えていく理由なんて、ないと思うけど。士気高揚を狙ったところで、もう焼け石に水をかけるようなものでしょうし」

「かもしれません……が、王都に留まり、行儀を良くしていられる

ほど、殿下がおとなしい方であるとも思えませんな。ま、自覚がないなら、それもいいでしょう。時が来れば、わかることです」
ジェイクなりに褒めているのだろう。確かに、セリアの意識は変わりつつある。自身の無力さを憎むことも多かったが、個人的な感情でなせることは何もないと、理解している。
己の地位と、それに付随する権威。己が何かを為したいなら、これを利用していくしかないのだ。
今、必要なのは強い統率者。外敵を退け、国内を纏め上げられる偉大な王。セリアにこれを求める者は少ないとしても、出来るだけの努力をしたい。そう、彼女は思っていた。
「自覚なら、あるわ。……ええ、貴方の言うとおり。きっと、私は必死になって、自分に出来ることを探すでしょうね。これまでの失態から目をそむける為に」
無理にでも仕事を引き受けて、それに集中していれば、少なくとも一区切りが付くまで、嫌な思い出に浸ることもないだろう。もしかしたらセリアが今感じている使命感よりも、この後ろ向きな想いは強いのかもしれない。
「……付き合わされる臣下にとっては、迷惑かもしれないけど。私がいつまでも、無能で居て良いわけじゃない。対象が戦でも政治でも、常人以上にこなせるようにならねばならない。それが、王族の義務という物ではなくて？」
これも敗北の副産物、といえようか。今セリアは、義務やら責務やらを特別に意識している。まるで、己の宿命に目覚めたかのように、彼女は活動的になろうとしていた。
――実際に動くなら。……そうね。私が軍を主導するのは無理があるとしても、『前に出る』ことくらいなら、許されるでしょう。負けを重ねて、王都が落ちたら、きっと国は滅びる。それを防ぐ為なら、あらゆる行為は正当化されてしかるべきじゃないかしら。

行動すること自体は、悪いとはいわないが、それで急に有能になれるわけでもない。ことさらに義務を強調し、自身を危険の中に放り込もうと、セリアが急激に成長できる余地はなかった。
彼女は天才型の人間ではない。死線を一度越えたくらいで、強くはなれない。何度も積み重ねて、それでようやく大成できるかどうか、という程度だろう。
さりとて、セリアの言は正論といえば正論でもある。全てが不足のままでも、戦いは目前にあった。ならば無謀を承知で、活路を見出していくしかないのだ。ジェイクはこれを踏まえ、年長者らしい助言を口にする。
「まさに。しかし、気負い過ぎないことです。適度の緊張は、人の成長には不可欠なものですが、過剰に与えても良いことはありません。……義務は、他人に分け与えることが出来ない物ですが、責任は分かち合うことが出来ます。団結して仕事することを、覚えても良い年頃ですよ？　殿下は」
「それくらいわかってる。あくまで、私個人の問題を言っただけよ」
「あくまでも、確認の為に申し上げました。もしもの時に頼れる人物が、少なくとも一人、ここにいる。それだけは、お忘れなきよう――」
言いたいことだけを言って、ジェイクは黙った。セリアはわかっている、と答えたが、それは反射的な返し言葉に過ぎない。本当の意味での団結、というものを、彼女は身に染みて理解しているわけではないのだから。
ただ、ジェイクはすでに決意していた。それが必要になったとき、無言で彼女に付き従い、模範的な教師として振舞うことを。出来れば、サーレントも巻き込んで、まとめて教育してやるのもいいかもしれないと、彼は考えている。
「その時が来たら……いえ、来ない可能性の方が、遥かに高い、と思うけれど。――ええ、貴方のことは、常に念頭に置いておきましょう。もしもの時は、必ず」

ジェイクの想いを知ってか知らずか、セリアはその時が来たら、彼を用いると言い切った。
迂遠な言い方だが、もうこれは明言した、と受け取ってよい。この点、最大限好意的に――受け取ることで、ジェイクは彼女の信頼に応えねばならなかった。それが、彼の臣下としての義務であったから。
「確かに、拝聴いたしました。お任せを」
「……うん」
セリアは元気なく、首肯した。強気に振舞っても、あらゆる責任を自覚しても、変えられない性根は存在する。このか弱さは、単なる女性ならば何の失点にもなるまいが、指導者としてはどうか。
――昂揚感や虚勢は長続きしない。もちろん、緊張も。……自然体で、何事も受け止められるように成るには、どれだけの経験が必要なんだろう。

王都への道のりを進みながら、セリアは考え続けていた。己の至らなさを、深慮によって、帳消しにするつもりであるかのように。
その彼女の姿を尻目に、ジェイクはサーレントの元へおもむき、話しかけた。
「逃げ帰るも同然だというのに、不満の一つも出てこない。しつけの行き届いた、いい兵どもだな？　サーレント」
「お褒めに預かり恐縮です」
「手元においておきたいなら、再編成の時にきちんと申し出ておけ。それくらいの特権は、ゆるしてくださるだろう」
「……了解しました。しかし、悪しき前例になりませんか？　それは」
「国が滅びるか持ちこたえるか、その瀬戸際だ。細かいことはいい。……こいつらだって、長く苦労を共にした上官を持ちたいだろうさ。お前さんは、違うのかね？」

ジェイクと、サーレントの声が遠くに聞こえる。セリアはもう、道中に危険など、一つもないと確信していた。何者が自身に襲いかかろうとも、身を挺して守ってくれる騎士たちの存在を、信じていたから。

単純に人を信じることと、現実の行動との間には、幾ばくかの齟齬が生まれる。

よって全てが順調に進むなどとは、セリアも考えては居なかった。だから、多少の事故や障害は、許容しなければならないと理解している。

しかし実際の出来事について、彼女は具体的な解決策まで考えようとはしなかった。

――その時になってみなければわからない事だし、あれこれ思い悩んでも役に立つかどうかは別だし。正直、頭を使うのに疲れたから、特に対策なんて立ててなかったんだけど。

とりあえず、致命的な状況ではない。不可解な現状に対しても、余裕を持って取り組めるうちは、恵まれていると考えるべきだろう。

「それで？　本当に誰一人居なかったの？」

「兵どころか、麦一粒残っていません。施設も破壊されておりますし、この基地も役割を終えたものと、理解すべきでしょう」

サーレントの報告を、セリアは神妙な面持ちで聞いていた。

出立しておよそ丸一日。また別の補給拠点にたどり着いた彼女たちは、あらゆる機能を喪失し、兵も物資も撤収された、跡地だけを確認する。

「ありえないと思うけど、盗賊やら敵軍やらが襲撃したような後は

あった？」
「いえ、戦闘の痕跡は見られません。近辺を入念に見回りましたが、敷地内はきちんと整地されたままですし、どの道筋にも整然とした足跡が残るのみです。血の跡や金属の破片も、今のところ発見されておりません」
戦いがあったのなら、地面はどうしても荒れるし、そこ残る足跡は乱れるものだ。
さらに小規模でも戦闘ともなれば、犠牲が皆無であるはずはなく、死人も出れば武具も破損する。
「セリア殿下。これは……」
「痕跡がない以上、敵軍の攻撃を受け、やむなく撤退、という訳ではなさそうね。王都からの命令か、現場の独断かどうかは知らないけど。正式な命令によって、拠点は放棄されたと見るべき。……手間が省けた、と考えていいのかしら？」
それはそれで疑問は残るが、セリアはあえて楽観的な言い方をした。無論、彼女も事態がそう単純ではないことを、なんとなく察している。
ただ、これ以上の面倒は処理しきれない。勘弁して欲しい、という願いが、口を付いて出てきただけに過ぎなかった。
「申し上げにくいことですが、私は今から三日前。殿下と出会う二日前に、王都へ提示報告の使者を出しております。地理的に言って、彼がここを通ったことは疑いなく、もしその時点で何か異変があれば、何かしらこちらに連絡が来たはず。それがなかったということは……」
「使者が通った後で、拠点と前線への連絡さえ放棄しなければならないほどの、凶事が起きた。あるいは、我々を無視して、帰還しなければならない何らかの理由が出来た。――その、どちらかかしら？　何にせよ、喜ばしい事態ではないわね」
もっと悲観的に考えることも出来たが、現実的な思考で分析してみると、そのような結論が出てくる。

情報が少なすぎる現時点では、これ、と断定して対策を練ることは出来ない。ゆえに万全を期すなら、柔軟な対応が求められよう。

「その理由にしても、さっぱり見当が付かない以上、あれこれ案じるだけ時間の無駄。当初の予定通り、帰還しましょう。敵軍に備える為にも、ここで時間を浪費したくない」

しかし、ここでは速度が何よりも優先される。

時間をかけて、虱潰しに調査を行なえば、何かしらの収穫はあるかもしれない。だがそんなことをするより、さっさと王都に戻ってしまう方が、より早く状況を把握できるだろう。

緊急性の高い報告があれば、そこで確認すればよいのだ。そうと決まれば、セリアの取るべき行動は一つに絞られる。

「ジェイクを探索から呼び戻して。適当に休息をとったら、すぐに出ましょう。それまで貴方は、兵についてあげなさい。動かせるようになったら、知らせて。……私も、ちょっと休むから」

「了解しました。――では」

休養の加減は彼らにまかせ、セリアもそれまで少し、眠ることにした。乗馬するにも体力は使うが、彼女の疲れは徒歩の兵より少ない。

なのに、セリアはひどく疲労した気持ちになっていた。

――精神にかかる重圧が、以前の比ではなくなってる。人を動かすのって、神経を使うものなのね。

命令をすることに慣れていない、という単純な問題ではない。

これが一過性のものではなく、今後も付いて回ることになるだろうと思うと、より憂鬱になってしまうのだ。

万が一、億が一の可能性だが、もし部隊を率いて、再度戦場に出ることになれば。そして、その戦いで功を立ててしまったなら。おそらく、自分はこの不吉な場所から、永遠に囚われてしまうのではないか――。

そんな、現状では戯言としか受け取れないような妄想を、セリアは胸の内に抱いてしまっていた。

――いっそ、断罪されてみたらどうかしら？　敗戦の責任を私に押し付けてくれるなら、全部投げ出す諦めだって、つくのだけれど。

そこまで考えてから、頭を振る。まともな思考が失われていることを、彼女は認めない訳にはいかなかった。

これを治す為にも、セリアはさっさと仮眠を取ることにした。用意された天幕の中、資材で作られた簡易寝台の上に寝転がり、目をつむる。

思い悩み、人を動かしながら、ようやく得た僅かな間の休息。次に目を開けたとき、自分が行うべき事は、帰還の指示を出すことになるだろうと。そう理解して、セリアは暗い意識の中に落ちていった。

ジェイクは、サーレントから指示を受けた時、素直に感心した。疑問に固執せず、拙速を持って解決に臨むのは、おそらくこの場では最善策であろう。それは、彼も同意見である。

もし気になるから調べろ、と命じられた場合、わざわざ出向いてその非効率性を説かねばならなかった。この一手間を省けたというのは、ジェイクにとっては吉報であったといえよう。

「懸命だな」

「そうですね。あの姫様も、大局的なものの見方という物が出来たようで」

「……大局的？　まさかまさか。どうせあれこれ考えて、小難しい理論の後付でもしようとしたんだろうが、そんなのは重要じゃない」

これは、セリアの賢さを示すものではない。ジェイクは、むしろこの判断の中に、彼女の理性と本能の葛藤を見る思いだった。
「大事なのは、ここでもっとも生存率の高い選択を選んだってことだ。全ての理屈は、その理由付けに過ぎんよ」
そして生き延びることを優先した上で、セリアは自分の居場所、自分の使命を探し続けているのだ。
これを一刻も早く得るためにも、彼女は王都へと戻らねばならない。ジェイクはあのお姫様が、何を焦っているのか。どことなく察していた。

――隠しているようで、結構顔と態度に出るからな、あのお嬢ちゃんは。

敗戦の将として、処分を受け入れること。
王族として、善後策を協議すること。
大義名分の下で、軍の率いること。
そのどれもが、今は不可能なのだ。時が過ぎれば過ぎるほど、挽回は難しくなり――失態を重ねれば重ねるほど、自身の発言力は低下する。
「必要に迫られてか。今になって、使命感に駆られたのか。ま、何でもいいさ。……セリア殿下がお望みなら、早々にご希望に添えるようにしようじゃないか」
そういった意味で、セリアがいち早く自己保身の道に気付き、対応したというのであれば、これはむしろ褒めてよいことだ。
今でこそ窮地に立っているが、これを彼女の手で収めることが出来たなら、その政治的影響力はいかほどになるだろう。
少なくとも、セリアが国王として不足ない器であることは、証明できるはずだ。彼女が王冠を被ることを、誰も否定しえないはず。
すると、トリア王家にとっては、二人目の女王が誕生することになる。この歴史的瞬間に、もしかしたら立ち会えるかもしれないと

思えば、流石のジェイクも気分が高揚せずにはいられない。
「二時間ばかり兵を休ませたら、出るぞ。夕暮れまでは、まだ時間もある。夜まで休みなしだ。いいな？」
「了解しました。――これくらいの行軍、訓練で慣れております。お気遣いなく」
ジェイクとサーレント。そして彼らが統率する兵は、皆が義務を果たした。
王都へとたどり着く、その瞬間まで、セリアの安全を守り続けた。今度は、彼女の方が使命を果たさねばならぬ。
これより、セリアは試練に立ち向かう。この戦いの果てに、何を失い、何を得るのか。
その予測さえ、今はまだ付かなかった――。

第七章　保身（後書き）

展開が遅いのは仕様です。
私は、どうにもくどい文章を書くのが癖のようで。
……ともかく、ようやく次回から、反撃の準備に移れます。
複線が臭すぎるような気がしますが、これを上手く描写できるかどうか。
少し不安ですが、これまでと変わらず、見守っていてください。

第八章　足止

ついに王都へと、セリアはたどり着くことが出来た。予測からは二日ばかり遅れたが、それはサーレントの計算が間違っていたのではなく、拠点から兵を吸収して回る、という任務を思い出したからだ。

敵を引き離した、と思い、王都が近づくに連れ、セリアにも余裕と欲が生まれていた。これは、その結果といってよい。だが浪費に見合うだけの結果を、彼女は出したと思っている。

この中途の道程については、ジェイクとサーレントの功績が大きい。兵が反乱も起こさず、彼女に付き従ったのは、彼らの統率力が背景にあったからである。

力を失った権力は、その地位を下落させる。単純に言えば、下克上が起こるのだ。

そこまで極端ではなくても、もし彼らがおらず、シュウの存在と言う僥倖がなければ、セリアは帰還することなく野に躯をさらしたかも知れず、その身は綺麗なままでは居られなかったかもしれない。

――もしそうなっていたら、結構な大事になっていたでしょうね。トリア王室はもとより、国民達だって、ただでは済まされなかったかもしれない。

常識や道徳。倫理的な観点はもとより、軍事的にも権威の象徴を失う、と言う意味で、兵がセリアを襲うことは……自ら破滅を願うことと同義である。それは市民が国家を捨てた証証明となり、トリア王家への背信ともなったであろう。

しかし、古き支配者を廃したところで、侵略者が新たな庇護を授けるとは限らない。またトリアも担ぎ出す御輿の用意に手間取るであろうし、一度汚された台座をありがたがる兵も、少なくなるはず

だ。
突き詰めて考えれば、その影響力を減じさせた兵、ひいては国民に対し、侵略国も現支配階級も遠慮すべき理由はなくなってしまう。争いが終わった後、あらゆる損害の補填と、新たな権力の誇示に利用されるのは、他ならぬ民の血と財産なのだ。
それでもなお、時として人は自ら自滅の道を歩もうとする場合がある。自己保存の観点から見れば、やはり愚かしいが、誰だって常に賢明な判断が下せるわけではない。理論より感情を優先させる人間など、珍しくもないのだ。まして、最初の否が、王室の方にあるとすれば……。
――とすれば、半端な死に方は出来ない。せめて、なるべく迷惑のかからない死に方を選ぶようにしないと、後始末が大変になってしまう。
これが、セリアが敵軍の手にかかっていたとすれば、弔い合戦の名目が出来る。もし彼女自身が自らの過ちによって、国家の裁きに掛けられるというのであれば、それは法に則った正式な処分である。
まだ、これからどちらにでも転ぶ可能性があることを考慮して、もしもの時は、二つの内いずれかをえらばねばならない。その方が、まだ救いはあるのだ。
――ありえたかもしれない未来。たまにこれを想像して、悲観的になることもあったけれど。今となっては、意味のないことよね。
最悪の未来など、想像するだけ無益である。重要なのは、これからだった。
しかし今は案ずるより、報告をしなければ。情報収集は、その後でよいだろう。
サーレントが出していたはずの、提示報告の使者とは、結局合流

できなかった。道程をたどっていけば、報告帰りに戻る途中で、使者はセリアらと出くわすはずなのに――それがなかったのは、どういう理屈か。気がかりといえば、気がかりである。

――帰って来れたから、これで一安心……なんて、ね。思いは、しないけれど。

が、とにもかくにも、窮地は脱した。危機的状況に対して、何一つ問題は解決されていないが、個人の気分が軽くなる。

それはそれで、重要なことであった。何しろ、セリアはこれから、反抗の旗頭となるかもしれない存在なのだ。

気持ちを新たに、頭脳を切り替え、守勢から攻勢へと態度を改めねばならない。これは、心が重圧で潰されそうになっている状態では、なかなか実現できないことであろう。

「そういえば、シュウはどこまで戦いに行ったのやら。合流できなかったのは、任務の特性上、仕方のない事としても……やっぱり報告が来るまでは、あまり期待することもできないかしら」

セリアらが、無傷で帰還した時点で、すでに彼は役割を果たしたといえる。

足止め役を務めるだけならば、あの手勢で充分であったと言うことだろうが――もし、さらなる戦功を欲し、戦いを続けているとしたら。

どれほどの損害を、敵軍に与えているのだろう。ガレーナの軍隊は、二度にわたってトリアを破っている。容易い相手でないことは、明白であった。

「……本当に、気になる。もしかしたら、もしかしたら――私たちにとって、彼こそが救世主たりえるのかもしれない。彼の動き次第で、今後の軍事行動が決定されるのかもしれない」

その容易ならざる敵を、どうあしらっているのか。セリアは、彼の力の全てを把握する義務があった。

シュウに権限を譲与し、兵を任せた。セリアが、それを許したのだ。
だから、その結果も、その才覚も、彼女が責任を持って管理するべきなのだ。他の誰よりも、セリア自身がもっとも強く意識しなければならない。それが、任務を委任させた側の、最低限の義務であった。
――あるいは希望、なのかしら。出会いが強烈だっただけに、過大評価したがっているんだと思うけど。……でも、あの男はきっと、私が考える以上に危険で、強い人。それだけは、確信できる。
もし、期待通りの強さを、シュウが示したならば。セリアは、覚悟を決めるつもりであった。……そう、自ら陣頭に立ち、敗戦を覆して行く覚悟を。

セリアの見立ては正しく、シュウは戦いの天才だった。天から愛された彼の才能は、常に一定の勝利を約束した。
だが、ガレーナ軍は有能だった。まず確実に、才知に優れ戦術の機微を押さえた、優秀な将と参謀に恵まれていたのだから。
それゆえにシュウは勝ちきれておらず、ガレーナ軍の侵攻にもさほど影響は与えていない。セリアが願ったような、都合の良い救世主など、どこにも居はしないのだ。
「順調といえば順調だが、しょっぱい戦果だ。今のところ足止めにもなってねぇ」
「そうですか？　結構な物資を焼いてきたと思いますが」

「人手が足りん。単純にな？　ほら、アレだよ。――働く奴が多いほど、稼ぎは良くなるだろ。食い扶持は増えるが、人数が多ければ、出来ることもそれだけ多くなる。二百人の手勢で、無理をしない程度の範囲内では、そうそう大きな成果はだせんさ」

シュウは宣言どおり、ガレーナ軍の補給路を叩き、運ばれてくる兵糧やら武器やらを焼き続けていた。略奪の隙ができれば、可能な限りこれを許したが、所詮は懐に収まる程度である。少数である以上、機動性を捨てれば死あるのみ。ゆえに奪った積荷を載せる、車の用意さえなかった。

迅速さが求められるから、実際の行動時間も僅かな物だ。その上、繰り返すごとに警戒が強まるのだから、次第に機会も少なくなる。そろそろ罠を張ってくるようになっても、良い頃合か。

すると、今度は危険を少なくする為にも、妨害の規模を小さくする必要性さえ出て来よう。以後、うまみのありそうな補給部隊は、まず罠を張っていると考えるべきである。

「そもそも連中、最初から速攻でトリアを落とせるなんて、考えちゃいない。王都ってのは、だいたい堅牢な造りをしているからな。攻城兵器に兵糧の用意に……その他諸々の手配だけでも、三ヶ月はかかるだろう。だから最初からそれを見越して、念入りに物資は整えてある」

ガレーナ軍は、兵站を重視していた。シュウにとっては意外なほどに、連中は足元を固めてきている。軍勢の動きが鈍いのは、補給の為の拠点を整え、一箇所が停滞しても、別の場所から補えるよう、補給路を整備しているからだといえた。これは明らかに、長期戦を視野に入れた行動である。

「それならそれで、開戦当初からの常勝を予期してたってことになるし、これを支えた後方裏方の仕事振りも含めて、トリアは完敗してたってことになる。いやはや憂鬱になるね、どうにも。――あちらも、腰を据えてかかってきている。通常通りの戦法では、容易にはいかんぞ。これからは、な」

物資を運び込む過程の中で、隙を見出し、これを襲うことは出来ても。基地の中、拠点の守備の中にある物を焼くのは、恐ろしく困難なことだ。潜入し、集積所を突き止め、痛手となるほどの量を灰にする。――言葉にするだけなら早いのだが、行動を伴わせると、問題が続出する。

まず、拠点の出入りは厳しく監視されている。入り込むだけで一手間だ。

もし入れたとしても、一人や二人でのかく乱行動など、統率力の高い将にかかればあっという間に収束させられてしまう。といって、多数で試みても、誰かが失敗すれば事は露見する。それでは効果など望めまい。

第一、練度の高い潜入技能を持った兵など、ここにはいないのだ。前提からして、厳しいものがある。

「何にせよ、あちらさんは性急に攻め立てるつもりなんて、最初からなかった。勢いに乗って攻撃するつもりなら、もっと早めに行動してたろうよ」

シュウのご高説を、レックスは軽く聞き流していた。あえて理解する必要がないことも、長い付き合いの彼には良くわかっていた。

シュウは、己の考えと情報をつき合わせて、現実の整理を計り、これを口に出す。ことがことなので、身内にしか見せない態度であるが――気を許す相手を傍に置くことで、精神の安定もを同時に計っている。

そうすることによって、冷静さの維持と現状への対処法を導き出すのが、この男の癖なのだった。レックスは、それをわきまえていた。そして、事態がここまで差し迫っている場合、彼は誰より早く答えにたどり着く。レックスの助言さえ、この場では必須ではない。ただ、続きをうながす言葉さえあればいいのだ。

「左様で。……善後策としては、何が思いつきます？」

「そうさな。……こっちの兵の士気も、そろそろダレる頃だ。あとは一撃して、王都に褒美をせびりに行くとしよう」

言い方はぶっきらぼうだが、シュウは『最後の一押し』をきちんと行ってから、手柄を誇って帰るのだと、そう言っているのだ。これは、彼なりに今後を案じてのことであろう。それが決定打とならずとも、与えた被害は確実に敵の力を削ぐ。

「褒美をせびる、とはまた……剛毅な言い方をなされるもので」

「間違ってないだろ？　一応、これで結構な苦労をしたんだ。どんな栄誉を賜れるかは知らんが、多少の役得はあってもいいはずだ。――ま、それはいい。後のことだ。それより、具体的な行動に移っておきたい」

レックスは、苦笑しながら彼の命を待った。今、シュウは目に猛禽の如き光を宿している。大きな仕事を控えた時、彼はよくこのような顔を見せてくれた。

さて、今度は何をやらかしてくれるのか。レックスは、それが楽しみだった。

「兵の損耗は、死者三人。重傷を負って動けなかった奴が五人。あと、消えた奴が十四名だったか」

「正確には逃亡者ではなく、行方不明者、ですね。過半数以上は、その通りなのでしょうが」

「それでもまだ、二十名そこそこの被害に止まっている。兵力一割が消えた、といえば大きく感じるが、俺たちの現状は軍というより賊に近い。俺とお前で、連中を引っ張っていけば、あと一度くらいは持つだろう。……身内の傭兵をもぐり込ませているから、不心得者を誘導することも、まだ可能と思うが、どうだ？」

「――問題ないでしょう。お互い、賊時代からの付き合いです。自分らのやり方に、慣れているはず。貴方が引っ張ってくれれば、きっちり動いてくれますよ」

ならばよし、とシュウは笑む。彼はその場その場を切り抜けながら、自身の能力だけで、隊員を引っ張ってきていた。二百人程度の小規模の部隊であれば、まだ個人の武勇で人をひきつけることが可能ではある。

もちろん限界はあるが、彼はそれを見切って、今回の働きを最後にするつもりだ。
「俺たちは、敵のすぐ傍に潜んでいる。この期に及んで、こちらの気配を嗅ぎ取れないということは……隠密行動においては、まだ俺たちの方に分がある、ということだ」
ガレーナ軍は、国境を接した土地から、王都まで一直線に行軍している。その足跡を追っていたシュウは、これが何を意味しているか、正確に理解していた。
彼らが待機している地点は、ガレーナ軍のいる場所からは、ほど近い。正確には、軍主力の大部隊や、中核の士官らが配置されている駐屯地からは遠いが、先行している偵察隊とは、ものの三里と離れていないだろう。
それでも彼らが補足されていないのは、地理の把握と利用が徹底しているからに他ならない。都合のいい事にここら一帯は、トリア国内でも人の手があまり入っておらず、山間はもちろん、ふもとの湿地帯まで自然のままだ。敵国の中に入っているため、正確な地図がないというのも問題である。
こうした場で敵を捕捉するには、まず地理を掌握せねばならず、さらにその中から通り道を探る必要がある。
これを迅速に効率的に行うには経験が必要なのだが、ガレーナ軍にその蓄積はない。シュウは、一度所属していたから知っている。……あの連中は、軍事の常識は叩き込まれていても、山賊掃討の経験がないのだ。
真っ向勝負には強いが、隠れた弱者を叩くための機会に恵まれぬ。
中央の精鋭兵とは、そうした下衆な任務からは遠ざけられるのが常というもの。ゆえに、シュウは連中を騙せる。少なくとも、相手に姿を確認させない程度には、小ずるく立ち回れるのだった。
敵軍の行動を見るのは、もっと単純である。賊の連絡網は、あれで精密な方だ。気心の知れた仲間さえいれば、シュウはそれこそ軍の偵察隊に匹敵する『目』を持つことが出来る。

賊として過ごしてきた期間が長いシュウは、豪放に見えて臆病だ。だからこそ、臆病で知りたがりの同類を見分けられるし、使いこなせる。――そして見るべきものを見据えていれば、相手の弱点につけこみ、自分の長所を活かせるのだ。

「そうだな。狙うとしたら――あそこがいい。俺たちの存在と動きを悟られないうちに、やるべきことはやっておかんとな」

「あそこ、と申されますと？」

「橋だよ。……セリアのお姫様は別の道筋を通らせたから、気遣いはいらん。大河を横断する橋を崩しておけば、通行に支障をきたすはず。かなり時間を食うはずだ」

正確な理解が、最適の回答をもたらす。

ガレーナ軍が最短距離で王都を目指す以上、どうしても通らねば成らぬ場所が存在する。セリアは一刻も早く王都に戻るべき理由もあるが、同時に後方の拠点も回収していかなければならない。よって、最短の道程を選べなかった。

――いや、選ばせなかった、と言うべきか？　まあ、それはいい。

ここから王都までの間に、大きな河が流れている場所があった。無論、通行の為に橋が設けられているし、船町も存在する。が、これらを徹底して破壊しておけば、ガレーナ軍は一から河を渡る準備をするか、別の進路を取らねばならない。

「そんなに、効果があるでしょうか。大河を渡るのは、それは難儀でしょうが……もっと下流に行けば別の橋もあります」

「そうだな。そこまで丹念に潰していける余裕はない。――が、いいさ。俺たちなら二日三日で済む回り道でも、連中にとっては違う。だからこそ、価値があるんだよ」

せっかく目算の付いた道を放棄して、新たな地域を開拓する。それは大きな勇気が伴う決断であり、より慎重さが求められる作業でもある。失敗を恐れ、損害を嫌い、確実性を求めれば求めるほ

どに、時間を食う。地の利を確保する、ということは、それほどの大事であるのだ。
王都を落とす為の準備を、周到に整えてきているのだ。ここで不測の事態が起きたとしても、その姿勢を変えるとは思われない。
「しかし、それはそれで、後で復旧する際、かなり苦労することになりませんか？」
「知るかよ、そんなこと。まず、今を生き延びる為に必要なことをするんだ。時間稼ぎは、その為に必要なことだ。結果としてそれが国民を圧迫することになろうと、国家の存続が何より優先される。——何、気にするこたぁない。攻めてきたあいつらが悪いんだ。あっちはあっちで言いたいこともあるんだろうが、現実にトリアの国民に迷惑をかけているのは連中なんだ。文句は言わせんよ」
愚痴なら聞いてやるがね、とシュウは締めくくった。つまり、それが彼の結論なのだった。
「まあ案外、壊した橋を修復したり、船の調達なんかも、連中はやってくれるかもしれんぞ？　そしたら、事後処理も楽に済むんじゃないか？」
そこまで単純にことが済むとは、シュウもレックスも考えていない。しかし、ここで諧謔の一つも言えないようでは、救いがないではないか。
レックスはそう思えばこそ、彼の言葉を否定しない。やるべきことが決まったのなら、あとは実行するのみだ。

「——兵を集めろ」

そうして、彼らは動き出す。
足止めは、まず確実に成功するだろう。だが、王都に向かって、褒美を頂いて、その後は？
シュウは、まだ己の思考を全て語っていない。レックスも、あえて聞かなかった。

彼らは、自身の価値観と、栄光の為に、戦っていく。その方針だけは、最後まで変わらないのだと。それを、痛いほどに理解していたからだった。

第八章　足止（後書き）

少し、体調を崩しておりました。
ようやく本調子になりましたが、文章の方も本調子かどうかは、なんとも。
……またここら辺は、改訂することに成るかもしれません。

読者の方にはご迷惑をかけますが、どうぞお見捨てになられませぬよう、お願い申し上げます。次回は早めに投稿出来るかと思いますので、それまでお待ちください。

第九章　停滞

剣で敵兵の首を叩き落し、シュウは叫んだ。
「一人も逃がすな！　逃がせば殺されると思えよ！」
狂相の笑みで、彼は誰より多くの敵を斬り捨てていた。剣を振るたびに返り血を浴び、死体を量産する。
こと戦闘に置いて、シュウの力は隔絶していた。この場では三対一でも、彼を殺せる者はいないだろう。そして、一対一なら一方的に屠ることが出来る。
シュウは力量の差を正確に理解し、敵を結束させる余裕を与えず、一人、また一人と。確実に戦力を削っていった。
「アレンとシードは左方から回りこみ、サイアスとワーレンはそのまま前方へ突っ切れ！　レックスの隊が散らした連中を、端から潰して来るんだッ」
彼は自ら剣を振るいながらも、決して指揮を放棄しなかった。大まかな指示を仲間に与えた後で、近くにいた隊員を五人ばかり選んで連れ、敵の退路を断ちに掛かる。
的確な観察眼と、素早い決断力、豊かな行動力を持って、シュウは能動的に動く。こびりついた血と肉の脂で、すっかりなまくらになった剣を携えて。

――こちらの情報、持ち帰らせるのは、ちと面白くない。何も知らせぬまま皆殺しにした方が、敵の警戒心を煽れるだろう。

シュウの敵意を察知して、逃亡を計ろうとした兵がいた。正確には、本隊へ救援を求める使者であろうか。偵察隊であれば当然だが、まずどの地点でどれだけの敵兵に襲われたか、それを報告する義務があるはず。
もっとも、シュウはそれを伝えることを許さない。目ざとく伝令

兵を発見した彼は、これを全力で狩る。退路を断つのは、そのためでもあった。
「よし、後は士官を排除してから、一人一人潰していくか」
指揮統率するものを失えば、百名程度の小集団など、烏合の衆に過ぎない。そしてシュウは、その理論に基づき、まったく模範的な行動によって、皆殺しを実現したのである。
「そちらも終わったか？　レックス。……しかし、随分殺したな、お互いに」
「ええ、お互いに、直接斬り合って殺った数としては、過去最高になるんじゃないですか？　――とりあえず損害についてですが、最初に不意打ちで混乱させた分が効いてます。十三人動けなくなりましたが、百人程度を相手にした結果としては、上々でしょう」
結果だけを端的に述べるなら。
橋を落とす作業の途中、彼らは先行して来た敵部隊を察知。これを殲滅することに、成功したのである。
「しかし、随分小規模の偵察隊ですね。俺たちみたいなのと遭遇する可能性もあったんだし、こちらの力を推し量る上でも、もっと兵力に余裕を持たせていいはずですが」
「周りが騒がしくないところを見ると、周囲に敵はいないらしい。……迷っていた、なんてこともないか。ここから橋までは、道や環境の整備が不十分だが、そこまで複雑でもないはずだ」
狭道が続くので、まともに進めば隊列が伸びきってしまうが、これは別問題である。
敵指揮官が無能だった、と考えてもいいが、無能には無能なりの論理があろう。こういう細かい部分も見逃さず、つい考え込んでしまうのは、シュウの癖であった。
「――ま、今考えることでもないか。別働隊がここら辺を闊歩している可能性もある。さっさと作業を終わらせるか」
邪魔が入ったが、これで作業を続けられる、とシュウは胸をなでおろした。ここで活躍は、もう充分であろうと、身の程もわきまえ

ていた。
だが、ここで挙げた功績も、最終的に負けてしまったのなら、意味がない。
本格的に勝利に貢献する為、奮闘しなければならないのは、むしろこれからの戦いにおいてであろう。
――次の行動については、姫様次第か？　一応色々と考えてはいるが、全ての策が機能できるとも限らん。……限らんが、どうとでもするさ。せいぜい、高く売りつけてやるとしよう。
その点に思いを致すと、この不遜な男も、いくらかの不利を悟らざるを得ない。
もっとも、だからこそ見返りは大きく、活躍する意味もあるのだと、理解していた。それゆえに、やりがいもあるだろう、と。

ガレーナが地の利を失っているとはいえ、戦力も物資も固められた今では、運用次第でどうにでも出来る部分は多い。地理に不慣れなままでいてくれる時間も、そう多く残されてはいないだろう。
有能で勤勉な人間ほど、経験の蓄積を現実へ反映させることが上手い。そしてセリアらにとっては忌々しいことに、ガレーナ軍はそうした人間に恵まれている。だからこそ、シュウは短期間で、出来る限りの戦果を上げようとしたのだった。
「順調すぎたツケが、ここが出てきたか。……なにもかもが上手くいく、ということには、なってくれないらしい」
舌打ちして、ガレーナの小隊長は現状を嘆いて見せた。
先攻した偵察隊の全滅を、現場にたどり着くまで悟れなかったのは、厳密には彼の責任ではなかった。

しかし、それでも彼は悔やむ。警戒を怠らなければ、察知できたのではないか。油断なく、互いに連携できる位置にいたなら、同僚の失敗を補助できたかもしれないのに、と。

――上司も自分も、補給の方にばかり、目が行っていた。敵の妨害は、そちらに限定されていると思い込んでしまった。……いや、一応それなりの数を偵察に投入しているのだから、前方での敵の工作を、警戒しなかったわけではない、のか。問題は、現場での協調性の欠如。ここまで身内が不甲斐ないとは、参謀連中も予想していなかったのだろうな。

誰一人逃げられなかった事実をかんがみれば、シュウの指揮は見事だったといえるだろう。まったく慈悲の欠片もなくやりとげた、という意味で。

「敵の指揮官は、皆殺しの手管には長けているようだ。突出した隊をいち早く叩き、戦果を固執せずに早々に退く。……こちらに情報をつかませない為とはいえ、よくここまで徹底できたものだ」

もっとも、だから相手を賞賛しよう、とは思わない。この惨状を作り出した敵将について、想像することはあれど、やるべき事は変わらない。

彼はガレーナの士官であり、そうである以上は地位に応じた責務が存在する。男は自身が受けた教育に相応しい、結果を出さなくては成らない。具体的には、現状の分析である。

「ユージン小隊長殿、我々も早々に帰還するべきでは？　この惨状を報告しなければまりませんし、敵の部隊が近くに潜んでいる可能性もあります」

「いや、どうかな。襲うつもりなら、すでに仕掛けてきてもいいはずだ。その気配がないということは……もう敵部隊は逃げたと見ていいだろう」

男の名は、ユージンと言った。まだ三十を過ぎたばかりの下級の

士官であるが、十五で軍に入ってからずっと、距離を空けることなく身を置き続けている。
その年月を生き続け、鍛えられ続ければ、一種の迫力が身に付く。それは、小隊を率いるには充分すぎる物であった。
しかしあいにくと容姿に関しては、筋肉がつきにくい体質らしく、その軍歴に反して体つきは華奢である。体面して話してみると、精悍で凛々しい印象を相手に与えるのだが、一見してそれを見抜ける人は少ないだろう。
「少し、探ってみるか」
「当初の予定通り、ですか？」
兵の役目は、命令に従って、その任務を果たすことにある。これを骨の髄まで叩き込まれている兵卒は、ユージンの判断に異を唱えなかった。
「当初の予定からは、すでに外れている。馬鹿が一名、何を焦ったのか前に出すぎた。その結果がこれ、だ。……誰に対抗意識を持っていたのかは知らんが、独断で動いていい理由にはならないというのに。中隊長殿にどう言い訳するつもりだったんだろうな？　今更だが」
「はぁ」
ユージンの中に、後悔はすでにない。あるのは反省と、この事態を引き起こした同輩への悪態だけだった。
冷静に考えてみれば、部下を無駄死にさせた相手に同情を抱く必要など何処にあろう。
教訓さえ頂ければ、もう用はない。以後気に掛けるべきは、現場の情報のみである。
「いや、いい。聞かなかったことにしてくれ。とりあえず、周囲を探ろう。なるべく、出来るだけ前の方を」
そもそも、偵察と言うものは情報を探って、持ち帰ることに意義があった。前の部隊が壊滅したからといって、これを容易に投げ出すことは、なるべくしたくない。

当初の目的に立ち返るなら、彼らも犠牲になった隊の連中も、地理の確認と、接触したならば敵兵の動きまで報告する義務がある。
殲滅されたという結果も含めて、任務の範囲内。ユージンはこれを確実に届けた後ならば、さらなる結果を求めて進むことも出来るのだ。
「前の方、でありますか？」
「そうだ。橋の状態を見極めて報告するくらいは、しておきたい。私の想像通りなら、おそらく――すでに手遅れだろうが」
兵の疑問に、ユージンが答える。それが、ギリギリの許容範囲であろう。失敗例は目の前にあるが、何事も柔軟に判断すべきである。今ならおそらく可能だと、彼は結論付けた。
別部隊が皆殺しにされたことと、現場の検証結果。それらを書面に記し、伝令兵に持たせて後方の野営地に向かわせる。
一つか二つは潰されてもいいように、三人を別々に動かした。これで、最低限の義務は果たせたと言える。自分たちが帰って来れなくなったら、その事実そのものが情報となるだろう。
……幸運なことに、ユージンらはそんな不幸に見舞われることには、ならなかったが。

――河を見れば案の定、か。トリアにも結構な人材がいるらしい。なかなかどうして、あなどれない。

そうした上で、大河を掛ける橋の崩壊を確認する。
小さな隊の、小さな出来事であったが、その内容自体は今後の戦略を左右するものと成った。
ユージンの報告から、もっとも簡単な道程を歩めないことが発覚したのだ。地の利に恵まれていないガレーナ軍は、新たに進軍経路を見出さねばならなくなる。
安全を確保する手間と、行軍にかかる疲労と消費をかんがみれば、まさにシュウが狙ったとおり、ガレーナ軍は余計な時間を浪費する

ことになるだろう。
それがトリア王国の寿命を引き伸ばす鍵となるのか、あるいは悪あがきに終わるのか。全ては、両者の対応次第。どう転ぶかは、今はまだ未知の範囲に収まっていた。

ユージンが、シュウの残した爪痕を目にしていた頃。
しっかりと壊しておいた橋の向こう側で、シュウは改めて思案していた。
「建てるより壊すほうが簡単なのは、了解していたが……案外簡単に処理できたもんだな。あと二時間も手間取っていれば、補足されたかもしれん。我ながら、危ない橋をわたったもんだ」
「壊したのも橋なだけに……ですか。くだらないことを言ってないで、さっさと王都に向かいましょう。行動は早いに越したことはないと、言っていたのは貴方の方ですよ？」
シュウとレックスが、減らず口を叩く余裕を持てている。
安全の確保は、それだけ重要なものだといってよい。確実な道程を失ったガレーナ軍は、シュウを追跡できない。これでようやく、彼らも未来について、真剣に思いを致すことが出来る。

――王都へと凱旋……というには、まだ早いか。ガレーナ軍を退けた訳でもなし、単に足止めをしただけ。それだけでも充分すぎる戦果だろうが、さてあの姫様以外に、これを評価する奴が、どれほどいるのかね？

無論、目端の利くものならシュウの働きを、喜ばしく思うだろう。たとえば、外交に携わる官吏や、政治を統轄する宰相殿であれば、一時の敵軍の遅れがもたらす効用を、しっかり理解しているはずである。

侵攻軍の速度が緩めば、降伏や抵抗の為の根回しに割ける時間が増える。敵国との外交の落とし所を探ることもできる。またあらゆる努力が無に帰したとしても、祖国滅亡の間際まで、自身の矜持を全うしたという事実くらいは作ることができよう。

だが問題は、シュウの同僚となるであろう軍人たちが、その功績を認めてくれるかどうか、である。ぽっと出の人間が、狡い戦果で非常識な昇進を遂げたら、誰だって怪しむ。

これで怪しまれた結果、後ろから刺されては間抜けすぎる。叩けばほこりが出る身であるシュウにとっては、無視できない現実であった。

「よし、決めた」

「……何がですか？」

「いただく褒美を、だよ。そうだな、やはりアレだな。ここは一つ、独立部隊の設立と、その隊長職を願い出るとしようか」

シュウにとっては、その方が都合がいいのだ。下手に高位の役職を受け取るよりは、自分の判断で動かせる部隊を持った方が、手柄を立てるにも都合がいい。

セリアの口ぞえだけで、それが可能かは微妙な所だが、褒美として望みうる最高の品がこれであることは、疑いなかった。

出る杭は打たれるというものだし、いかに戦功を立てようと難癖は付けられるのだろうが、そんなことは今考えるべきことではない。

「そうですね、それはいい。……まあ、今はともかく、無事に帰還することです。峠は越えましたが、油断していると、思わぬところから反撃を食らいやすくなります」

「帰るまでが戦争です、ってか？　――レックス、お前、もう少し肩の力を抜いたらどうだ。俺が決めたことは必ず実現するし、俺が褒美を頂く時は、いつだって引き出せる限界までぼったくれると決まっているんだ」

「そこまで自分を信じられるというのは、幸せなことですね。……せび見習いたいのですが、根が小心者の自分には、無理みたいです。

一応、上手くいかなかった時のことは、考えているのでしょうね？」
レックスは、シュウの言葉に半信半疑の様子であった。
確かに、シュウは根拠のないことは言ったことがなく、これまでに断言したことは、常に実行しつづけていた。だから、まったく信に置けない、とまではレックスも思っていないだが――。
いささか、ことが大きくなりすぎている。全てを把握しようもない彼は、シュウの行動にいくらかの危うさを感じずにはいられなかったのだ。
「欲張りの悪党ほど、思考を重ねに重ねて、最悪の事態を避けようとするもんだ。その点は信頼してくれているものと、思っていたが？」
レックスは、あえて答えなかった。沈黙したままでも、真意は伝わるとわかっていたから。
傭兵にしろ、賊徒にしろ、そんな無法者どもの上に立つ以上は、傑物であらねばならない。そして、そんな傑物の元で片腕として働くなら、あらゆる意味でその当人を理解しなくてはならない。仮にレックスがシュウを理解しきれていなかったなら、ここまでたどり着く前に逃げているだろう。
「なら、これ以上は追求しません。……指示があれば、遠慮なくどうぞ。私の力でよければ、いくらでも使ってやってください」
結局の所、レックスはシュウと一緒に働くことが、嫌いではないのだ。
だからここぞと言う所で、甘くなる。信頼している、ということは、こういうことなのだろうかと、時折思うこともあった。
そして、二人は敗残兵を連れて、セリアより遅れて王都にたどり着く。ここでまた一悶着起こるとしても、セリアとの繋がりがある以上、悪い扱いはされまい。
レックスは、そう思っていた。彼だけが、そう信じていた。

ユージンの報告を受け取ったガレーナ軍は、戦略の見直しを迫られた。
王都へと直進できる、大河の橋が破壊された為だ。この確認を取ったガレーナの軍首脳部は、シュウらの予測どおり進路を変え、拙速でも王都の陥落という目的を固持する姿勢をとる。
橋を再建してから、一気に大兵力を渡す手もあったが、ここ一番の詰めの段階で、余計な時間を食うことを嫌がったのである。

「我々は勝ちつつある。ここで無闇に停滞して勢いを削がせるより、とにかく兵を動かして、勝利への道程を進めるべきだ」

という意見が、慎重論よりもやや優勢であったこと。
何より、初戦で立て続けにトリア軍を打ち破ったことで、ガレーナ軍は兵力においても相手を上回っていること。
補給をシュウに叩かれながらも、いまだ大きな破綻はきたさず、今度も全軍を食わせる目処が立っていること――などが、決戦を急ぐべき理由としてあった。
またその中でもっとも大きな理由としては、政治的な保身が挙げられよう。

「この遠征は、トリアを併合し、この広大な土地をガレーナの国家機構に取り込むために行われている。いわゆる侵略だが、それだけに繊細な問題を抱えている。――つまり、我々がガレーナにそむいて、トリアの土地を私物化し、兵もろとも独立する可能性がある、ということだ。無論これは暴論に過ぎないが、この手の謀略を敵が使ってくる可能性は常にある。これでもし国元の群臣が踊らされ、王にまで猜疑心を持たれたなら……我々の立場は、ひどく微妙なものになるぞ」

「それが過剰な心配であるとしても、侵攻にやたらと時間を掛けてしまえば、それは軍の汚点となりうる。文官どもに、『勝ちが決まった戦争をだらだらと長引かせて、戦費を拡大し、国庫を圧迫させた』などと言われたくはない。……この戦で完勝すれば、その功は多大なものとなる。ガレーナの利益も大きなものだが、論功行賞でその膨大な利益の分配を迫られることもまた、間違いないだろう。これを嫌がり、少しの落ち度でも大げさに解釈され、褒美をケチられてはかなわない」

これら高級士官の悩みは別としても、勝利を味わい続けているガレーナの臣民は、こんな戦争など早々に終わらせて、手厚い恩賞を授かりたいと考えていたのは間違いない。

土地の問題程度で歩みを止めるくらいなら、多少の危険は承知の上で、進攻に踏み切ろう。それが、ガレーナ遠征軍の上から下まで統一された見解であった。

ユージンという、ただ一人の例外を除いて。

「急ぐのはいい。道を変える事自体は問題じゃない。問題は……最初にあまりに劇的に勝ちすぎたために、誰もが敵を舐め始めている、ということだ。目の前の難事より、甘い未来に思いを寄せてしまっている、ということだ。――こうなれば余計な欲を抱きがちになるし、劣勢になってもその現実を直視しなくなる。一つ歯車が狂えば、大勝が大負けに転じかねないぞ」

さりとて、そんな事を公言すればユージンの方が処罰の対象になるだろう。一人で勝手に呟くだけならともかく、同僚やら上司やらにこの懸念を伝えた所で、誰も退こうとはしないのはわかりきっていた。

ガレーナ軍に、慎重さが欠けているわけではない。まだ冷静な判断力を失ったわけでもなく、後方の安全に関してはより気を使って

対応することが、もう決まっている。
　ありがちな武器の補給不足や餓えに悩まされることは、おそらくないだろう。この点、ユージンとて疑ってはいなかった。彼自身、ただ漠然とした不安があるだけで、実際に軍の動きに異議があるわけではないのだ。

――そう、何か好ましくないことが起こるとしたら、これからなのだ。恐れるべきは戦術的な失敗ではなく、多分もっと別の何か。……何か、か。くだらん。結局、取り越し苦労ではないか。

結局ユージンは、余計な事を考えず、仕事に集中することを選んだ。
　彼は小隊を統率し、トリア軍と戦わせる義務がある。兵の士気を下げず、敵を殺す勇気を与えるのは、これで結構難しいものだと、彼は考えていた。
　ユージンの武勇は人並み程度であり、智謀にもあまり自信はない。何より才気で人を引っ張れるような人間ではないから、カリスマ性など求めた所で無駄だと理解している。
　だから誰よりも努力し、誰よりも己を律することに長けていなければ、人を率いる資格などないのだと思い込んでいた。たとえ、二十名程度の小隊であっても、彼はその理想を堅持することを選んだ。
　それが、唯一の生き延びる道であると、本能で悟っているかのように。

――もし敗北しても、無様な敗走、無益な全滅だけは許さない。そんなくだらん所まで、誰かに似る必要はない。

どうしてここまで、末端の下級指揮官に過ぎない自分が警戒しなければならないのか。
　それを疑問に思いつつも、無視することだけは出来なかった。胸

の内から根拠のない不安が拡大していく様は、不可解であったが……ユージンは自分を偽れる人間ではなく、過剰な警戒心を維持し続けた。

そして兵と共に、王都への道のりを歩む。トリアへのとどめとなるべき一撃を、加える為に。

この根拠のない不安が、ユージンの特別な感性、あるいは本能による危険探知であったのだと知るのは、もう少し後のことになる。

有能で勤勉な人間ほど、経験の蓄積を現実へ反映させることが上手い。

ユージンほど、この定義に当てはまる人間も、そういないだろう。彼はこれまでもそうであったし、これからも変わるまい。

だが彼を評価する人間は常に変わりえるし、実際に数ヵ月後、劇的な変化を見せることになるのだった。

第九章　停滞（後書き）

早めに投稿……といいながら、二週間かかりました。以後も月に二回くらいが限界になりそうです。
最近本気で、筆の早い人が羨ましく感じますね。

とにもかくにも、ようやく動き始めた、という気がします。
以後は劇的に物語を進めていく、つもりです。さっさと終戦まで一気に書き上げたいのですが、どうにもならなかったその時は、どうか勘弁してやってください。

では、また次回で。感想には餓えておりますので、出来れば適当にでも書いてやってくだされば、嬉しく思います。

第十章　会議

トリアは、決して脆い国ではなかった。国家の成立より、はや二百年。周辺各国と比べれば短い歴史ではあるが、それでも組織が定着してしばらく経つ。民も官吏も、トリア王国という枠組みの中で生きることに慣れていた。

たとえ王が死に、国家の柱が欠けた状態であっても、これを補助し組織を生きながらえさせようとする。頂点から末端まで、それくらいの義務感を起こさせる程度には、しっかりした意識も芽生えさせていたのである。

セリアが王都へと帰還した時、敗戦の責より先に、まずは生存を喜ばれた。王の嫡子が敵の手に落ちている今、たとえ無力な王女でも、使いようはあると判断されたのだろう。

――存在価値を認められたのは、嬉しいやら悲しいやら。色々と複雑だけれど、何とも言いがたい。きっと、死ぬまで、私は悩み続けるんでしょうね。

一晩休んで、戦いの疲れを取ると、セリアは早速動かされた。姫をいたわる気持ちよりも、国家の大事を優先した結果であろう。彼女は派遣された官吏に、改めてこれまでの事情を説明した。

「なるほど、よくわかりました。また何か、必要なことがあれば、お話を聞きに来ましょう。……願わくば、それが弾劾の使者とならないよう、祈っております」

セリアが持ち帰った情報は、帰ったその日に書類にまとめて提出していたはずだが、王都の群臣にはさほど新鮮味のある内容ではな

かったらしい。
官吏への説明も書類の内容をなぞるだけであったにも関わらず、突っ込んだ質問はされなかった。そのまま衆議のある日まで、お呼びはかからずじまい。
しかし、その官吏の言い方は、不遜であり、あまりにも不敬であった。まるで、セリアが裁かれるべき罪人であるかのように、そう言ってのける。これは、いかなる事実を示すものなのだろうと、不快に思うより先に、疑問に思った。

――こんな時に失点を突付きまわすなんて、およそ有能な人間することじゃないって思うけど。あるいは全ての失態を私のせいにして、切り捨てるつもりだったりしたのかしら？　だとしても、素直に悪意を見せる必要はなかったのに。

もしかしたら、これは警告。『臣下の中に、セリアを害する意図を持った人間がいる』と、誰かが官吏を通して伝えてくれたのかもしれない。
そう考えれば納得は出来るが、それならそれで今度は腹が立ってくる。何もこんな真正面から、せっかく認められた自分の存在価値を、否定しに来なくても良かったのではないか。

――わざわざ人を使って伝えるなんて、稚気が過ぎてるし、なんだか不快ね。私が危ないって伝えるだけなら、こっそり書面で教えてくれれば済むことじゃない。

要するに、セリアは手心を加えて欲しかったのだ。頼れる人材が、もう傍にいない今となっては、精神的な余裕も消えている。根拠はなくとも、せめて楽観できる要素の一つも、見出したいというのが彼女の本音であった。
ジェイクとサーレントとは、王都に入城し、軍の再編成を行う段

階で離れていた。護衛の任務を終えたのだから、今度は別の任務の為に、彼らは働かねばならない。

「昇進と褒美の沙汰は、後で構いません。ただ、覚えて置いていただければよろしい」

「命令があれば、従います。我々軍人は、それが取り柄ですので」

セリアには本来、軍権がない。期間までの道のりにおいては、彼女も独自の判断を迫られたが、それはあくまで非常時の、危機回避の為の特例であったといってよい。

彼女は軍人を信任し、仕事を任せる立場であって、自ら指揮を行うべき立場ではなかった。少なくとも、正式に戴冠を行うまでは、そのはずだった。

――ええ、確かに覚えておくわ。……功績には違いないから、見返りは用意させる。それくらいの道理を指摘することくらいは、私にも許されているから。

セリアは寂しく思ったが、その気になれば解決できそうな問題でもある。彼女にそれなりの発言力が認められれば、彼らを直属の部下として抱えることも不可能ではない。

ただ、セリアは敗北した軍を持ち帰ってきただけで、戦功といえるものはなく、これから自力で立場を強化する必要があった。

その機会をいかに見出し、いかに活かすのか。全ては自分の才覚にかかっている。

――トリアは負けた、けれど蹂躙されるばかりじゃない。必ず、国家を挙げて反撃に転じようとするでしょう。……その為に、国家の首脳部を集めて軍議が行われる。ここで何かしらの行動を起こして、介入することが出来たなら。……やれることは、まだあるはず。

セリアの思惑通り、国家の重鎮たちが一堂に会し、今後の方策を模索する運びとなる。
王都に帰ってきてから、すぐ報告、軍の再編によるジェイクらとの別れ、それから会議に呼びつけられる――と。こうも事態が急変すると、周囲の環境に流され続け、気疲れしている自分を自覚せずにはいられなかった。
体の疲労はともかく、精神的な消耗が大きい。『誰か』の上位者であったこと、率いるべき何者かを失った王女は、一個では単なる少女に過ぎなかった。
帰還中は不安はあれども、軍に守られているという安心感があった。だが王都の中では、今はまだ確たる権限を持ち得ないセリアより、政治的に上位に立つ者が存在している。
それは強大な宮廷勢力を持つ派閥であったり、多大な実績を残した元老であったりする。そして法治国家である以上、法の執行が王族の権威より強い力を発揮するのは、ある意味当然であった。
己より上に、何かがある。それによって、自らの運命を決められてしまう。そう思うだけで、彼女は身が縮こまる。
つまるところ、セリアは自分がその場で最上位に立たなければ、気兼ねなく全力を尽くせない人間であるのだった。心が脆い、と言い換えても良いかもしれない。

「ではセリア殿下、席におつきください」

老人の声で、彼女は規定の席につく。会議室に群臣が集まり、これから善後策の話し合いが始まろうとしていた。
同席を求められたとはいえ、実際に意見を求められることはあるまいが、それでも彼女は王女である。蚊帳の外に置いて無視するには、少々大きすぎる存在なのであろう。

セリアはもう少し休んでいたかったが、会議までにはきちんと体調を整えていた。これは若さの特権、とでもいうべきであろうか。

「殿下の帰還を、喜んでばかりもいられませぬ。そろそろ現実に戻りましょう。具体的には、いかにして外敵から身を守り、国家を存続させたものか。……そのために必要なことを検討し、実行を決定する。今回の会議は、それが目的として開かれた物です。いささか性急ではありますが、まずそれを各自ご自覚いただきたい」

最初に発言したのは、ギルスター・フォード。今年で齢七十になる国の元老である。この会議では彼が議長となり中心になって議論を進め、同席している者たちで意見を出し合い、セリアが決を採る、という形になる。

ともかくギルスターという男には、それだけの権限を許される実績と、能力があったのだ。

「まさに。では、これより会議を始めましょう。引き続き、ギルスターより発言を許可します」

この場でのセリアは、絶対的な決定権が保証されているわけではなく、結果が出れば、それをもっともらしく容認する……という役割が、割り振られているだけに過ぎない。

彼女の見識には誰も期待しておらず、王家の承認を得る、という形式だけを重んじた処置と言えるだろう。単なる形骸とはいえ、正当性と名分はいつでも必要な物なのだ。

――下手に期待されても困るから、この扱いはむしろ妥当かな？

それはそれとして、あのお爺さん。話に聞く限りでは、かなり有能で、頼れそうな感じだけれど……。

セリアにとっては、ギルスターは祖父の代からトリアに仕える重鎮であり、ぞんざいに扱ってよい人材ではない。何といっても、父が彼を信任してさえいれば、こうもひどい事態にはならなかっただろう――と、噂されるくらいの相手だ。

薄く、柔らかそうな白髪に、深く刻まれた皺。これらは単に老いを意味するものではなく、当人の気品と相まって、むしろ叡智と老獪さを感じさせる。その威厳というか、雰囲気がセリアは苦手だった。父が健在のときは、特に接する必要もなかったから、意識せずに済んでいたのだが。

「それでは、僭越ながら申し上げます。我々は今、ガレーナからの侵略を受けております。争いは我らの王から吹っ掛けた事なれど、これを理由に国を滅ぼされては、詫びのしようもない。領土の割譲程度で、この騒動を治めるのが上策かと思われますな」

「……それで、止まってくれるかしら？　侵略者はいつだって、強欲なものよ？」

「先王と同じく、ですな。……しかし、止めて見せますとも、セリア様。私はこの手の火消し役としては、年季が入っているほうでして。――伊達に責任を背負ってはおりません。まあ、その点は疑いなく」

ギルスターは、オルスの元では、地位を引き下げられた上、あの浅慮な王の尻拭いに奔走していた。だが、このたびの事変で宰相に復職し、この会議の責任者となっている。

ことの過程を大まかに述べるなら、セリアが暫定的な王権の継承が為された際、ギルスターの過去の功績を考慮し、緊急事態を処理させるために異例の復職――という形態になろうか。これは彼女が戦いにおもむく以前、父の死が確定した時、迅速に行われたことである。ギルスターの影響力、政治力は、それほどまでに強い。

何よりセリアに事態を収拾する能力がないならば、王権の代理人

を立てねばならない。これは、それをかんがみた上での処置でもある。そして彼女としても、この彼の発言が事実であるなら、おおいに頼りにしたい所であった。

「じゃあ、それは疑わないことにするとして……貴方の発言を整理すると、『領土の割譲が許されるなら、戦争を終結させて見せる』ってことで、間違いない？」

「はい。あちらはかなり吹っ掛けてくるでしょう。――が、なんとか侵攻された領土の半分は取り返して見せますとも」

つまり、占領された国土の半分はあきらめよ、ということか。

半分も返ってくる、という受け取り方もあるが、セリアはあえて意地の悪い解釈をする。

一人の政治家として、判断するならば。こう理解するのが正しいように思えたからだ。

「それでよろしいのでしょうか。フォード宰相の案では、こちらが領土をあきらめねばならない。国家として、それに仕える廷臣として、これは承服できかねます。土地に関してだけは、決して退いてはならない。――でなければ、我々貴族は、何によって立てば良いのか。そこに住む国民に対しての、あらゆる義務を放棄してしまうような手は、決して許容できませぬ」

セリアの内心を代弁したような、この意見。

これを発したのは、カイル・アースランドという青年だった。鮮やかな金色の髪と、女子に持て囃されるほどの面貌。美男子の中でも、これほどの水準のものはまれであろうと思われるほど、完成度の高い容姿の持ち主である。

また、彼が外面だけの人間ではないことを、セリアは良く知っていた。彼とは、小さい頃に少し、交流を持っていたことがある。そ

のときから彼は、堂々たる美丈夫であったことを、彼女は思い出していた。

「この場に、単なる批判は必要ない。当然、代案は持ち合わせておろうな？」

「……戦うのです。我々にはまだ戦力が残されている。セリア殿下が、わざわざ骨を折ってくれたのに、それを活用しないままでは臆病者のそしりを免れ得ないでしょう」

一理あった。

最初から屈するより、戦いによって活路を見出す方が、まだ納得しやすい。禍根を残さない意味でも、ここで力を尽くした方が良いだろう。

セリアが知る限り、軍人たちにとって、戦わずして敗北することは何よりの恥といえた。下手に降伏すれば、思慮の足りない輩が下野、賊徒化し、反乱を企てるかもしれない。それを防ぐ意味でも、戦意がくじけるまで戦いを挑むというのは、意味のある行為だ。

ただし、勝算がなければ、やはりただの自殺行為。セリアは、その点をカイルがどう理解しているか。そこに興味を抱く。

「カイル、わしは代案を問うた。具体的にどう戦い、結果何を得ようとするのか。そこまで答えなくては、貴様の言に価値はない。――どうだ？」

「それは……」

「――ああいや、すまんな。その前に確認せねばならぬことがあるのを、忘れていた。王都の残存兵力と、偵察で得た敵の戦力について、報告があったのだったな？　……お互い話を進めようと、慌てすぎたようだ。まずは軍部からの報告を聞くべきであった。そうではないかな。うん？」

カイルの発言を途中でさえぎると、ギルスターは彼から顔をそむけ、別の席の人物に目をやった。
おそらく、その者が軍部から出向してきた、高級士官なのだろう。セリアは見覚えがなかったが、確かに軍人らしい服装の人物がそこにいる。
明らかに機会を逃したカイルは、半ば呆然とした表情のまま、かの宰相の言を聞いていた。そして我を取り戻した時には、すでに期を逸し、話題は別の方向へと流れていく。

――いやらしいことを、するものね。

議論の流れを切ったのもそうだが、その程度の情報であれば、あらかじめ通達しておくという手があったはずである。またそうでなくとも、議長なのだから、最初に自分の意見を述べる前に、情報の公開をすすめるべきだったのだ。
最初から異論が出るのがわかっていて、尚且つその意見の流れを封ずる為に、彼が情報の公開時期を遅らせていたとしたら――ギルスターは、とんでもなく陰湿な男であるといえよう。そんな意図もなく、ただ単に失念していただけ、というのであれば、まだ可愛げもあるのだが……。

「まず、我が軍が動員できる全兵力が、現状でおよそ三万。これが王都におけるトリア軍の限界です。地方の兵は、すでにあてになりません。掻き集めれば千か二千は寄越せるでしょうが、ただでさえ少ない拠点の守備兵をこれ以上引き抜いては、更なる外患を呼び寄せる可能性が出てきます。よって、この地に集中させた兵力だけが頼みとなります」

隣国はガレーナだけではない。弱った犬を打ち据えるように、第二第三の侵攻を呼び寄せる破目になっては、全てが御破算だ。

前述のギルスターの言葉が真実であれば、ことは二国間の外交でケリをつけられる。下手を打って、事態をさらに混沌とさせるのは、セリアの望むところではなかった。無論、それは他の群臣も同意見だろう。国内から援軍を調達する、という策は、この時点で破棄される。

「軍需物資は試算したところ、食わせるだけなら三年近くは大丈夫のようで。武具はいくらか不安がありますが、王都の鍛冶師に動員を掛け、質をある程度目こぼしすれば、思い切り消費しても一年から二年は持たせられるとのこと。……敵軍の兵力に関しては、先の戦で把握した限りでは、大体二万と少し。多くとも二万五千には届かないと見られます。ただ、今後増援が来ないとも限りません。補給拠点を増設し、攻城兵器を作成しているという話もありますが、詳細についてはまだ不明です」

貴重な情報である。セリアは聞き逃さないよう集中し、理解した端から頭の中に書き込んでいった。

食わせるだけなら三年、という事実は特に大きい。王都の中には、当然民間人もいる。彼らが使う分も含めて三年というのであれば、その備蓄は多大な物であろう。

彼女はまず、それだけの貯蓄を行った前代の王に（すなわち父に）、敬意を払おうと思った。あくまで事務的な好意であり、感情的なものではありえなかったが。

「参考までに申し上げると、オルス王がガレーナに攻め込んだ時の兵数が二万。次にセリア様を連れた負け戦では、一万六千。前者はほぼ壊滅状態で、重傷者を除いた生き残りが二割以下。後者は兵を吸収して帰ってこられたため、おおよそ三割強が生還し、都に配備しなおすことが出来ました。――つまり、こちらの全兵力のうち、五千名程度は、セリア様の功績になります」

余計な情報であると、一瞬セリアは判断しかけた。
だが良く考えてみると、ガレーナ軍はこの連戦を切り抜けるどころか、大勝して、侵攻さえしてきているのだ。
とすると……敵の消耗は、こちらと比べてどれくらい深刻なものなのだろう？　相対的にはこちらが大きいだろうが、敵の犠牲も皆無であるはずがない。
また遠征にかかる費用は、ガレーナの財政は、二連戦の後で長期攻城戦を行えるほど、充実しているのだろうか？　そんなところにまで、意識が行く。
思考に浸っている間も、細かい報告が続けられていた。セリアはその残り全てを聞き流していたが、幸運にもそれは彼女に不都合を呼び寄せはしなかった。

「軍部からの報告は以上です」

その締めの発言で、ようやくセリアは我に返った。結果として、聞いてなくとも支障のない部分であったから、悪影響を残すことはなかったが、それで自身のうかつさを弁護できようはずもない。以後は気を引き締めねばならぬと、彼女は机の下で、密かにその手の甲をつねっていた。

――だめだめ、気持ちを強く持たないと。私は、自分に出来ることをやるって、もう決めたんだから。

まだ、話し合いは始まったばかり……というどころか、まだ方針の決定さえされていない状態だ。
長丁場を、覚悟せねばならない。セリアは改めて姿勢を正し、会議に付いていけるよう、努力を尽くそうとするのであった。

第十章　会議（後書き）

書き直す、体力さえ今は惜しい……。
最低限の部分は、見直して、どうにか修正しました。
ここからグダグダな会議が、長く続きます。これが他人であれば、その内容が面白ければ、私は楽しめたでしょうが……自分がやるとなると、どうも。

もっと、読者を楽しませる物書きになりたい。
……ああ、すみません。今の私には、これが限界です。
次回はおそらく、今月中に。よろしければ、見捨てずに、続きも見てやってください。――では。

第十一章　覚悟

「よろしい、詳細は把握した。――では次に、私からガレーナの国情について、話させていただこう。まずは、資料をご覧いただきたい」

軍部からの報告の後、今度はギルスターが情報の開示を行う。

侍従たちによって、手元に資料が運ばれてきた。これを見せながら、説明してくれるのだろう。セリアはこれを眺めながら、必要な情報を頭に叩き込んでいった。

少しの間、そうしているうちに、ギルスターの方から説明が始まった。

「単純な国力の差で言えば、トリアとガレーナの間に、極端な差はありません。周知のこととは思いますが、もし互いに間に明確な経済力の差があれば、そう話はこじれません。どちらかが明確な経済的優位を確立していれば、この戦いのもっと以前に、決着が付いていたはずです」

トリア王国は二百年の歴史があるが、その中には隣国との闘争の記録も、当然ある。

その中には、僅差で敵国を制した例もあれば、一方的に有利な条約を結ばせた例もあった。逆に敗北を喫したこともあるが、そうした事例はあまり強調されないのが常であろう。

この過程において、もしトリアが確かな経済力を持っていれば、一度の勝利で優位を確立したに違いない。ガレーナなどは、物流から通信まで支配され、属国として生きていくことを余儀なくされたはずだった。立場が逆でも、同じことである。

だが、そうはならなかった。人口、生産力はほとんど差がなく、

地理や通行の要所としても、その役割に大きな差がつくことはついになかったのだ。

「そして、お互いに経済力の差がないということは、懐の事情、国庫の余裕なども、想定しやすいということです。隣国で、情報の巡りが早ければ、なお更に」

「まわりくどいわね、ギルスター。結局何が言いたいの？」

「推定ですが……ガレーナ本国からの支援も、当分は続くであろう、ということです。こちらにも相当の備蓄がありますが、あちらも経済規模では劣っていない相手です。遠征軍を餓えさせない準備は、こちらと同じように、すでに整っていることでしょう。――敵地に糧を求められる分、ガレーナ軍の方が相対的には負担は小さいかもしれません」

「……つまり？」

「篭城を続けて、相手が干上がるのを待ったところで、ろくなことにはならないということです。連中は兵だけを食わせればよろしいですが、こちらは兵も民も養わなければならない。そして我々が引きこもって統治を投げ出している間に、敵軍は好きなことが出来る。――長引けば、ありとあらゆるものが瓦解していくでしょうな」

ギルスターは、遠慮のなく言いきった。これは、先ほどのカイルへの牽制も含めての言葉であろう。

彼ほどの地位の物が言うからには、そこには真実しかありえない。セリアは、この情報を得て、いかに判断するべきなのか。群臣が、彼女を観察している。

そしてセリアは、彼らの期待に応えねばならないと、ここで改めて奮起した。たとえ期待に応えられなくとも、出来る範囲で、自身の力が及ぶところまで、努力したかったのだ。

「ギルスター、他に特筆すべき情報はあるかしら？」

「これ以上は、まず方針を定めてもらわねば、姫さま。こちらとしても、どの情報を開示すべきか、悩まねばなりません」
「……我々の政治的状況について。これを究明せずして、何の方針を決めろと？」

ギルスターは、この期に及んで、情報を出し惜しんでいる。この国に関わることで、彼が知らないことなど、何もないはずであるのに。

本人に直接言えば過大評価だと謙遜するであろうが、セリアはいっそすがすがしいほどに、ギルスターの能力を高く評価していた。だから彼女は、まったく何の根拠もなく信じられるのだ。

――彼ならば、現状を取り巻くあらゆる状況に対し、適切な判断が出来るであろう、と。ゆえに、セリアは要求する。

「この場にいる群臣の序列を見れば、近隣の王家直轄地の代官と、国政に直接関わる大臣、それから王都に居を構える高級軍人ばかり。――時間はあったはずなのに、地方豪族や、領地を持つ大貴族が一人も駆けつけていないのは、どうしてだと思う？　……ギルスター、貴方ならこの答えを知っている気がするのだけど、私の勘違いかしら？」

それは、セリアがこの席に着いたときから感じていた、違和感だった。

そして、これに気付いた時、思った。これは茶番なのか、と。自分が呼ばれた席ではなあなあに済ませて、秘密裏に物事を決定して進めてしまう気ではないか、と。

しかし、自分の言葉を重く受け止めてくれている様子はあるし、周囲の者たちも真面目に話をし、聞き耳を立てている。ならば、違和感の元はそれではない。

ということは、人員を完全にそろえられない理由は別にあり、真

剣に対応すべき物事が、間に挟まっているのではないかと、セリアは考えたのだ。その上で、彼女はもっとも適切な人物に、疑問をぶつけている。

「私とて、全能ではございませぬ。答えを求められても、完璧な返答は致しかねまする」

セリアは、頭が沸騰するかと思った。

怒鳴りつけてやりたい衝動に駆られたが、寸前で押し留める。机の下で拳を硬く握り、歯を硬く食いしばった後で、ゆっくりと息を吐く。

――今、追求するべきことではないって、いいたいのかしら？　それとも、言うまでもないことだって？　……なんて底意地の悪い男。

あそこまで言えば、ギルスターも素直に答えてくれるかと思ったが、そうではないらしい。仕方なく、彼女は自らを落ち着けながら、言葉を選びつつ口を開く。

「完璧な答えなど求めてはいないわ。でも、貴方は必要充分な回答なら出来るはずよ。――いい？　こんなことは、二度と言わない。以後、私に対して遠慮なんかしないように。もちろん出し惜しみなんて、もってのほか。意見を求められたら率直に、あるいは不遜に、現実に即した物言いをすること。自ら献策したくなったら、いつでも自由に申し述べること。ついでに、尋ねられて、黙して語らない場合は、発言権そのものを剥奪しましょうか。それから――他者の発言を封じるような言動は、一切許さない。……以上、よろしいかしら？」

傍の書記官に目配せして、セリアは自らの発言を明確に書き留め

させた。議事録は、一定の期間を経た後で申請すれば、いつでも見ることが出来る為、こうした発言を残すことにも意味がある。
　セリアがこうした意思を示した以上、以後は彼女が参加する会議全てに、この理論を当てはめねばならない。そしてこの場にいるのは、水準以上の知能を有した者ばかりだ。彼女がこの国の継承者であるという現実におもねるなら、本心はともあれ、その道理をわきまえて考慮するくらいのことはやってのけるだろう。

「父上がどうだったかは知らないけど、これからはそうして頂戴。……さあ、ギルスター。返事を」
「わかりました。そこまでおっしゃられるなら、否やはございません。――結論から申し上げまするとと、日和見です。政治的に見るなら、我々はこの王都で孤立している、ということになりますな。……即座に敵国に寝返る、とまではいかなくとも、しばらく様子を見ながら、どちらにも良い顔をしてみせる。行動は趨勢が決まってから――と。まあ、生き汚い地方貴族や、盗賊上がりの豪族どもとしては、定石の一手でありましょう」

　完璧は望めぬ、といっておきながら、ギルスターは期待通りの答えを用意して見せた。
　あっさりと、割り切りよく明言してくれたのは、セリアの決意表明に、何らかの価値を認めたためか。
　何にせよ、宰相である彼が、公式の場でいう言葉である。その内容を裏付ける証拠やら、密告やらがあったのは間違いないと見るべきだ。そして、そこまでは流石に、ここで追求するべきではないということも、セリアは確かにわきまえていた。

――とりあえず……そう、とりあえず今のところは、やぶをつつく必要はない。彼の情報源については、全てが終わった後で、ゆっくり追及すれば良いのよ。

そもそも、領地持ちの貴族や、土地の利権を先祖から受け継いでいる豪族が保身に走るのは、伝統的な対応といってよい。
国家に所属する身ではあっても、それはその国家が自身にとって都合の良い存在であるからこそ、王家の意思を尊重してくれるのだ。利害が相反すれば、連中はどのような行動でも、恥じらいなく取るものである。歴史の浅い国家であれば、なおのこと。

――やれやれ。わかってはいたけど、頭の痛いことね。でも、今はどうしようもないことかしら。

腹は立っても、なるべくならセリアは、これをおおやけに非難したくない。王都から離れ、中央の軍事力が働きにくい地域は、固有の戦力で土地を治めねばならぬ。その苦労を思いやるならば、敵勢力への媚態も傍観も、一時の方便として許してやるのが筋ではないか――？
父ならば、それでも有罪だと即断するであろうが、彼女はそこまで無情な態度は示せない。確たる信念がないから、他者の決断を真っ向から否定する気にはなれないのだ。
それでも、王家の人間として、口先だけでもそれらしいことは言っておく。

「ギルスターの報告は、理解したわ。とりあえず、今は意識しておく程度でいいでしょう」
「今は、ですな。しかし、その在り方ゆえに、利益と安全さえ保証されれば、こじつけた名分にさえ尻尾を振る。……この場合は、暴政を強いた王の非を追求し、より良い体制に所属し直すべきだ――と。大義らしき物があるとすれば、このようなものでしょうか」
この男は、どうして場にそぐわないことばかりを口にするのか。

というより、セリアにしか答えられないような問答を繰り返して、他人に意見をふろうとしないのは、なぜなのか。彼女自身、己は大した権限を与えられず、置物として据え置かれ、言動を封殺される可能性さえ覚悟していたのだが。

セリアにはそれがひどく不審に写ったが、どれだけ怪しもうと、ギルスターは宰相である。王位継承者として、彼の言葉には、真っ向から対応しなければならなかった。

「つまり、トリアよりガレーナを。我々の体制より新たなる支配を、っていうところ？　……ぐずぐずしていたら、本当にそうなりかねない。具体的に動くのは、もう少し先になるでしょうが――出来る限り早く、明確な戦果を出さないと、仮定ではすまなくなるわ」

さりとて、戦果を出せる保証はなく、当てになる相手も――いないことはない、が。何しろ会ったばかり、しかも初対面で刃を突きつけられたのだ。立場上、ギルスターのように信頼に値するとは、とてもいえない。

――主戦論をとることに、躊躇はないけれど。でも、それが最良の選択かといえば、どうにも……。

はりぼてのような、思い込みの自信。それだけで会議に臨むのは、やはり荷が重かったのか。迷わないと決めたはずなのに、ここぞと言うところで、口が積極性を失う。もともと、セリアはそれほど自信家ではないし、群臣が集まる会議に慣れていない、という不安要素も存在する。

場の雰囲気を支配し、自分から物事を主導し、人を動かしていく。その過程を担うまでの力量を、彼女は有してはいなかったのだ。

「姫様、外に救援を求められないなら、内で何とかするほかありま

すまい。その後で、不遜な連中に罰を与えればよろしい。――問題は、今後いかに行動するか。それのみでございましょう」

だがセリア自身に力がないとしても、そのこと自体が致命傷になることは、まずない。主君の不備は、臣下が行うものだ。ギルスターは、この頼りない少女を守り立てることに、疑問はないようである。そのため、必要とあらば助け舟も出してくれる。

毎回確実に助けを受けられない辺りが、彼の気まぐれさの現われであるといえよう。セリアはただ期待するだけの立場であるから、一言だけでも助言をしてくれる以上、文句をつけてやることは出来ないのであるが。

「行動、ね。行動。……まさに、問題といえる問題は、それだけと言って良いかしら」

「唯一の懸念、唯一つの重要点。そして、最悪かつ最上の窮地にございますな。一手違えるだけでも、ひどいことになります。――結論を急がず、まずはゆるりと思考に浸るべきかと」

ギルスターは、セリアの言葉を待っている。そして、話を先に進めることを、議論を主導することを、この姫に求めているのだ。遠まわしに、持って回った言い方をしているが、内心は結果を急ぎたがっているはず。巧遅より拙速。それが、兵法の基本であると、彼女もわきまえている。

これを密かに悟ったセリアは、彼の狙いに従い、会議の流れを誘導した。

「……そう。ならば、そろそろ議論を先に進めるべきではないかしら。ゆるりと一人で考えているよりは、皆で検討する方が話が早いでしょう」

「同意いたします。具体的には？」

「軍事的、経済的にもそうだけれど、先ほど言ったように、政治的にも我々は窮地に立たされている。議論するにしろ、実際に行動するにしろ、お互いに団結する意思こそが、もっとも重要であると私は考えているの。……何しろ、外からの援軍を期待するのは難しい。とすれば、この王都にあるものだけで、どうにかしなければならないものね」

「まことに。――しかしいかなる法も、人の心までは縛れませぬ。いかがなさいますか？　姫様」

息を整えて、セリアは告げる。

「いかがも何もないわ。――言ったでしょう？　方針を決める場合において、あらゆる意見は歓迎する。我々の現状をわきまえた上で、策があれば真摯に聞きたい。ギルスター？　貴方だって、そのことに異論はないはずよね」

まず前提として、独力で生き残る道を探らねばならぬ。これを踏まえた上で、セリアはできることを知りたかったのだ。

この国を守護する王族の者として、臣下の意向を組み上げつつ、自らの決断を示す。そうしてこそ、王位継承者として、相応しい態度といえるだろう。

「なるほど、そこまで覚悟を決めておられるなら、多様な意見は、あればあるほどよろしい。――では方針を決定する前に、ここに集った者たちにも、その覚悟のほどを聞いておきますかな」

そしてギルスターは最高位の文官として、内政と外交に大きな影響を与えられる立場にあり、それを活かそうとしている。彼が覚悟の意味を問うということは、それだけ重要な議題が、これからなされるということをも意味していた。

「覚悟は内に秘める物であって、外にさらすものではないわ。ましてやそれを他者に強制するとか、愚の骨頂ではない？　――そもそも、国家の大事を決める席に座っている者であれば、その地位に相応しい勇気を持っていて当然だと思うのだけれど」

だがセリアは、捻くれた返答でギルスターに応えた。意見自体は……何もこの場で主張するような、大層な内容ではない。ギルスターの方も、こんな道理はすでにわきまえていることだろう。

――何を考えているのか知らないけど、随分妙なことを言い出すじゃない。覚悟なんて、口先で証明できる物じゃないでしょうに。

これは、一度くらいは、この男をやり込めてやりたい、という稚気の発露であり、彼女の未熟さが素直に出た形でもあった。

意外……ではないかもしれないが、ギルスターに隔意を抱いているのは彼女だけではなかった。セリアの言に便乗して、一人の男が宰相の発言を突付き出す。

「セリア殿下のおっしゃるとおり。――宰相閣下は覚悟とは申されるが、今、この場で現状の危機を理解できないものなど、いるはずがないではありませんか。誰もが皆、この一身を護国の為に捧げる覚悟でありましょう。文官武官問わず、トリアの禄を食む身であれば、それくらいの気概は持ち合わせて当然というものでしょう」

憮然とした表情で返したのは、カイルだった。自身の提案を無視されてからというもの、これまで放ってこられたのだから、不快に思う気持ちは良くわかる。

セリアは彼に同情したが、特別扱いするつもりはなかった。口にしたことには、責任を取らねばならぬ。カイルは、その言に相応し

い態度を取らねばならない。セリアは、その点をよく観察してみるつもりだった。

「皆に改めて決意のほどを聞くまでもありません。とにかく我々は生き残るための行動を、とらなくてはならない。この場はそれを決する会議であり、余計な思惑を入れる余裕などない。私はそう思われますが？」

勇ましいのは結構なことだが――この芝居がかった口調は、どうにかならないものか。そうセリアは思う。カイルが言っていることは至極まっとうなのだが、身振り手振りに声の抑制。ともに良くできた演劇のように、無駄に洗練されている。それが鼻について、彼を嫌う者だっているのだろうに。

とはいえ、言っていることは正論であるから、ここで茶々を入れるような者はいなかった。彼の言う『覚悟』とやらは、愛国者ならば、確かに誰もが持っているものだろう。

「ふむ、言われてみれば確かに。……いや、これは失礼。覚悟の程を聞くなど、皆様をあなどる様な発言でしたな。話を続けましょう」

ギルスターはとりあえず、彼の発言を受け止めた。内心はどうあれ、余裕がないのは確かであろう。この点はセリアとて同意見だった。口を挟まず、ただ話に耳を傾ける。

「そういうことであれば、時間は貴重です。決められることは、なるべく早く決めてしまいましょう。――大まかに言って、我々が取れる行動は三つ。徹底抗戦か、降伏か、あるいは戦いながら交渉の窓口を確保し、互いに妥協点を探りあうか……。まあ、私が先にした提案については、今は忘れていただいて結構。初心にかえって、改めて検討してみようではありませんか」

ギルスターが、まず方針についての意見を述べた。意見の多様性は歓迎するが、やはり一定の方向に議論を向けないと、話が進みにくい。この点で、セリアはギルスターを責めようとは思わなかった。

徹底抗戦が、ガレーナに対して決定的勝利を得るまで戦うこと。最悪死ぬまで抵抗を続けることであり、降伏は早々に敗北を認め、国家の崩壊と引き換えに、人的消耗を抑えること。

セリアにも、それは理解できる。だが三つ目については、いま一つよくわからなかった。以前の発言そのままの意味では、おそらくない。領土割譲は、戦いながら行うような、物騒な交渉ではないとセリアは思うから……きっとあれは、降伏に属する対応になるのだろう。とすれば、やはり理解は難しい。

「……質問、いいかしら？　宰相殿」

「どうぞ、姫さま。――ああ、答える前に一つ申し上げるなら、役職に殿をつける必要はありませんぞ。そこの若いのが言ったように、ギルスター殿か、フォード宰相、もしくはただ役職名だけで呼んでくだされ。なにしろ、国家に宰相は一人しかおりませぬので」

なんとなく、セリアは宰相殿、とギルスターを呼んでみた。彼女なりの敬意の表し方だったのだが、やはり不器用に過ぎたらしい。

この大事が収まったら、改めて自身の言動を洗練させねばなるまいと、セリアは自覚する。

「ではギルスター。戦いながら交渉する……と言われても、そんなことが可能であるのか、私にはわからない。たとえばこれが降伏であれば、敵軍に対して真っ向から申し入れが出来るのだけど、当然これはそういう意味ではないのよね？　――できるなら、その窓口について詳しくお話しいただきたいのだけど？」

「ええ、それは勿論。――この場合は敵軍の指揮官などではなく、

ガレーナ国王、ミシェルに直接交渉するのです」

この彼の言葉は、いささか衝撃的に過ぎた。ガレーナ国内に、こちらの意を伝える伝手など、どこにあるというのか。普通ならば直接使者を立てて、国王に面会しなければならないのだが、果たしてそんな時間があるものか。セリアでなくとも、疑問に思うところである。

「ガレーナとは現在戦争中であり、とても友好など期待できる相手ではありますまい。ギルスター殿の意見は、実現性に欠けるのではありませんか。ミシェルという男が交渉を望むかどうか、見込みがまったくないというのも辛いところでしょう」

「まさに。貴族としての誇りを重んじるなら、最後まで戦う意思を捨てるべきではない。そして降伏するつもりなら、余計な怒りを買わぬうちに、早々に申し出るのが良い」

「第一、交渉できたとして、それを成功させるなど夢物語に等しい。あちらが優勢である以上、こちらが決定的な勝利を得なければ、そもそも譲歩を引き出すことさえ不可能だ。なら、初めから妥協を望むより、徹底して反抗の意を示すのが良い。そちらの方が、よほど潔いではないか――」

もろもろの群臣たちが、これを機会にとさまざまな意見を出し合う。これはセリアも望んだことだから、文句はない。

ただ聞いている限りでは、会議に参加する者の中では、二極化が進んでいるようだ。誰も彼もが、交戦か降伏かを問うばかりで、三つ目の選択を真面目に検討するものは、実に少ない。

それもどちらかといえば、好戦的な論調が主流を占めている。彼らはまだ、自分たちが敗北する、滅亡しつつある、という現実から目をそむけようとしているのではないかと、セリアは懸念を覚えないわけにはいかなかった。

「紛糾しているわね。いっそ開き直って、交渉は、初めから考えないものとして扱うべきかしら？　ギルスター」
「いけませんな、姫さま。自分としては、そちらが本命でありますから。くれてやる領土があるとして、それを持ち出すにしても、やはりいくらかの見栄は通したいものです。……たとえば、形だけでも健闘して見せて、自国の武威を示すような。それさえも当てに出来ないようであれば、降伏後の領土返還交渉は、おそらく成立しますまい」

セリアは固まった空気を和らげるべく、ギルスターの意見を求めたが、彼は彼で、終始自論を語るばかりであった。
多様な意見を取り入れて、折衷案を作ることなど、まったく考えずに彼は言う。

「まあ、自分はひねくれ者でありますから。単純に勝つの負けるの、戦うの戦わないのと、明確なお話は得意ではありませぬ。さらに最近は歳を食って、無駄に狡猾になってしまいましてな。戦いつつ話し合う。負けながら勝利を得る。そんな手ばかり、上手くなりまして。――相手方との話し合いも含めて、手段については、お任せあれ。その点の心配は、いりませぬ」

ギルスターが、白くなったあごひげを撫でながら、不遜にも言い放った。セリアは今更、彼の態度については文句をつけようとは思わないが、ほのめかしの言葉に踊らされるのも不愉快だった。ゆえに、ここは追求する。

「お任せするのは、いいとして……その自信の根拠は話してくれないの？　私としては、見通しの立っている話は、全て公開して頂きたく思うのだけれど」

「これはただの一手段。もったいぶるわけではありませんが、この案が採用された時にでも、改めて申し上げようかと。あくまでも徹底抗戦の道を歩まれるなら、私が出張るまでもない話でありましょう。土地も金も、あの世にまでは持っていけません。ただ、それだけのことです」

回りくどい言い方だが、おそらくギルスターには、自信がある。どうにかして、ミシェルと渡りをつける方法が、彼にはあるのだろう。

――今のは私に、というより、この場にいる全員に向けた言葉であるように思える。それに随分、挑発的ね。これは彼の自信の現われ、と取ってもいいのかしら？

気にはなるが、意味のない言動をするような小物が、宰相という職に就けるはずがない。セリアはあえて、疑うことをやめた。ともかく彼女は、苦労を肩代わりしてくれるなら、宰相の言を真面目に検討してもいいと思う。

「交渉に必要な時間は？　王都で籠城すれば、かなり持ちこたえられるのはわかる。物資が持つのは聞いているけど、戦そのものに耐え切れるかどうか、私にはわからないの。備蓄を残して負ける事だって、ないとは言えないし」

セリアは議論の続きよりも、まずここでギルスターに情報の公開を求めた。その分余計に会議が長引き、参加者のひんしゅくを買うだろうが、他人を気遣う余裕など、彼女にはない。勝つにしろ負けるにしろ、納得だけはしていたかったから。

お飾りではあっても、王族としての責任が取れるのは、今や彼女ひとり。敬意はさておき、その発言を無視することは、誰にも出来

なかった。

「そうですな。敵軍を迂回して、慎重に進んだとして、ガレーナの王都まで二十日ばかり。相手方の日程の調整に一週間ほど。交渉が功を奏して、軍に伝わるまでやはり十日はいりますか。後はいくらか余裕を見て……一月半は持たせなければなりません。それも最短での話ですから、場合によっては倍以上の期間が必要になるかもしれませんな」

「それくらいなら、持ちこたえるのは難しくないのでは？　王都の備蓄だけを考えるなら、かなり余裕があると見ていいんじゃない？」

セリアは、多少なりとも現状に希望を持った。城を落とす、というのは骨の折れる作業であり、容易に済む物ではない、ということを、彼女は教養として知っていた。

だから、その程度の期間なら、どうにかなるのではないかと、気楽に答えたのだ。

「はい。兵糧も武器も充分以上は貯め込んでおりますので。……ただ、あまり相手を甘く見ぬことです。ガレーナ軍とて、こちらの備蓄を予測していないはずがない。私が彼らと同じ立場であれば、短期決戦をもくろみ、相当大胆な行動に出るでしょう。心してくだされ」

「……そうね。油断だけは、しないでおくわ」

心せよと言われたところで、セリアにはこう答える以外にすべはない。知識も経験も不充分である彼女には、真の意味で『大胆な行動』とやらの重大さを、理解することはできないのだから。

しかし今は、時間は稼ごうと思えば稼げる、それだけわかれば充分ではないかと、セリアは考えた。

「逆にいえば、その大胆な行動さえ凌げれば、篭城を続けるのは難しくありません。ギルスター宰相の言にも、一理はあるかと。……交渉も、行うだけなら損にはなりますまい。我々は我々で、戦いを続け。宰相は自身のお力を持って、敵国を口説き落としてみればよろしい。無理に全ての歩調をあわせることはないでしょう」

カイルが、ここで積極的……というにはおかしいが、非常に前向きな篭城戦を提案した。

これはどちらかといえば、好戦的な考え方だが、行動次第で降伏にも交渉にも持っていける、柔軟性のある案だと言えよう。とりあえず守備を維持し、情勢が変わるのを待つというのは、これはこれで一種の戦略であった。

「つまりは折衷案？　基本的に、私たちは王都を拠り所として守り続ける。もちろん機会があれば、攻勢には出るけれど……それで、ガレーナ軍が根をあげて撤退するならよし。敗色が濃厚になるようであれば、限界まで粘ったところで降伏。交渉は一応進められるだけ進めて、間に合うならばそれでよし――と、こんなところかしら」

多少強引だが、セリアはそのようにまとめた。カイルの籠城案を突き詰めて、その意図をよく表現していた。

現実にはそこまで上手く機能するかどうか、未知数ではあった。が、それは全てに対して言える事であり、問題は皆がこれに賛同し、最大限の努力を払えるかどうか、である。

「……異論、反論など、何かあったら発言を」

セリアが遠慮がちに、周囲に問う。多くが思考の海に沈み、沈黙を守る中、カイルだけが彼女の言葉に反応した。

「異論、というほどたいしたことではありませんが。まず、抗戦・降伏・交渉。いずれを重視し、それを前提とするか。これを決めるべきでしょう。戦闘に限っても、『より良い降伏条件を引き出すために戦う』のと、『なるべく消耗を避け、交渉の成立を待つ』のとでは、随分とやり方が違ってくると思われますので」

さりげに降伏論について、独自に一言付け加えながら、カイルは答えた。どこまでいっても闘争から離れられないのは、主戦派らしい物言いである。またそれは、この場にいる武官たちの意を代弁してもいるのだろう。

――ギルスター、こんな連中をまとめきれるの？　穏やかに、貴方の意思にそうような発言だけれど、おそらく内心は抑えきれていない。血の気にはやって、功を焦って、独断で行動されたら、きっと貴方の案は水泡に帰す。

今までの会議の内容は、こちらが戦闘で勝ちきれないことを前提としすぎている。これを主眼に置き、会議を続けるなら、武官たちが意固地になりかねない。交渉について、あまり積極的に議論されなかったのは、この影響もあるのだろう。

少々でも厳しい条件が付与されれば、彼らは難色を示しそうである。それなら、と相手に譲歩を期待しても、こちらが大きな勝利を重ねなければ、まずガレーナ国王は了承するまい。この部分の折り合いが、とても難しいように思われる。

「どうでしょう。皆様にどの方法に重点を置くべきか問い、その意見をまとめてみては？　ここで多数決を取ってから動いても、遅くはないかと考えます」

「そうね。では、ギルスター。この問題についての多数決を」

カイルの言を、セリアは肯定した。提案自体は悪くないし、これまでの意見を総括する上においても、全員の意見を参照するのは悪い手ではない。カイルの進言を受け入れ、実行しようとした。

「あいや、姫様。その必要はないかと愚考いたします」

だがギルスターそれに待ったをかけた。これには、どういうことかと、セリアの方が疑問に思う。

「必要がない？　他人の発言を無視する権限を、貴方に与えた覚えはないのだけど」

セリアが皮肉で返すが、彼はこれに抽象的な表現でしか答えなかった。

「ああ、これは失敬。何も無視したくてするというわけではなく、そもそも初めから、意思の統一は為されていたのだ、ということを言いたかったわけです」

ギルスターの意図が、今一つ飲み込めない。それはセリアだけではないらしく、会議の場にざわめきが広がる。

「もう少し、わかりやすく言ってもらえないだろうか、ギルスター殿。各々の発言を聞かずして、意思の統一など不可能だと思われるが」

「簡単なことですよ、カイル殿。何しろこの場にいる全員、覚悟だけは確かに決めておられるようですからな。――ええ、あの前言に間違いがなければ」

覚悟、と問われて、皆が皆あのカイルの前言を思い出した。仰々

しい言い草であったが、彼は『護国の為に身を捧げること』を強調し、誰もこれに反論しなかった。これをもって、意思の統一と言い張ることは、確かにできなくはない。

「しかし、あれは根本の考え方というか、国家に仕える臣としての、原理原則を口にしただけでは？　実際的な手段と方法には、まったく言及しなかったはず。これを持ち出して、我々の意見を無用と断ずるのは、暴論というものではありませんか」

「説明が足りませなんだか。多数決を取るのはよろしい。しかし、誰がその責任を取るのですかな？　もしものことですが、決議に従って敗北した場合、誰がこの責を負って罰されるべきなのか。私には、それがわからないのです」

いきなり生臭い方向へと、話が飛躍した。ギルスターは、論点を摩り替えようとしている。それも、ひどく妙な方向へ。

「ギルスター。貴方、意図的に論点をずらしていない？　そんなものは、負けてから定めればいいでしょう。最悪でも交渉さえ上手くいけば、妥協点も探れるって貴方が――」

「姫様、心してお聞きください。これは姫さまの命に関わるほど、重要なことなのですから」

セリアの発言を見事に無視して、ギルスターは詰め寄る。

嫌な展開だと、彼女は眉をひそめた。宰相の力量を拝見するつもりで、鷹揚に接していたのだが……ここに来て、自身が矢面に立たされている。

「多数決とは、いわば多数による少数の駆逐であります。そして今回の場合、責任も背負えぬ輩どもが、数少ない責任者に後始末を押し付けるような、そんな結果になりかねない」

「念のために聞いておくけど、その責任者って言うのは、もしかして私のこと？」
「はい、姫様。わかりきっていることとは思われますが、姫様は母親が庶民の出ではあっても、まぎれもなく国王の娘であり、始祖の直系の子孫です。何より現状では唯一の、政治的に表に出せる王族。反抗の御旗としても、屈服の証としても、貴方の身柄ほど確かな物はありません。敗北した場合、必然的にあらゆる責任が、姫様の小さな体に圧し掛かることになる。そして、護国とは、国家の維持に関わる全てを守ることを意味します。……つまり、姫様の安全を保証すること。それが叶わぬなら、せめて国家の権威を失わぬ為にも、指導者の誇りというものをしかと示しておくことが必要なのです。——国民が、国家を失ってしまっても、そんな国に属していられたという、誇りを守る為にも」

セリアが理解したくもない現実を、ギルスターは率直に述べた。
彼女が目をそらしたいと思っていたことを、誰かに肩代わりして欲しいと思っていた重圧を、そのまま眼前に突きつけられたのである。

「元々王族と言うのは、割に合わぬ役割を押し付けられるのが、宿命といえるのですが……流石に敗戦の責を一身に食らわせながら、群臣どもは好き勝手に無責任な行動を繰り返す。そんな様では、トリア国の沽券に関わりますでな。それならば、一番割を食うであろう方の意思を、まず最優先すべきと考えるのです。ゆえに、多数決は行う必要なし、と自分は考えました。第一、群臣どもの忠誠心自体、疑われてしかるべき状況なのです。こんな状態で、流れに身を任せるのが、いかに危険なことか。先々代からの寵臣として、忠告せぬわけには参りません」
「……詳しく、述べてみなさい。意見次第では、色々考えてみてもいいから」

「冷厳なる事実として、お受け取めください。誰も、貴方の代わりにはなってくれませぬ。トリアを併合し、統治することを考慮すれば、王族は排除しても群臣は取り立てて、そのまま使った方が効率は良いのです。つまり、我々は手段を選ばねば……上手い負け方さえ心得ていれば、権益を維持したまま、併合後のガレーナで生きられる。けれど、貴方だけは違う。支配者として、征服感を満足させるにも、王族の犠牲はつきもの。敗北すれば、口にしたくもない辱めを受けることになるでしょう」

セリアに逃げ道はない。だから、腹をくくれと、ギルスターは言っているのだ。そして戦いにおいては、父の臣下だった者たちを、信頼し過ぎるべきではない。特に戦略上の重大な判断は、これによって最大の不利益をこうむる人物。すなわち、自分が決めよと、そう彼は言っている。

そして、以後は無責任な発言を許さぬ為にも、彼女に国王の娘として、恥じぬ態度を取れと促しているように、セリアには思えた。

これも、彼なりの忠誠心であるのか。だとしたら、彼女はギルスターへの敬意の上に、感謝も付け加えねばなるまい。

「本来、ここまで重要な事項の決定は、国王が為されるものありまして。我々が集って、数による決定を迫るのは、あくまで次善の策。事ここに至りましては、姫様ご自身が、以後の行動を決められるのが、よろしいかと。……国王の遺児、可憐な姫が、敵国の侵略に立ち向かう。民が熱狂する大義名分として、これ以上のものはありますまい」

だがセリアは、このギルスターの論理を真っ向から受け止める気には、なれなかった。

「いかに戦い、いかに動くか。その全てを、私が判断しろと言うの

ね？　それが国家の、国民の意に沿う物であると。臣下の全てに対して、果たすべき義務であると、そう主張するのね？　文句一つ言わず受け入れる覚悟さえあると、そのように？」

「まさに、そのとおりでございます」

「それはちょっと、どうなのかしら。私は曲がりなりにも王族だし、責任をいくらかでも被る立場にはあるけれど――こんな小娘の命令に従える人が、この場にいるのかしら？　いや、いたとしても。私の決めたことが、最善の手段であるとは限らないでしょう。私のせいで、間違った方向に国を導いた。そう酷評されるのは、経験のない身としては辛すぎるわ」

そもそもセリアは、ここまでの責任を自覚して、会議に臨んだわけではない。せいぜい、一定の権限。自身の発言を黙殺させず、まともに検討させること。己の出自を盾にした、その強制力だけをあてにして、この場にいたのだった。

自己の存在を強調させ、王族の権威をあからさまに利用してでも、成果を得たいと考えてはいた。だが、それでも、その程度の立場さえ得られれば、それで上々だと思い込んでいたのだ。まさか、こうも矢面に立たされ、己の言葉が結果に直結する事態になろうとは、いくらなんでも予測していない。

これは戦場に赴いた時も同様であるのだが、それにしてもギルスターの言いようは、一方的に過ぎる。未熟な自分に過酷な回答を強いていると、そうセリアは思うのだった。

「私も含めて、群臣は国家に尽くすことに対して、疑問を持っておられぬご様子。現状、国家の象徴たる国王陛下がおわさぬ以上、次代の後継者としてあらゆる責務を負えるのは――やはりセリア様以外にない、と臣は考えるのであります」

「だから、私の意志には誰もが異を唱えない――ってこと？　敬意を払われているのか、利用されているのか。果たして、どちらでし

ょうね」

どんな愚王でも、王の命令には強制力が伴う。それが王政というものであり、現在のトリアの政体である。だから、ギルスターの言葉が正論であることは、否定しない。

「ご決断を」

ギルスターはもはや、セリアの戯言に付き合ってはくれない。彼は、答えだけを求めた。

「……宰相殿の意見が正しいと思う人は、どれくらい居る？　誰も彼を諌めようと思わないの？」

セリアは、怖いのだ。自分の決断が、国家の運命を左右させること。責任から逃れる理由を、失うことが。

彼女には、自分の立場が相当特殊な物であることは、とうに理解していた。しかし、自己の行動が及ぼす、大局への影響力について。セリアは、まるで無自覚でいたし、ずっと気付かないままでいたかったのだ。

それは、覚悟とは真逆の思考。やるべきことを行いたい、という欲求とは正反対の理屈でありながら、ずっと彼女の中でくすぶっていた概念だった。

「ギルスター殿。貴方の主張していることは、とんでもない僭越であると、私などは思います。そこまでセリア様に、責任ある行動を求めるのは、いかがなものかと」

「左様ですな。それにしても、あの言い様。思慮深い貴方にしては、いささか強引に過ぎると考えます。我々の言が、責任を負わせるにも信用するにも値しないのなら、宰相閣下が直々に判断を下されれ

ばよい」
「この非常事態です。ギルスター殿ほどの、実績と信頼を持ち合わせた方ならば、独断で国家を動かすことも、許されるでしょう。……なぜ、それをなさらず、過度の期待をセリア様に寄せられるのです？」

主君の血統、その意思を無視できるような輩は、この場にはいない。だから少数ではあったが、彼女の意に沿い、ギルスターを非難する者たちがいた。

しかし、長年国政にかかわり、人脈にも富むギルスターを掣肘できる者など、やはりこの場にはいない。面と向かって非難するというより、これはむしろ彼の常識と良識を期待するような、やんわりとした発言でしかなかった。

それが意味のない行動であることを、誰もが……セリアでさえ薄々感付いていた。ギルスターは、それら小数の戯言を握り潰せる程度の迫力を、充分に持ち合せているのだから。

「これは、異なことを申されますな。私は自らを国家の柱石と自負していればこそ、ここで専横に走ろうとは考えないのです。……いや、有象無象の影響から、姫様をお守りする……という理由で、強権を駆使することはあるでしょうが」
「ギルスター？　私、これ以上話を引き延ばしたくないし、貴方だってそう暇なわけではないと思うの」
「そうですな。では駄々をこねていないで、さっさと方針くらい、自分で決められてはいかがです。こちらこそ、姫様の頑なな態度には飽き飽きしておりますので」

安い挑発だったが、彼は今のセリアには、この程度の後押しで充分だとわかっていたのだろう。

「わかった。なら、決めます。――いや、決めようと、思うから、その……」

彼女は、勢いで答えた。いい加減、進展のない話し合いにうんざりしていたのは、セリアも同じであったから。しかし、言った後で事の重大さを理解し、悔やむ事になるのだが。

「何か？　お望みのものがあるならば、すぐに用意させますが」
「時間が、欲しいの。考える時間が」
「それほど余裕はありません。今日一日、明日の朝には結論を出していただけませぬと」

勝っている方はともかく、負けているこちら側は、悩む時間さえ少ない。セリアもこれには理解を示し、頷いて返す。

「徹底抗戦には、己を含めた、味方に対するあらゆる犠牲を容認する覚悟。降伏には、自ら国を滅ぼした、という汚名を被る覚悟。そして交渉による妥協を期待するなら、手段を選ばず、誇りも矜持も投げ捨てて戦う覚悟が、必要になるでしょう。――そこの若いのの言葉が事実であれば、どの道を選んでも最善を尽くしてくださること、間違いありませぬ。それらを考慮した上で、お選びください。――期待しておりますよ、姫様？」

カイルが冒頭で答えた意見を、ギルスターはここで持ち出した。そして以後は、たいした話もなく、結論を先延ばしにしたまま、議論は終わりを迎えた。

結局、会議はギルスターの独壇場で、終わったことになる。他は数合わせの役者を用いただけの、出来の悪い芝居のようでもあったが、その印象は案外真実を付いていたのかもしれない。

――私に権限を与えることが、彼にどんな利益をもたらすのか。まるでわからないけれど。

彼の行動の裏には、当然彼なりの打算と思案がある。自らは積極的に動かず、王族である己を動かしに来た。それは臣下として当たり前……といえばそれまでだが、いささか度を越した演出であるように、彼女には思えたのである。

――そうね。ええ、そう。不可解ではあるし、不愉快でもあるけれど、重要なのはそこじゃない。私が今後もし、具体的な行動に出るのなら。これは降って沸いた様な、好機ではないかしら？　だとしたら……。

会議が終わった後も、席から離れずに色々と考える。そんなセリアが気になったのか、話しかけてくるものがいる。

「大丈夫かい？　少し、疲れただろう？」

カイルであった。彼はセリアとは面識があり、昔から彼女に対して、何かと世話を焼いてくれていた。こちらの好意を期待しての、下心ある行動ではあったのだろうが、悪感情を抱いたことはない。それくらいには、女性の機微に通じた男であるのだろう。

だから、セリアはカイルのことが嫌いではなかった。ただ、彼女は他人の好意を疑いなく受け入れるほど、うかつな人間でもなかったのだ。

「それほどでもない……って言えたら、よかったんだけどね」

「すまないね、セリア。どうやら我々は、もっとも厳しい道を歩まねばならないらしい。その中で、君にも色々と苦労を強いるだろう。どうか、それを許してほしい」

「わざわざ謝罪しなくてもいいのに。……それはそれとして、呼び捨てにされるのも、随分と久しく感じるわね。私が変わったのか、貴方が変わらなかったのか、どちらかしら？　まあ、どうでもいいことだけれど」

慰めて欲しいとは、セリアは思わない。立場を代わってくれる人がいたら、代わって欲しいとは思うが。

「そうね。……許してもいいわよ？　貴方が責任を取ってくれるならね」

「それは――」

「出来ない？　前の台詞と合わせて、とりあえず貴方の意見はわかった。……強硬策を取るにしても、私は前線に出られないでしょうね。それがいいことなのか悪いことなのか、判断が難しいところだけど」

戦いの場に赴くこと。それは勇猛さを表し、義務感を演出する道具としては有用だが、別にそれで特別に勝率が上がるという訳でもない。

士気が上がるのは良いが、肝心のセリア自身に軍事的才能はない。この期に及んで、余計な不安要素を抱えるのも、あまりよろしくなかった。

もしセリアが敵軍の虜となれば、本格的に国家の存続が怪しくなる。たとえ彼女本人が前線を希望しても、そう上手くはいかないだろう。

「僕は、別に」

「カイル様。もう、いいわ。貴方が気を使う必要だって、ないんだから」

セリアは、彼を敬称付けで呼んだ。十歳以上年上の彼のことを、昔から彼女はそう呼んでいたから。カイルも、彼女の前では飾った貴族としてではなく、等身大の自分を出してくれている。だから、これでいいのだろう。

「私は単なる飾りだけど、貴方はれっきとした高級官吏。住む世界が違うって、私もわきまえているんだから」

セリアは王の子ではあったが、上に嫡子である兄がいる以上、国内ではさして重要な地位にいなかった。この敗戦がなければ、平穏に一生を過ごしていたであろう身の上である。

ゆえに、国政に直接関われるカイルに対し、彼女は常に敬意を表さねばならなかった。いささか感情的な部分もあるが、それが今も彼に敬称を付ける理由である。

「そんなことを言ってはいけない。この非常時、正式な戴冠こそされてはいないが、君こそが次代の国王なんだ。こんな僕でよければ、こき使ってくれても構わない」

「……いくらでも、ご機嫌をうかがいにいきますって？　ああ、ごめんなさい。人前で言う言葉でもないわね」

会議は終わり、他の参加者は皆退席している。だが片付けや清掃に来ている奉公人たちの目が、ここにはあるのだ。

――長々と悩んでいる方が悪い、か。この場に居座ったのは自分の意思なんだから、誰かに文句を言う筋合いではないのだけれど。

暗に視線や態度で、セリアは場所を変えたがっていることを伝えた。カイルはこれに気付かぬほど愚鈍ではないから、察して提案する。

「少し、歩こうか」

散歩をすれば、いくらかでも気分が紛れるかもしれない。さらに良い考えが浮かべば、儲けものである。

セリアは、彼の提案を呑んだ。男と二人きりになるというのに、まったく想いが高ぶらないのは、どうしてか。決して嫌っているわけでも、好意を抱いていないわけでもないのに。

「わかりました。じゃあ、行きましょうか。……ギルスターも、これくらいの我侭は、許してくれるでしょう。きっと、ね」

周囲の状況はどうあれ、ここは美青年の付き添いに、胸を高鳴らすのが、年頃の乙女として正しい反応ではなかろうかと。セリアは意味もなく、そんなことを考えていた。

――どうして、かしら。カイルお兄様と、慕った時期さえあったのに。今はもう、何の感慨も抱けない。

そして、それなりの好意を抱いてる異性が傍にいるのに、まったく関心が表れてこないことに驚き、いつ己は女を捨てたのだろう――と。そんな馬鹿な感想も、同時に抱いてしまっていた。

第十一章　覚悟（後書き）

色々と悩ましいですが、結局投稿することにしました。
違和感やら矛盾点やらを感じ取られましたら、ぜひお教えください。

……次か、その次くらいから、展開は速くなると思います。
まだ付いてきてくれる方が、どれほどいるのか。いささか不安ではありますが、できれば最後まで、見守ってやってください。

では、これにて。
次の投稿の際に、またお会いしましょう。

第十二章　前夜

時刻はもう夕暮れ時。食事には少し早いが、待つには長い時間帯。暇つぶしをするには、悪くない間であるといえる。

そういえば、カイルとこうして並んで歩くのは、いつ以来だったか。セリアはこれを思い出すのに、十数秒を要した。

「五年前の、園遊会以来、かしら」

「君の父上が、王位に付く前の話だね。……そうか、五年も前になるのか。僕は、今でも鮮明に思い出せるよ」

先々代の名君グレイの御世、その末期であった。

グレイは病床に伏しながらも、政務を執った。これが寿命をさらに縮めたことは疑いないが、寝たきりでいるには、祖父はあまりに気が強すぎた。咳き込みながらも臣下を叱り飛ばし、病身に鞭を打って、巡行に赴こうとした話などは、セリアも聞いた事がある。

「当時はまだ、国内に余裕があった。貴族は豊かだったが、国民もそれ以上にこの世を謳歌していた。国政に不安はなく、法も秩序も乱れずに収まっていたから、のんきに私たちも遊びまわっていられたんだ」

「あの頃は、良かったって？」

「年寄りみたいな言い草だけどね。今は本気でそう思うよ」

カイルは、妙に深刻そうな表情で、そう呟いた。だからセリアも、彼に習って気の滅入る話を続けようと思う。

「カイル様も、随分と不敬なことをおっしゃるのね。それではまるで、父上が無能な指導者だと、そういっているようにも聞こえるわ。

――あるいは、本気とはいいながらも、実は冗談なのかしら？　だとしたら、それはそれで貴方の見識を疑わねばならないのだけど」
「……あまり、いじめないでくれ。悪かった。悪かったよ。だから、機嫌を直してくれないか？　お姫様」

困ったような表情で、しかしどこかで『演じている』印象の強い仕草で、カイルは許しを請うた。
もちろん、セリアとて本気で言っているわけではない。だがあえて、捻くれて見せた。自分がどこまで悪辣になれるのか、少しだけ試してみたかったのだ。

――彼に甘えるのも、これで最後にしましょう。……不毛すぎる。

もっとも、慣れぬ皮肉は、ただカイルを困らせただけで、両者に何の感銘も与えはしない。ため息を付いた後で、セリアは謝罪した。

「ごめんなさい。こちらこそ、悪い冗談が過ぎたかしら？　半分くらいは、本気だけども。――私も、昔のようにただの子供ではいられないみたい。こんな風に、意地の悪い対応もできるようになってしまった。忌々しいわね、本当に」
「成長する、ということは、そういうことさ。嘆くよりは、前向きになった方が良い。少なくとも今の君の方が、昔の君より、頼りがいがありそうだからね」
「頼りがい……ね。貴方のその評価が、誰にとっても共通の認識になってくれたなら、これ以上の事はないのに」

話が一区切りしたところで、散歩のついでに、セリアは周囲をよく観察した。
この王都、王宮は、開国以前からある建物を、改修して造られたものだ。壮麗に見えても、部分部分を見れば、妙に古かったり、歴

史を感じさせるところもある。
だがそれが、一種の妙味と言うか、威容を際立たせ、王の住まいに相応しい出来に仕上がっている。新しく、美しいだけの構造物より、こちらの方が好きになれそうだと、セリアはたあいのない感想を抱いた。

「それはそれとして、どこにいくの？　散歩といっても、王宮はあまり歩き回ったことはないから、詳しくないんだけど」
「ああ、そういえばセリアは、地方から王都に引っ越して、日が浅かったね。……不安なら、このまま部屋までお送りしようか？」
「引きこもりを助長するような発言は、控えてくれる？　部屋に戻ったところで、やることなんてないし。それなら散歩で気晴らしでもした方が、よほど建設的でしょう。――そういえば、貴方は大丈夫？　私に付き合っている暇なんてあるの？」
「ご心配なく。もう数分も付き合ったら、仕事に戻りますよ。僕の方も、休憩をかねているからね。……ただ漫然と休養を取るより、僅かな時間でも麗しい女性と共にある方が、疲れが取れる。合理的な判断じゃないかな？」

茶化してはいるが、自分を案じてくれている、その心持ちはありがたかった。彼の同情さえ、この身で受けるには過ぎたるものだと、セリアは思う。

「ここからだと、すぐに庭まで出られるわね。園遊会気取りで、見回ってみる？」
「警備兵が巡回している中、遊び気分ではいられないだろう？　まあ、他人が忙しそうにしているところで、悠々と時を過ごすのも贅沢のうちかもしれないが」

セリアは、そこまで危機感を忘れて過ごすつもりはない。いわれ

てみれば、不適切な発言であったことに、彼女は気付いた。
そもそも、彼と共にいられるのが数分程度なら、このまま王宮内を歩き回るだけでよいのではないか。気晴らしとしては、それで満足すべきだと、セリアは理解する。

「やっぱり、やめておくわ。退廃的な娯楽に浸るには、まだ早いと思うの」
「だろうね。――なら、どうする？」
「ここの、王宮での貴方の仕事場に、案内してくれる？　ここからはちょっと遠いかもしれないけど、役人の詰め所は、ここに幾つかあったでしょう？　一つでも、案内してくれないかしら」
「いや、さほど遠くはないよ。五、六分もあれば着く。……僕らの仕事振りが気になるのかい？　……残念だけど、お勧めできないな」

少し躊躇うようではあったが、カイルは遠まわしに拒否した。目を泳がせて、相手を直視しない。彼は、この年下の女の子の扱いに困った時、いつもそんな態度を取った。そしてセリアは、それを良く覚えていた。

「そんなに、嫌な物かしら。私にとっては、他人事ではないのだし……出来る事があれば、遠慮なく申し付けて欲しいくらいなんだけど」
「頼むから自分の立場と言う物を自覚してくれ。君は戴冠式こそ行っていないが、確実に今、この国家の頂点にいるんだ。――セリア殿下に命令できる者なんて、存在しないんだよ？」
「……自覚はしているわ。申し付けて、というのは率直過ぎたかもしれないけど、私だって何か手伝いたいと思うのよ。でもどう手伝ったら良いか分からないから、ぜひ指摘して欲しいって言ってるだけなんだから」

彼に限らず、皆が必死でこの国を立て直そうとしている。その姿を見ておきながら、自分だけ悠々と、怠けていたくはない。無理にでも仕事を見つけて、それに励みたいと、セリアは考えるようになっていた。

もしかしたら、ありがた迷惑かもしれないと、多少の懸念は感じていたが――試みてみなければ、わからないこともあるだろう。そう、セリアは前向きに考えていた。

「やることがない、というのは、それはそれで結構なことだと思うけどね。無闇に働こうとするより、どっしりと構えて、事の進展を待つのも手だと僕は思うよ？」

「――下手に触られても邪魔だって、そういうこと？」

「誤解を恐れず言うならね？　……背伸びは、しないほうがいい。現状、外交的にも軍事的にも、王位継承者にやらせる仕事はない。戦後には嫌でも忙しくなる身なんだから、今のうちに休んでおくのが一番いいよ」

カイルが案内したくないということは、彼はそれなりの仕事を任されており、その重要性を理解している、ということなのだろう。そして理解の浅いセリアを関わらせることは、両方にとって不幸な結果を呼び込みかねないと、おそらく彼は考えているのだ。

ならばセリアは、配慮しなければならない。今カイルの見識を疑うことで得られる利益など、欠片もないのだ。

無能ぶりをひけらかして失望されるくらいなら、まだ時期を待って、慎重に策を練るべきだ。彼がやるな、といわれれば黙って見ているし、休めといわれれば部屋にも戻ろうと思い直す。

「そういえば、カイル様のお仕事って、詳しく聞いた事はなかったわね？」

ただ、この場で何も聞かないまま、彼と別れるのも芸がない気がした。だから、セリアは相手の時間を拘束することを承知の上で、質問を重ねる。

「私の仕事について端的に述べれば、外交官、という役職に属するといっていい。宰相閣下の使い走りと言った方が、正しいかもしれないがね」

外交官、というのがどんな職業であるのか。セリアは想像するしかない。印象としては、外国に派遣されるか、駐在し、外国との交渉や交際を行う役職……と思われるが。

「まだまだ修行中の身だから、そう深い所までは関わっていないけれどね。貿易条約の締結や、相互援助の取り付け、亡命者の返還など。その手の大事は、全部ギルスター宰相が取り仕切っている。僕はその中で、いくらかの役目を与えられているに過ぎないんだ」

「人によっては、その『いくらか』の役目を務めるのに、生涯をかけるものよ。『お飾り』の王位継承者を務める私だって、例外ではないわ。……使い走りでも出来ることがあるのなら、それは誇りに思うべきじゃないかしら。特に外交に関わることなら、国家の大事といっても間違いではないし。この戦争だって、そもそも外交の失敗から起こった事だと考えれば、どんな些細な仕事でも、軽視してはいけないことだと思わない？」

本来なら、これは宰相ではなく、外務大臣が行うべきことである。しかし、オルス王は内政に限らず、外交の主権をも手中に収めたがり、あえてその役職を置かなかった。前任者を解任してからは、自ら外交を主導していたのだが――それで良い結果が得られていれば、そもそも戦争など起こらない。

現在、ギルスターが、彼の尻拭いを行なっている最中なのであろ

う。そこで、カイルがどれほどの役割を担っているのか。少し、気になるところではある。

「言葉もないね。どうも君の方が、僕よりも外交官としての才に恵まれているらしい」

「謙遜？　それとも、それでお追従のつもりなのかしら。心無い賞賛は、不愉快ね。……まあ、カイル様と私の仲だし、いいけれど」

「――しばらく見ない間に、随分と気難しくなったね。初陣は、そこまで君を変えたのだろうか？」

「どうかしら。もしかしたら、化けの皮が、はがれただけなのかもしれない。元々の私が、こんな風に意地悪くて。いままで、表面だけ取り繕っていたのかもしれない。……よく、わからないけど」

「わからないなら、わからないままでいいさ。誰だって、自分の汚い面からは目をそむけたい。自覚しない方が、幸せなこともある。僕は、今の君も、それなりに魅力的に見えるけど」

「結構なことね！　不細工とか不景気面とか言われるよりは、よほどマシかしら。――なら、もう少し付き合いなさい。仕事がない分、暇を持て余すのよ。私の無聊を慰めるのが、今の貴方の仕事ってことで、納得してくれる？」

セリアの申し出を、カイルは仰々しい仕草で一礼しながら、微笑みを浮かべて答えて見せる。

「仰せのままに、お姫様。これでも多忙を極める身の上ですが、ひと時の間、殿下にお付き合いしましょうとも」

「ありがとう。……でも、言う割には、あまり飛び回っているような印象は受けないけど」

「そうかい？　これで結構、苦労している方だと思うんだけどな。――まあ、仕方ないかもしれない。いい意味でも、悪い意味でも、秘密主義だからね。うちの閣下のやり方は」

だから、水面下のやり取りや、裏方の頑張りが見えないのか。ならば、多少は情報を公開すればいいものを、とセリアは思う。そうすれば、少なくともカイルの苦労くらいは、察してやれるはずなのに。

「今も、トリアの外交官たちは、多くが外国で働いている。僕は運良く……というのも微妙かな。ともかく、この事態に居合わせることが出来たけど、何事もなければ、今頃はガレーナに出向していただろうね」

それはそれで、大変ではなかっただろうか。仮想敵国から、完全な敵性国家に変化したガレーナに、取り残されるカイル。その図を思い浮かべると、なかなか愉快ではない想像が、セリアの頭を駆け巡った。

「心配したかい？」

「もし、そうなっていたらね。でも、案外カイル様なら、難なく切り抜けたんじゃないかって、そんな気もするの」

「さて、どうかな。――まあ、仮定の話は意味がない。与太話は、ここまでにしておこう」

多少なりとも恋心を抱く相手であれば、意味のない会話でも楽しめるものらしいが、二人ともそのような恋愛とは縁がない。

互いに、気まぐれな好意による暇つぶしを行っているだけだ。セリアもカイルも、その点は割り切っているし、だからこそ適当に話題を変えながら、軽いお話も出来るという物だった。

「与太話、ね。それはともかく、カイル様は、あの宰相殿の側近……なのよね？　会議での内容を見る限り、仲が良いとは思えない。

あれで、上手くやっていけてるの？」
「部下であることに違いはないけれど、側近というほど深い仲ではないかな。私は外交官で、形式上では、宰相閣下の直属になる。業務上でも接することが多いから、色々と話しやすい相手では、あるかもしれないけどね。……あれであの人は、正直さを好むところがあるんだ。媚びや追従を嫌い、不愉快でも実直な意見を好む。だから、傍目には意見を戦わせるほど険悪に見えても、実際にはたいした隔意は抱いていないんだよ。お互いに、ね」

やけに軽く、楽しげにカイルは語った。これは割りきりがいいと言うべきなのか、どうなのか。セリアは、少し悩んだ。
あるいは、カイルは想像以上にギルスターにとって近しい存在なのかもしれない。ここまで本音らしきものをぶちまけておきながら、気負いは微塵も感じられなかった。彼が恐れ知らずの向こう見ず、というのであればともかく、そうではないのだから――セリアはそこに、何らかの意図を感じざるを得ない。

「もし事実なら、案外ギルスターも、見た目ほど狭量でも小人でもないってことね。狡猾であることは、間違いないでしょうけれど」
「まあ、私情で公事を計るほど、愚かな人ではないってことさ。僕も彼のことは、あまり好きじゃない。でも、他人の才能は素直に認めるし、実力に見合った報酬も用意してくれる。ギルスター殿は、本気で国家の為に、自身を犠牲に出来る人だよ。なるべくして、宰相になった。そう評価していいだろうね」

カイルの言葉を否定する材料を、セリアは持ち合わせていない。だから、彼がそう評すなら、きっとそうなのだろうと、彼女は素直に納得した。なればこそ、どうしても協力を得たい相手でもあるのだと、改めて認識する。

――意地の悪さはさておいて、とにもかくにも、ギルスターの影響力は大きい。明確な味方として、こちら側に引き込めたなら、どんなにいいか。

とはいえ、彼はセリアの父によって権限を削られ、降格された過去を持つ。ギルスターはそこまで存在感のある臣であり、グレイ王と比べて、器量に劣るオルスが使いこなせる相手ではなかったのだろう。

はたして、己は父を比べて、器量が勝っているのか、劣っているのか。ギルスターを使いこなせるかどうか、出来るならそれにこしたことはないが、もし出来なかったら？　……心して、かからねばなるまい。

「おっと、そろそろ時間かな。僕はもう仕事に戻るけど、あまり羽目を外さないようにね？　君は間違いなく、この国の重要人物なんだから」

「子供じゃないんだから、それくらいわきまえてるわよ」

「じゃあ、今日は早めに休むことだね。明日までに、決断すべきことがあるだろう？　それに、備えないと」

カイルが、彼女の散歩に付き合ってくれたのは、ここまでだった。

結局、セリアはこの後すぐに自室に戻り、そこで食事を取った。どの辺りを歩きまわったのか、そもそも散歩することに意味はあったのか。就寝する頃には、もう全てがおぼろげだった。

ただ一つ、有益なことがあるとすれば。それは、カイルが無警戒に話してくれたこと。

自分はまだ誰にも見放されておらず、その気になれば、協力してくれる人が、いくらかいる……という事実が、確認できた。

これなら、やりようはあるだろう。そう、セリアは結論付けた。ここまで考えてから、ようやく、彼女は安眠することが出来たので

ある。

カイルは、セリアの動向、特に態度や口調について注意深く観察していた。

会議の最中は、歳相応と言うか、未熟で愚かな部分も良く見受けられたのだが、その裏で何かしらの計算も、働かせていた様でもある。

彼の見立てでは、単純に傀儡として操るには、半端に賢し過ぎるように思われた。

「活かすにしろ殺すにしろ、今はまだ待つべき時だ。それまでに、いかなる資質を我らに見せるか。それ次第で、扱い方を決めればよかろう」

ギルスターが、カイルに向かって、そう諭す。

ここは、宰相の執務室。充分な広さと、贅沢な調度品。まさに一国を担う人物が、権謀を巡らすに相応しい場であった。そして、この場に入室を許されたカイルも、また只者ではない。

彼はセリアに向けていた穏やかな表情とは、また違う仮面を被って、この場にいる。それはまさに、見るものが見れば奸臣として蔑視されかねないような、そんな顔でもあった。

「姫様は、もうお休みになられたか？」

「はい。傍付きの者が、寝室に入るところを確認しております。――とりあえず、単騎で逃亡を計るような愚かさは、持ち合わせておらぬようで」

「当たり前だ。逃げるにしても、どこに逃げろというのだ。冗談も、時と場合を考えよ。お前は、自分が分別のない馬鹿だと思われたいのか？」

ギルスターが、渋い表情でカイルをたしなめる。彼は、いささか諧謔を用いすぎた。冗談としても、不謹慎に過ぎる。

この男は、あれだけ愛想良くセリアに接していながらも、内心での評価はかなり低い位置にあるようだ。それがギルスターには鼻につき、不快でもあった。

まったくもって屈折しているが、ギルスターはセリアを『可愛がりたい』と思っている。

そして出来るなら、自らの主君として相応しい器となって欲しいとも、考えていた。だからこそ、カイルの不真面目さが癪に障るのだ。

「貴様といい他の連中といい、姫様を軽んじすぎる。あの方は決して阿呆ではない。そして何より、他者をいつくしむ心をお持ちであられる。王としてはまずまず適格であるといえようし、先代と比較しても、心から敬意を抱くに値すると、私は思うが？」

「しかし同時に、セリア殿下の愚直さ、賢しさ。それとは相反するような感情性と無思慮さを、憎んでもいる。――宰相閣下も、複雑なようですな」

「言葉が過ぎるぞ。……私は、この国を見捨てない。王家も、同様だ。理由までは、言わなくてもいいはずだな？」

「はい、理解しているつもりです。閣下が長い年月を掛けて積み上げた、この国の地盤。それを愛するがゆえに、閣下は、王国の全てに限りない慈しみを持っておられる。それゆえにいかに王家が愚かであれ――」

「他国者に蹂躙されることを、私は許さぬ。……貴様の言は正に真実そのものだが、いささか、くどい。言わなくても良いことまでべらべらと喋る癖は、近いうちに直しておけ。わしはともかく、王家

に対して不敬であろう」

いくばくかの不信と不義を、胸のうちに秘めていはいるが――心からの忠誠をこめて、ギルスターはセリアを玉座に据えたがっている。どこかの不心得者と違って、彼は本気なのだ。当然、けなされて面白いはずがない。

「あの姫様は長男と違って、父君の悪い資質を受け継いでおらぬ。担ぎ上げる対象としては、及第点といってよい。とにもかくにも、我々を信任する程度の器量は、持っておるのだ。――無責任な保身を図ることは、まずありえまいよ」

「でしょうね。下らぬことを申し上げました。……お許しを」

カイルは詫びるように、頭を下げた。不敬な口を利いても、謝罪すれば許される。そうした確信がなければ、彼は最初から批判するようなことは、言わなかったであろう。

「ふむ。しかし、そこまで姫様は、頼りなく見えたか？」

「はい。あのような年頃の少女であれば、仕方なきことと思いますが……ギルスター様も、同意見なのでは？」

もしギルスターが、彼の意見とは異なり、初めからセリアに王者たる資質を見出していたなら、『姫様』などと言わず、『殿下』と称したに違いない。そしていつまでも曖昧な立場のまま放置せず、即座に王位継承の儀を行わせたはずだ。

それをしなかったということは、ギルスターにもセリアに対して含むところがあり、己の主に足りえるかどうか、判断しかねているのでは……と。そうカイルは考えたのである。

「ああ同感だ。若すぎる、というのもあるが、覇気に乏しく見えた。

強がっているようだが……姫様に対する評価は、今も変わらん。せめて、トリア中興の祖、トリスの如き気概に満ちていれば……というのは、流石に比較の対象が悪すぎるか。まあ、これから奮起していただければ、それで良かろうさ」

トリスとは、オルスより四代前の国王である。女性ながらも過酷な権力闘争に打ち勝ち、見事国内の敵を粛清すると、民政に軍事に外交にと、国王の権力を最大限に活用し、トリア王国を繁栄させた。その性格の灰汁の強さゆえ敵も多かったが、彼女を慕う者も数多かった。

ともすれば圧制とも捉えかねない彼女の手腕は、絶妙な政治感覚と相まって、良い方向へと進化する。結果から言えば、トリスの存在はトリア王国を強国にする為にあった、と評せるであろう。当時は、彼女の強烈な個性が必要とされていたのだ。

オルスの強硬な政治姿勢も、父グレイへの反発以上に、このトリスへの情景があったのではないかと、ギルスターは考えていた。オルスは資質もなければ判断も誤ったが、セリアはあらゆるものが未知数である。不安があるのは確かだが、かといって、代わりのきく置物ではないと、正しく評価してもいた。

「会議では、今後の行動は、彼女の判断に一任する……ということでしたが。本当にあれで、よろしかったのですか？」

「この戦い、勝ち残るのは難しい。負けるのは容易だが、負け方にも工夫を凝らす必要がある。今更その必要性は述べまいが……そうさな。姫様に一任したのは、その布石、といったところか」

ギルスターは、敗北を予期している。勝てるものなら勝ちたいが、負けたときのことを考えず、無策で暴れまわるのは愚だ……と。この辺りは、カイルも異論はない。

「敗北の責任を、彼女一人に押し付ける為、ですか？」
「そこまで露骨な言い方は……まあ、わしもそれに近いことを言ったが、意図する所は違う。肝心なのは、姫様の思考を誘導すること。そのために一晩を空けたのだし、責任を自覚させたのだ」

つまり、ギルスターはセリアの考えを一点に集中させ、思い悩ませること。それだけを目的に、会議を動かしたことになる。カイルは理解できなかったが、何かしら意味があるのだろう。疑問を抱いても、いつも素直に答えてくれるとは限らない。それよりは沈黙し、次の言葉を待ってから、核心を突くのがよい。

「わからん振りをすることはないぞ？　最大の利益を狙うならば、徹底抗戦でも降伏でも不都合だ。お互いに価値を認め合った上で、折り合いをつけるのが最善の手であろう」

別にとぼけているわけではなく、本気で意図を掴み損ねていたのだが、あえてカイルは訂正しなかった。ただ、振る舞いだけは平静を装い、問う。

「価値を認め合う……？　ガレーナとですか？」

トリア王国は、もはや彼らにとっては単なる敵だ。今更国交を回復させた所で、戦争の恨みを忘れることは難しい。わざわざ面倒な道を選ぶ義理など、連中にはないはずだった。

「今回限りになるかもしれんが、な。こちらの利用価値を提示して、引き下がらせる手がある。わしの言う、交渉の伝手にも直接関わることで……まあ、詳しくは聞くな。実際、その手を使うことになるかどうかも、不確定であるしな」

追求するな、とギルスターが言うならば、カイルとしても引き下がるしかない。
彼にとって宰相は、直属の上司であり、尊敬できる年長者であり、引き立ててくれる恩人でもあった。時折挟むジョークは別として、あえて不興を買う行動に出るなど、論外である。

「聞けば、お前が不快に思うだろう。今の内から、嫌な思いをすることはない。――それに、だ。案外、全て上手い様にいくかもしれんぞ？　たとえば偶然の一勝から、あらゆるものが覆り、逆転してしまうかもしれん。ま、これは単なる願望だが」

引っ掛かる言い方だが、カイルは何も答えなかった。ギルスターの頭脳に、いまだ陰りはない。この人が言うのだから、必要なことであろうとカイルは思う。そこに、個人の感情を差し挟むほど、彼も子供ではなかった。
雑談を交えた、報告と分析の時間は終わりだ。彼らには、他にもなすべきことがある。一事に割く時間は、限られていた。

朝、セリアは久しぶりに安眠できたおかげか、起床に身支度、食事に至るまで、平常時と変わらぬ様子で済ませていた。これから大事に臨む身としては、万全の体調でいられることを、まずは喜ぶべきだろう。
――昨日感じた、緊張やら重圧やらは、もう忘れられたみたい。

己の神経の図太さを、本気でありがたく感じていた。戦場での出来事も、会議でのやり取りも、きちんと覚えているというのに。負の感情だけが、心の中から綺麗に取り払われている。食欲と睡眠欲が満たされれば、大抵の悩みは消える。何一つとして、汝は解決されていないのに、能天気なものだ――と、人事のように思った。

実際問題、いざ立ち向かうとなると、気後れしかねない状況に、セリアはいる。

国家の進退を決めるというのは、非常な大役だ。心構え一つで、全てが上手くいくわけではないし、決断の責任は、どこまでも彼女に付きまとうだろう。

「おはようございます、姫様。これで、全員そろいましたな」

セリアが会議室に足を踏み入れた時。すでに群臣たちは席を埋めていた。

ギルスターや、カイルの姿もあった。夜遅くまで政務をしていたのか、疲れた様子が見て取れる。

「では、これより会議を始めます。議題は、ガレーナに対する方針の決定」

カイルが口火を切り、そう述べた。

「この戦争の収め方について、セリア様より決定が下されます。以後、我らはその意思を元に、実務的な面の詰めを行います。皆さん、この場での論議で、全てを決める心積もりでいてください」

セリアはカイルに感謝の意を込めて、視線を向けた。

ギルスターに会議を主導されるよりは、彼の方がまだ話しやすい。

カイルがどちら寄りの立場にあるのか、彼女はまだ判別が付かないけれども、顔見知りに先導してくれるなら、多少は気が楽になる物だ。

――ひと晩、考えた。その結果は、芳しいものではなかったし、今でも悩める物なら、悩み続けたいと思うくらいだけど。

もはや、そんなわがままが通るような状況ではなかった。だからこそ、セリアはここで、己の意思を示す必要があった。

それは、一つの覚悟。自分が国家を背負い、自身の決断を持って、あらゆる責任を担うことを、誓約する行為でもある。戦うにしろ逃げるにしろ、彼女は自らが決めたことを、最後までやり遂げる義務があった。他の誰にも変わってやれない、特別な役割であった。

「……よろしいですな？　殿下」
「よろしくない理由でもあるの？　宰相閣下」
「いえ、別に。――では、ご決断を」

後の話だが、セリアは思う。
もし、このとき。誰にも、何の事象にも影響を受けず、己の思考のみで決断できたなら。……それだけの強さがあったなら、もっと違う道を歩めたかもしれない、と。

「失礼！　急報です！」
「何事か、騒がしい」

会議室の扉が、ノックもなしに開かれた。
ギルスターが、突然の訪問者を咎めるように言う。いかに急を要する用件であったとしても、守るべき礼儀はあろう。このとき、まったくの偶然であろうが、ギルスターとセリアは、同じ感想を抱い

ていた。
何を急いでいるのかは知らないが、決断に影響するものでないのなら、少しは自重するべきだと。――しかし結果だけを見るなら、彼らの推測は、外れる。

「シュウ万翼将が、ガレーナ軍を撃破！　敵軍は一時撤退を余儀なくされた模様！　我が軍の損害軽微、引き続き戦闘を続行するとのことで御座います！」
「……へぇ」

感嘆の声を上げたのは、セリアただ一人であった。
他の者どもは、言葉もない様子で、伝令兵からの報告を受け入れることさえ、困難な様子であった。

「……何かの間違いではないのか。いや、そもそも、そのシュウとやらは何者なのだ。聞いたことがないぞ」
「私はただの兵卒でありますので、なんとも。……伝令の内容を、復唱いたします。ガレーナ軍は我が軍に撃破され、撤退中であります。シュウ万翼将は体勢を立て直しながらも、戦闘を継続しております」
「私達は、まだ負けていない、という訳？　――あの男、とんだ掘り出しものね。ここまで都合が良すぎると、帰って疑いたくなるくらいに」

他の出席者が、いかに疑問を呈しようと、セリアにとってはどうでも良いことだ。
己の為した行為が、間接的にこの場を制している。シュウに軍を任せたことが、ここで生きた。喜ぶべきことだと、本心から思う。
――でも、少しだけ、悔しい。私は、背中を押されて決断するので

はなく、完全に自らの意思だけで、行動を決めたかった。誰かの影響を受けて、それに便乗する形で宣言することなんて、望んでいなかったのに。

それでも、現状、この事実を活かさない手はない。セリアは驚愕に染まる場の空気を、そのまま別の方向へと転換させる為、言葉を紡ぐ。

「一時の勝利であれ、これを利用しない手はないわ。前に出て戦うべき。城に篭っては、機会を逸する」

「お待ちください。もっと詳細な情報が入るまで、待つという手も――」

「情報が正確でない、あるいは間違っている可能性は、この際考えるだけ無駄というものよ。……待っていれば、道理が覆るとでも？

現状、劣勢であることに変わりはない。万に一つでも勝機があるなら、そこにすがるべき。――緩やかに破滅を待つくらいなら、私はいっそ全財産を賭けて、生死をその選択に委ねたいの」

前日のギルスター宰相の提言などについて、この時のセリアはすっかり頭から抜け落ちていた。率直に、忘れ去っていたと言っても、間違いではない。

智恵熱が出るほど考えすぎ、自らの責任を胃痛に変えるほど自覚が進んでいた彼女は、ぽっと目の前に現われた希望に対し、無防備な素顔をさらさずにはいられなかったのだ。

「姫様の決意は、すでに表明された。臣は、その選択を支持いたします」

「ギルスター。私が言うべきことは、もうない。そう解釈して、よろしいのかしら？」

「はい。後は臣どもで、まとめますゆえ……お疲れなら、下がられ

ても結構です」

セリアは、悠然と席を立った。そして、自室へと向かうと、ベッドに倒れこみ、一人物思いにふける。

――嘘でも、いいわ。最後に、こんな晴れ晴れとした気分になれたのなら。私の決断の正しさを、どんな形であっても、確信できたのだから。

彼女は、シュウとの出会いに、運命的な何かを感じざるを得なかった。好ましいのか、うとましいのか、未だに結論は出ないけれども、あの男が助けてくれた。そう思うだけで、気持ちが軽くなる。

――これだけで勝った、だなんて思わない。でも、歩むべき道が見えた。自力で切り開いたか、他人に導いてもらったかの違いは、あるけれど。それでも、やるべきことだけはわかっている。

セリアは、会議の内容を頭に叩き込みながら、思考を続けた。口は出さずとも、理解が及ぶ範囲で、事態を把握していかねばならぬ。

そうすることが、以後の発言への原動力となり、ひいては自らの立場の強化にもつながるのだと、信じていた。近く、自身の立場を表す時に役立つであろう情報は、全て暗記しておくべき――。

セリアの打算がそこまで進んだところで、会議はもうおおよそ決していた。

すなわち、再出撃。意外というか当然というべきか、主導したのはギルスターであった。

しかし、セリアがその軍に同行するかどうかは、問題にされなかった。暗に否定されているようで、彼女は居心地が悪くて仕方がなかったが、あえて反論はしない。

必要な時、来るべき時の為の待機なのだと、そう思って。
セリアは、すでに決断した。ならば、後は行動するだけだった。
主に行動するのは他人だが、己もそれをただ見守るだけでは済まされないことを、何となく感じ取っていたのだった。

第十二章　前夜（後書き）

正月でも関係なく、色々と忙しく、余裕のない日が続いておりますが、どうにか投稿までこぎつけました。

しかし……私の小説の場合、たびたび修正が入るのが、普通だと思ってください。

どうにも、見直しが下手なようで、意識しないうちに、妙な部分が残ることが多いです。

もしなんらかの矛盾などが見つけられた場合、お教えいただけたら幸いに思います。

では、また。次の投稿で、お会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7003k/

トリア王国のセリア姫

2011年1月3日21時02分発行